

リボーン×東方～外界異変～

Lan9393

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ここは、伝説の幻想郷とも、枯れ果てた幻想郷とも違う、もう一つの幻想郷。

外界との繋がりが最もある幻想郷である。

その幻想郷の博麗神社には、とある『しきたり』があつた――。そんな幻想郷の『しきたり』に巻き込まれた少年は、姿を消した『二人』と今を生きるため、過去へと戻るのだった。

――そんな、交わるはずのなかつた二つの世界の住人たちのお話。

タグ通り、クロスオーバー作品です。  
のんびり亀すぎる更新ですが、どうぞよろしくお願ひいたします。

## 目 次

### 番外編及び設定

東方キャラクターたちの設定 1  
クリスマス風景／全組／  
バレンタイン！／とある四組十二人の甘い話？／  
現在／外界異変の始まり／

### プロローグ

一話：訪問者につき頭上注意?!  
二話：訪問者につき怪我注意?!  
三話：訪問者につき前方注意?!  
四話：訪問者につきスキマ注意?!  
過去／並盛の物語／

五話：並盛、とある家族と女の子  
六話：快活少女と紅白巫女！  
七話：爆発と疑惑  
八話：風紀委員と紅白少女  
九話：訪問者?!  
十話：束の間の静寂？  
十一話：フラン「えーい！」ツナ「ぎやああ?!」  
十二話：紅白はカウンセラー兼・・・  
十三話：ガキ牛と新たな人の登場の予感？  
十四話：ランキングフウ太。  
十五話：兄と妹、紅白巫女とマフィアボス（未定）。  
十六話竹寿司。

十七話：理科の授業で

十八話：お説教とお勉強

十九話：作業開始

二十話：嘘は良くない（震え声）

二十一話：「妖夢強い」

二十二話：ポイズンクッキングおにぎり

二十三話：おにぎりおにぎり。おにぎりいっぱい

二十四話：ハンバーグ

二十五話：オカイモノ

二十六話：笑み

二十七話：○○○○病（笑）

二十八話：デイーノと少女

二十九話：デイーノの人探し

三十話：パーティー会場の悲劇

三十一話：デイーノとレミリア

三十二話：記憶喪失の少女と王子

三十三話：少女の居場所

## 番外編及び設定

### 東方キャラクターたちの設定

\*ボンゴレリングに例えると

靈夢→大空

魔理沙→嵐

妖夢→晴

アリス→雲

咲夜→霧

早苗→雨

レミリア→雷

#### \*設定

注意：あくまで東方キャラクター内の関係を書いています。レズウ的な展開はありません。

博麗靈夢

主ヒロ。

男嫌いの巫女。

甘いものが比較的好きで、恋愛感情や友情に疎く、そういういたものに興味がない。

興味のないものには冷めた態度をとり、興味のあるものは優先的に、積極的に関わつて行く。男でないかぎり。

自由を阻害されるのが嫌いで、自分の思つたように行動できる空間が好き。

それと同時に、努力も大嫌い。

博麗の巫女という『しきたり』に縛られた役職を嫌い、常に妖怪退治、異変解決以外の仕事はしない。

天才というべき存在で、生来からもつた靈力（力）が強く、妖怪からも人間からも浮いている存在。

努力をすることをやめた天才は、なにかのためにと言うことはしない。

浅くもなく深くもない友好関係を築いている。

### 霧雨魔理沙

元気いっぱいな魔法使い。

しかし行動も口調も性格も男勝りで、無鉄砲。

「弾幕はパワーだぜ！」・・・なんでも力任せに解決しようとする。努力家だがそれを自慢しない。しかし、自信過剰なところと、相手を見て「強そう」、「弱そう」としか考えない慎重さに欠けた性格から、よく靈夢以外の強者に負けたりすることがある。

なにかにひつつくのが大嫌いで、ついでに雨も嫌い。努力することを諦めた人（靈夢を除く）も嫌い。

わがままなことはないが、少しだけ口うるさい。

自分のやっていること、やりたいことを邪魔したり横槍をいれたりされるのが嫌いで、されると怒って凹む。

靈夢がお気に入りで、大好き。

規則や礼儀といったしつかりしたものを嫌う。靈夢と同様に自由が好きだつたり。

芸術的センスがなかなかあつたりなかつたり。

### 魂魄妖夢

真面目で、一途。恩義や気持ちと言つたものを尊重・大切にし、常に明るくいようと心がけている。

しかし、刀を抜くと途端に冷酷な性格になつてしまふ。

白玉楼という冥界に暮らしている半人半靈。

靈夢と同じように、男が苦手、というより関わったことがない。からわからない。

自分の血縁者や主人以外の人気が苦手。男はそれ以上に苦手。色恋はまったく無縁の生活をおくってきたため、知らない。庭師や従者を兼任しているうえに剣の修行も怠らない努力家。

魔理沙とちがつて芸術的センスは皆無。しかしそれ以上に運動神経がいい。

剣の修行の相手がいたら遠慮なく斬り、防がれると喜びを浮かべる。

結構な戦闘狂だったり。

呼べばやつてくる半靈は感覚共有している共同体。

幽靈が怖くて怖くてしかたない。

人に嫌われる感情も知っているため、嫌われるのも怖い。

## 十六夜咲夜

人をからかうのが好きなメイド。

からかうだけでなく、騙そうとする態度もとつている。

人を殺す感覚を知つており、そのせいか一步後ろへ下がつた態度をとつてている。

やや怖いもの知らずで。恐いもの見たさにおばかなことをするとも。

そういう意味では無鉄砲とも言える。  
だがまあ慎重な性格である。

バランス感覚、投擲したもののコントロールも上手く、マジックも得意。

主人LOVE。

規律や礼儀にうるさく、自由なんてない、と靈夢、魔理沙の意見とは正反対の意見を持つ。

自分の意見に賛成する人には、笑顔を持つて対応する。

戦闘狂な妖夢を気にかけておりその後処理を担当している。

主人などの大切な人のための努力は惜しまない。

しかしそれ以外の事柄については靈夢同様努力なんてくそくらえとか思つてゐる。

努力については、自らでも矛盾してると自覚している。

靈夢に憧れをもつてゐる献身的な巫女その二。

純粹で明るい。たまにキヤツハーすることもある。

根本的な性格はお人好しで面倒見のいいお姉さん。

しかし、夢見がちな性格もあつて、少々めんどくさい子、と取られる場合も。でも好きな人には普通に可愛いと思われる。多分。

奇跡、運命、白馬の王子、靈夢を信じてゐる。

けしてバカではない。飲み込みの早さ、状況判断能力は幻想郷トップクラス。

現代っ子なだけあつて、情報に敏感。

噂話とか大好き。つていうか人と話すのが好き。

キラキラした目に靈夢でさえ敵わない。

咲夜にからかわれ、妖夢と仲良くするのはいつものこと。

結構、運動能力も頭もいい。

将来は教師を目指そうとしていたらしい。

狂氣が一番苦手。

### アリス・マーガトロイド

孤独な人形遣い。

人との関わり方が全くつかめない冷静沈着、少しきみしがり。

進んで関わろうとしたことはないが、人形を作りながら誰かこないかと待つていていたり。

話はわかる人だからコミュニケーション能力さえ求めなければまともな人。

結構きてくれる魔理沙と妖夢は仲良し。

知識の塊。だつてやること少ないもん。

暗い人と思われがちだが、笑顔は忘れないツツコミ。

この頃魔理沙がボケすぎて辛いと靈夢に相談している。

人形大好き。だつて可愛いもん。

周りの人からはとつつきにくく、頭の硬い人と思われてゐるらしい。

本人知らないしかたない。

いじられることに慣れていない。

妖夢が癒し系すぎて助かることがしばしば。  
この人の人脉に謎が多い。

レミリア・スカーレット

高貴でかつ凜々しく美しい口リ吸血鬼。

・・・かと思わせぶりな豆腐メンタル吸血鬼。

その豆腐メンタルが、冷静沈着な咲夜の忠誠心を勝ち得た。  
カリスマ恐るべし。

その計算高さから智将とまで噂された戦争上手。

智将だけでなく、『紅の主』なんて噂されることも。

運命を司っているなら当たり前ですよね、なんて言つちやいけない。

妹大好き。でもお姉さんらしくないといけないからベタベタできない。

この気持ちをどうすればいい!と咲夜に叫んだことがある。

血をみると吸血衝動に苛まれる。

血を吸うのはあまり得意でない。

世渡り上手だが情報に疎くそのあたりは咲夜任せつきりなことも。

紅茶とコーヒーだつたらコーヒーが好き。  
ホットミルクはもつと好き。

ブランドール・スカーレット

狂気に憑かれた薄幸口リ吸血鬼。

元は明るく無邪氣で、ヒヨコのようにてちてちとついていくタイプ。

すなわち妹。

しかし狂気にのつとられるとなんでも食い尽くし、壊し尽くしてしまふ。

その時の記憶は確かに残つてしまつてゐるからそのことから引っ

込み思案に。

自ら閉じこもるようになつてしまつた。

狂氣に壊されるよりも自分が壊した方がいい、という考えに行き着いてしまい、現れた人間を順番に「キュつとしてドッカーン」する。

お姉様大好きだから一緒にいたい。でも冷たい。

人の思つていることが理解できず、魔理沙に頼る。→地雷を踏む→あれれ？の永久ループ。

本当は仲良くしたい。けど難しい。

人はすぐ壊れてしまう、とある日を境にして関わるのをやめてしまつた。

恐怖心から、悪夢を見ることが多い。  
妖夢、魔理沙が良き相談相手。

# クリスマス風景（全組）

靈夢S.i.d.o

「メリープレゼントだぞ、お前ら」

「わあい！ありがとうリボーンおじさん！」

「リボーンありがとー！」

「————！」

三人が浮かれて喜んでいる。

そりやあ、まあ欲しかったプレゼントがもらえるのだからそうか。

サンタリボーンさんはプレゼントを持つて配り、ガキ牛には鉄拳制

裁。

まあ、それでも甘くなつた方よね。リボーンさんは。

それを見て笑つていると、私の視界が揺れる。

すると、ズルズルと・・・はある？

「靈夢、ちょっとといいか？」

「・・・なんだ、綱吉か」

「何だと思つたんだよ？」

「なによ、部屋に連れ込んで」

綱吉が私を引きずるように自室へ押し込んだのだ。

少々ドキドキしているように思うのは、きっと氣のせいだ。

・・・綱吉相手にドキドキするのは、ちょっとおかしいと感じる私がいる。

でも、これが『恋人』というものなのだ。割り切れ、私よ。

だけれど未だに慣れない。男とこんな関係になることはなかつたから。だからつていつて女とあつたわけじやないけど。

「いいや、プレゼント」

「・・・へえ。中は？」

「・・・いるか？」

「中は・・・」

「いるか？」

「・・・いる」

綱吉は、「よしつ！」と満面の笑みで私にプレゼントの箱を渡す。さつきは真顔だったから…嬉しいっていうか、なんていうか…そんなのは気にせず、私は箱を開ける。するとそこにはブレスレットがあつた。

「これ…装飾品？よくもまあ手に入つたわね、あんた」

「あー。まあ、オレも十代目だし、な？」

言いたくないようになに頬をかきながら綱吉はそう言つた。

ふうん？面白そうだからからかうようにブレスレットを持ち上げて言つてやつた。

「権力にものを言わせたものならいらないわよ」

「わーわー！冗談冗談！働きました！アルバイトの結果ですー！」

「…『ボンゴレ十代目！女のためにアルバイト?!』

「記事にはなりません！」

なんだ、つまらないの。

私は早速それを右腕につける。

すると、その手が止められ、ブレスレットは左腕につけられた。

「なによ」

「いや…左手はさ、いつか薬指に指輪を贈りたいから…その代わり」

「…期待してもいいわけ？それ、プロポー…ひやあ？」

「いいよ？贈ることには変わらないからさ」

綱吉は私の耳に顔を寄せてそこで囁くように告げた。

ああもう恥ずかしいじやない！

クスクスと笑つた綱吉は、「前とは立場が逆だな」と言つた。

前…まだ私がボンゴレを理解していなかつた時だ。

あの時はまあ、綱吉もあまり心を許せない男だつたわけで。

「…ねえ、これ、着てくれる？」

「ねえ、これつて…サンタコス…？」

「うん」

綱吉はサンタコス（ミニ）を手渡した。

ミニつて…つまり、あれな長さなわけで。

私は綱吉にそれを押し返す。

「い、や！ なんてもの着せようとしてんのよ！？」

「靈夢サンタ見たい！ お願い！」

「嫌なものは嫌！」

しならくその口論は続き、ちょっとした『お願いの仕方』をされたら・・・私はしかたなく着ることになった。  
ぜつつつつつつしたい！ もう着ない！

獄寺 S i d o

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガ  
チャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガ  
チャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガ  
チャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガ  
チャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガ  
チャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャガ  
・・・ そんな音で俺は目が覚めた。  
何これホラー。

しかたなくドアを開けると、待つてましたと言わんばかりに俺に飛びついてくる女。

霧雨魔理沙だ。

「よう！ おっはよーさん、獄寺！」

「・・・なんの用だ？」

「なにいつてんだ！ 今日はクリスマスだぜ？ だから来てやつたのぜ

。おつじやまします！」

「・・・ああ、今日だつたな」

俺は霞む思考をシヤキッときせるため冷水を顔にかける。とまあ、魔理沙がきた時点である程度目は冷めているんだが。  
魔理沙は上機嫌で台所に立つた。

「・・・お前が作るのか？」

「おう。どつかの寝坊助のためにな」

「そうか」

ソファに腰掛けると、「反応が薄いぜ～」なんていいながらガサゴソ

と漁り出す音がする。

なにをしているんだ、あいつは。

台所を漁つてることは何かを作ろうとしている。確かあいつガサツだから……。

台所が荒地となりそうだ。

「んあ？ 獄寺、どうした〜？」

「いや、・・・手伝う」

「いっていいって！」

魔理沙は俺を台所から押し出そうとする。

その手をつかんで俺はまた台所に押し入る。

「・・・いいから。作るんだろう？」

「おう！」

「またバカなことを・・・」

「流石に荒地にはしないのぜ〜？」

「嘘つけ。前は何を作つても散らかしてたくせに」

「厳しいなあ・・・」

「そもそもがつ！！」

俺はビシイツと擬音がつきそうな勢いで魔理沙を指差す。  
魔理沙はびっくりして俺を見る。

「お前の家は足の踏み場すらないとはどういうことだ?!俺が行くたびに掃除しなくてやいけないとはお前どういう過ごし方して・・・うおつ？」

?!

俺の説教に飽きたか魔理沙は台所漁りを再開した。

なんだつてマイペースなんだ・・・！

台所が一瞬にぐちやぐちやになる。

「おい、魔理ツ・・・！」

「黙つて見てろつ！ 美味い飯食わせてやるんだからなつ！」  
「・・・！・・・あー、ならせめて片付けも自分でやつてくれよ？」

「それはヤダ」

「なつ?!ま、魔理沙！」

「あつはは!!まあまいじやねえかよ〜」

良くない、と叫ぼうとしたがやめた。  
魔理沙は袖をまくり早速作り始めた。

何だかそれを見たら叫ぶ気も失せてため息を吐く。  
必死になつてやつてくれようとしてくれる様をどうしても止めようとも思わない。

「……んじゃあ俺はあつち行つてるか」

踵を返してリビングを片付けることにした。

・・・その後、俺は台所を片付ける羽目になつた。  
まあ、飯は美味かつたからいいか。

妖夢 S i d o

山本さんは今日も忙しかつた。

試合だそうだ。

他の野球部さんはとてもブーイングをしていた。  
さすがに恋人さんがいる人もいたんでしようね。

私は試合を観戦したあと、寒いけれど山本さんのお家に向かついた。

どうやらお話があるらしく、試合が終わつたらきて欲しいとのことらしい。

まあ暇つていうか・・・クリスマスだから特に異論はないのですが。  
お話つてなんでしようか・・・?

「こんにちはー！」

「おう！妖夢ちゃんか！上で待つてくれ！」

「はい～！」

お家にお邪魔して、お部屋で待たせていただく。

山本さんのベッドに腰掛け足をぶらぶらさせる。

荷物から木刀を出して素振りでもしようか？

でも流石に人の部屋で素振りは・・・ものを壊したらまずいし。

私は荷物から木刀をちらつかせながら悩んでいた。

やがて山本さんが帰つてきたらしく部屋へ入つてきた。

ビクリと肩が震えてしまう。

「妖夢？」

「あ、えっと、お、おかえりなさいっ！」

「なんか、こうしてると夫婦みたいだなあ」

「ひやあ?!」

ふ、夫婦・・・。ニヤついてしまうより先に、私の後ろに、私を抱えるように座つてきた。

すごい接近してて、とても緊張する・・・！

「なあ、妖夢。話、なんだけどな？」

「は、はい・・・あ、あの、私になにか至らないところが？」

「・・・そういうことじやないんだけど。そうだなあ」

頭を搔きながら山本さんは言葉を選んでくださつてている。

私はただ山本さんに寄りかかつて待つ。

ぎゅうっと抱きしめられる。うう、恥ずかしい・・・。

「妖夢はさ、ちゃんと俺のこと、好きだよな・・・？」

「はいっ、好きですよ？」

ニッコリ笑つて見せると、くいつと引っ張られて口付けられる。

突然のことにあるふたするばかり。

「メリー、クリスマス、妖夢」

「きゅ、急になんですけど・・・？」

「んー? 言いたかつただけなのなー」

にやけた山本さんに「もう」とため息混じりにつぶやく。

肩の力を抜いて、なるべく不機嫌そうな表情で山本さんを見上げる。

私の顔を見てちょっと驚いたようにしてみせた。

「なんだ?」

「不安なんですかー?」

「いやあ、だつてさあ? こういうのつて再確認した方がいいかなつて  
「信じてないことになりません?」

「ないね。俺は妖夢が大好きだしな!」

「・・・好きなのと信じてるつて、意味が違いますよ?」

私が苦笑しながら言うと、山本さんは「お?」と目を見開いた。

「ふふつ。山本さん。大好きですよ」

「俺もなのな！」

私たちは笑いあつて、ベッドに倒れこんだ。

山本さんはすぐに寝始めてしまったようで、寝息が聞こえる。

・・・なんだかレアなシーンだ。

そつとその頬にキスを落とす。

---

レミリア Sido

「メリークリスマース♪」

「・・・ディーノ、あんたなにしてるのよ？」

「開口一番それか？ほら、もつとあるだろ？『ディーノ！私さみしかつた！』みたいな」

ディーノは私の部屋に入るなりそう叫んだ。

私がそつけなく返せばディーノは悲しそうに苦笑した。

ちよつとした小芝居があり、私は苦笑する。それにディーノは明るい表情を見せた。

が、

「私が自分から泊まりに行つたのにそんなこと言えるかつ」

「ぐはつ」

腹に一発拳を叩き込む。

久しぶりの対面。しばらく仕事で忙しそうだつたからという配慮。

私はその間沢田綱吉の家に泊まつていた。

その間は全く会わなかつたのだ。まあ、ディーノが怒るのは当たり前。

だが、こんなにも上機嫌で部屋を訪ねるなんて、到底あり得ない話。しかしそれは他の人間だつたら、だ。多少例外はあるだろうが、このディーノはその例外に値するだろう。

上機嫌な理由は、おそらく会えて嬉しいから・・・なんて、自惚れるようなことを考えてしまう。まあ十中八九そうであろうが。サンタの服装をしたディーノが何もないところでこける。

しかも、後ろへ。

ドジつていうか、不運つていうか……。

私は蔑んだ目で見下ろす。

「……あんた」

「いや、ちがつ！これは足を……！」

「関係ないわよ。ほら、早く起きなさい——」

クイツ「ひやあ？！」

私が助け起こそうと手を延ばせば、その手がデイーノによつて取られる。

引っ張られ、私はデイーノの胸の中へ……。

密着している。そう思つた私の心臓は信じられないくらいバクバ

クと鳴つている。

背中に手を回された上に手も取られ。

「つ……く！その手を離しなさい！」

「なんでだよ？」

「恥ずかしくてならないの！ほら、さつさと！」

「……なんでだよ」

ぎゅう、と抱きしめられる。

絶対心臓の音聞こえてるつて……！

彼の低い声にまた反応してしまう。

「……え？」

「なんで、会ってくれなかつたんだ？」

「だ、だつてあんたは、仕事があつて……！」

「その途中でもよかつたろうがつ!!」

くるりと視界が回る。気がつけば、デイーノが私の上に馬乗りになつていた。

辛そうで、悲しそうな目。

私がいなることに、そんな耐えられなかつたの？

「レミ、リアア……！」

「あーもう、はいはい。私が悪かつたわ。ごめんなさいね、デイーノ」

「ゆるさねえ」

「はいっ？」

ディーノは私の首元に顔をうずめて肩を震わせたかと思うと、起き上がつてどこか面白そうな目で私を見下ろした。

「レミリア、俺プレゼントはお前がいい」

「ふざけてんの？ 酔つてんの？ 殴つて目を覚ます？」

「生憎、俺は正気だ」

ニマツと笑んだディーノは、私の頬に手をはわす。

「うぎやあ！」

「うぎやあ！」

「うぎやあ！」

恥ずかしさのあまりつい顔面頭突き+股間膝蹴りを入れる。

ふう、スッキリ。

私は近くを通りかかった男にディーノを運ばせるようにお願いする。

・・・ディーノのポケットに、プレゼントをいれるのを忘れない。どことなくしてやられた感が拭えないまま、ベッドにダイブした。

---

早苗 S i d o

ベルさんが寝てる。

くすり、と笑いながらそのソファに近寄る。

静かな寝息。ベルさんが安心して寝ている証拠。

何故か嬉しくなつて、ついベルさんに抱きついてしまう。

するとベルさんは起きたらしく、私の肩に手が置かれた。

「・・・なに？ 急に・・・」

「いえ、なんだか嬉しくなつたので！」

「よくわかんないけど、まあいつか」

「あ、また寝るんですか・・・？」

「キシキ、睡眠は大事つてしまつて來たの、誰だっけかー？」

「・・・う、私ですけどお」

ベルさんは確信犯だ。寝ようとするが悲しむのを知っている。

それを知った上で、言つているというのだ。

私も、それを知つているんですけどね・・・。

「じゃあ寝かせてよ」

「で、でもお……」

「なんで?」

「え?」

ベルさんが私の手を掴み取る。

それによりバランスを崩した私はベルさんに跨るような体制になってしまう。

「う、うひやあああ?!べ、ベルさん!?

「なんで?」

「さ、寂しいんですよ……。折角のクリスマスで、しかもお仕事もな  
い日なのに」

「ふうん? そつか。だから寝たいんだけどな」

「うう、ですよね……。じゃあ、せめてそばに居させてください」  
すると、ベルさんが私の発言に目を丸くした……ように思えた。

ベルさんの手を握つて、真剣に相手の目を見て。

ため息をついたベルさんは「いーよ」と言つてまた目を閉じる。

「もう、私の気持ちもわかつてもらえないなんて……」

手を握つたまま私は頬をほころばせた。

「私つたら……。でも、嬉しい……。ベルさんも、私を想ってくれ  
てるんですね?」

なんてつぶやけば、急に引き寄せられて。

目の前にはベルさんの顔(?)。

唇に暖かな感触があることから、キスされてるんだと気づく。

「べ、ベルさ……」

「愛してる」

「つ?!」

息が詰まる。

急な言葉にどうしても返す言葉が見つからず、抱きついて顔を隠す。

絶対、絶対変な言葉で返してしまう!

「キシシツ。傑作、その顔」

くいつとあげられた私の顔は赤いだろう。

ニヤリと笑つたその顔に私はただ睨むだけ。

「ベルさん・・・？」

「やつぱやめた」

「へっ」

気の抜けた声を出してしまう。え？ やめたって？ つまり、私は遊ばれたってこと？

「なんか、そのまま放置するのも面白そう♪」

「ひ、酷いです！ ベルさんのばかっ！ Sさんっ！」

「だつて俺、王子だし♪」

「関係ないです！ ベーッ！」

ベルさんは笑つて去つていく。

うう、やられた・・・！

私は渡し損ねたプレゼントをしまい、選ぶのが遅かつた言葉を飲み込む。

ソファに座れば、スクアーロさんが目の前のもう一つのソファに腰掛けた。

「・・・はあ」

「んだおい・・・」

「何でもないですよー。さて、部屋に戻りますね」

「あー・・・」

さつさといけと言わんばかりにスクアーロさんが手を振つてくださつた。

ゾクツ

・・・あれ？ なんででしよう？

今とても悪寒が・・・。

「さつさといけっ!!」

「へ?!え?!はい!」

駆け出す。

視界のはしに、面白くなさそうなベルさんが居た気がした――。

咲夜 S.i.d.o

「咲夜。欲しいものはあるかい？」

「いえ、特には。雲雀さんのお側に居られればそれで十分ですでので」

「そうか・・・。じゃあちよつと出かけてくるよ」

「え？ 雲雀さん？」

「明日には帰つてくる」

ふらりと出て行つた雲雀さんの言葉。

明日・・・？

（ああ、明日はクリスマスなのね。・・・でも、どうして欲しいものなんか？）

私は首をかしげた。そんなこと、聞いても意味もないのに。

彼の行動の意味がわからないまま、その日は終わつた。

翌日、私の玄関には箱が置いてあつた。

あまり大きくもない箱。

「・・・なにかしら？」

その箱を開ける。すると、そこには銀製のナイフ。

ご丁寧にいつも使つてゐるものを選んで買つてきてくださいさつたらしく、手に馴染む。

妖夢たちと手合わせするときはいつも全力で、ナイフは何本あつても足りないもの。だからか余計に嬉しく感じる。

「・・・雲雀さんは私をナイフ使いとしか思つてないのかしら？でもまあ嬉しいし・・・もらつておきましよう」

他に何かないか探つていて、箱の奥に紙があつた。

『並中の応接室に来なよ』

急いで書いたからか汚めの字でそう書いてあつた。  
適当なノートの切れ端。

冬休みに学校へ來い、だなんて雲雀さんらしくつて、なんだか笑え

てしまふ。

「ふふっ。仰せのままにつてね」

私はその紙をポケットに、ナイフを太もものホルダーに入れていく。

く。

まあ入らないものは私服の中に仕込む。

そうして、私は出かけた。

「やあ

「なんでしょうか？」

「・・・ナイフは喜んでもらえたかい？」

「ええ、ありがとうございました。おかげでまたあの戦闘狂の後処理が出来ます」

「そうか。思えば魂魄妖夢と君は仲が良かつたね」

「仲がというよりは、腐れ縁ですし。靈夢たちと一緒に暴れるものですから、大変でしたよ」

肩を竦めながら雲雀さんに返事を返す。

雲雀さんはふつと笑みを浮かべながら、私に問うた。

「君は、今本音で話しているか？」

「はい。勿論。自らが付き従う人には嘘偽りなく話すよう、自分でも意識していますから」

なるべく、冷静に。

こんな質問をされる意味がわからないけれど、雲雀さんのことだ、

「何となく」なんて言葉で片付けられるだろう。

ならば、わざわざ聞く必要はどこにもない。

返事が決まっているのなら、わざわざ聞いても意味もない。

雲雀さんは笑みを浮かべたまま、私を見やる。

「ふうん？」

「それにしたって、どうやつて玄関に・・・」

「君の家の合鍵は僕がもらつてるからね」

「・・・そうでしたね」

私としたことが、忘れていた。

雲雀さんは嬉しそうにチヤラチヤラと鍵を指で回す。

「見せるようにしなくていいですから」なんて言えるはずもなく。

苦笑して雲雀さんの行動に異を唱えなかつた。

「君、さつきからムカつく」

「えつ？も、申し訳ありません……」

「咲夜」

「……な、なんでしょう？」

「謝るな。そういう態度も見ててイラライラする」

「は、はあ……」

雲雀さんが急にイラつき出したのを見て、私はびっくりして雲雀さんを見る。

雲雀さんは私の視線に気づいたのか、「なんだい」と聞いてきて、それに咄嗟に「いいえ」と返す。

何かをつぶやくようにした雲雀さんは応接室の椅子に腰掛け、窓に向こうを見た。

「……」

「……あの？」

「君は、僕のものだよ」

「え……」

「君がこれからも付き従うのは、僕だけだって言つてんの」「はい、勿論でございます」

照れたように、こちらを見てからそっぽを向いた彼。  
精一杯の笑顔で、見つめた。

---

炎真S·i·d·o

「アリス、寒くない？」

「え、ええ。私は平気よ」

「そう？」

「そうよ」

アリスは俺の心配は必要ないとでも言うように明後日を向いて言つた。

「俺はそつちには居ないよ」なんてからかうように言えば、小さく「うるさい」と咎める声。

今日はクリスマス。だから部屋なんかにいないで、外でデートしようと誘つたのは俺。

だつてアリス、ずうつと中で本読んでるから。

クリスマスはカップルが溢れかえる日だ。そんな日に便乗しない手はないし、なにより、この一日をアリスと過ごしたかつた。

プレゼントは用意済み。タイミングを見計らつて渡せばいいだけ。

俺はアリスが手に息を吐いているのを見た。

それを見た瞬間、本能的に俺はその手を掴むように握る。氷じゃないかと思うくらい、その白い手は冷たかった。

「……わ、手冷た」

「な?! なにしてんのよ?!」

「いやだつてあつためなきや」

アリスの手を取つて、俺は驚いたような声を出す。まあ知つてたことなんだけどさ。

アリスはそれこそ驚いて、俺を見る。

なんか、そんな様が可愛くつてつい笑つてしまふ。

「いいいい、いらぬいわよ!? ほ、ほら、手、手! 手、離しなさい！」

「あはは、焦りすぎだよアリス。ほら、離した」

「……ふんっ」

機嫌を損ねたようで、アリスは顔を真っ赤にしたまま別方向を見た。

いつものことだから俺は気にしないけど、さ。

「ごめんつて。寒そうだつたからさ、ね?」

「……まあ、気遣つてくれるのはありがたいけれど、その……一言言つて」

「じゃあ、手、握つていいかい?」

「……どうぞ」

か細い声で承諾された俺はすぐアリスの手を握つた。

アリスは恥ずかしいとでもいうように、手と俺の顔とを見て、俯く。なんだかやりすぎたような気すらする。

「アリス? 具合でも悪い?」

「誰のせいよ、誰の……!」

「いひやいいひやい、ほつへふかはないれ」

「全くもう・・・」

「・・・はい、アリス」

俺はアリスに手袋を渡す。

最終手段・・・というか、自分が持つて生きていたことを忘れてただけなんだけど。

「・・・最初からだしなさ・・・じゃなかつた。ありがとう」

「どういたしまして・・・と、偉かつたね。言い直せて」

「うるさいわね」

俺の手袋をつけて、その手を自らの頬に当てる。

人目を気にしているのか、アリスはキヨロキヨロと辺りを見渡す。しばらくそうした後、アリスは覚悟を決めたようにすると、これまた小さく俺の名前を呼んだ。

「・・・炎真」

「ん?」

「えいつ!」

「あ、アリス!?

なんと、アリスが俺の腕に抱きついてきたのだ。

俺は何が起こったのかわからず、瞬きしたのちに控えめにこちらを見上げるアリスに、何も言えなくなる。

可愛いくていうか、なんていうか。

「ええっと、じゃあまあ歩こつか」

「え、ええ」

俺は、ポケットの中の箱を掴んだまま、アリスと一緒にクリスマスで浮かれる街を歩いて行つた・・・。

---

フランS.i.d.o

「ボス、ボス!サンタやつてー!」

「うつせーガキ。んなことするほど俺は暇じやねえんだよ」

「ぶー!じゃあ外連れてつてよー!靈夢は、靈夢かボスを連れてたら外出していくって言つてたもんつ!」

「どんだけ前の話だよ、馬鹿野郎。とつとと行け」

「ダメなんだもん！靈夢が怒るくー！」

ボスにフランドールが掴みかかってる……。

そんなの、ミーに言えば済む話なのに。

フランドールが半泣きになりながらボスにくつついで歩く。すると、そんなフランドールとバツチリ目が合う。ミーはなんか知らないけれど目を離してしまった。

しまつた、目を合わせた！

そろーりと視線を戻すと、そこには期待の色を浮かべたフランドールがボスの背中に張り付きながら笑っていた。ああ、やつぱり。

ターゲットはボスからミーに変わった。

「ねえねえフラン！フランは連れてってくれる?!」

「いやですよ。なんでわざわざ寒い中いかなきやいけないんですかー」

「うー！ボス！フランならいいーい?!」

「あ？本来ならカス鮫とか・・・あーあーいいよ連れてけばいいじゃねーか」

「わーい！ボス大好き！」

「げえ、ボス・・・ミーを売りやがったですねー」

フランドールになんかして、ボスを訴えてやる……！

なんてのを考えながら、ミーはソファから動かない。

このまま寝てもいいけど、それだと壊されかねないな……。

フランドールがミーの腕をグイグイ引っ張つて訴えかけてくる。ガンとして無視。

「・・・なんでいかないの〜？」

「あまり外出たくないっていうか・・・」

「私も一緒だよ！」

「なお心配ですー」

「酷いよおつ！」

フランドールががつかりしたようにうなだれる。

ミーはため息をつきながらフランドールを抱きしめる。

やや顔を染めたフランドールが何事かこちらを見上げてきて、その拍子にひたに口付けを落とす。

「ふあ?!」

顔を真っ赤にして怯むフランドールをボスに預け、ミーはそこからなるべく早めに立ち去る。

「しまった・・・やつてしまつたで・・・ぶぐうぶ!?!?」

「ふ、フラン！話は終わってないよお！」

「・・・なんですかー？まだ外をご所望ですかー？」

「うん！」

「・・・はあ」

フランドールのキラキラした目になにもいえない。

しかたない、と腹を括る。

彼女の頭を撫でてやつて、ミーも準備に入る。

ヴァリアーの制服で出歩くわけにもいかない・・・。私服に着替え

てこよう。

部屋へ向かおうとすると、フランドールがミーの前に出てくる。  
ちょっとむくれたようにフランドールがこちらを見上げながらじ  
とつと見つめてくる。

怖くはないのでいたつて普通に、フランドールの問いに答えた。

「ど、いくのー？」

「着替えるんですー」

「逃げない？」

「逃げないー」

「ほんと？」

「ほんとですー」

「嘘！ついてく！」

「・・・うへえ」

フランドールは、今度はミーに抱きついて、「いこうー」と楽しげに笑う。

まあ、これは着替えている途中にどんなアクシデントが起きてもしかたないですー。

「・・・カスどもが

どことなくさみしげに聞こえたボスのつぶやき。

はいはいリア充はぜろなんて考へてるんでしようねー。

なんでだろう、ボスが近しい人に見えてきた・・・気のせいかな。

「ねえねえ、フラン！どこいいこつか！」

「どこにしますかねー」

「真剣に考へてね！」

「えー」

フランドールが、「なんで！」て抗議するの聞かず、部屋へ入った。

——部屋を出る頃には、そこにはもうボスの姿はなかつた。

バレンタイン！～とある四組十二人の甘い話？～

ツナSide

ああ、どうしよう。

なんともいえない感覚に、目の前が見えなくなる。

今日はバレンタイン。

恋人たちが想いを確かめ合う日、とオレは認識している。  
しかし、それと同時に、色恋には無縁なオレは特に苦手なイベントだ。

友人たちは義理でももらえるのに、オレだけはいただけないこと。  
そして、オレを無いもののように無視してチヨコを持つて歩く人たちがいること。

それだけではない。オレを見て、笑うやつまでいるのだ。

・・・今年もまた、オレは笑われていた。

なんで、バレンタインは平日にあるんだろう。休日ならよかつたのに。

「・・・沢田」

何時の間にやら目の前にいた博麗が、机に突っ伏すオレを見下ろす。

「オレは、その姿を視界に入れようとせず、顔をうずめたまま。  
「なんだよ、博麗。笑いにきたのか・・・ん？」

コト、と、机に何かがおかかる音がした。

オレは弾かれるように起き上がり、そのものを認識する。

「ほら、チヨコ。今日はバレンタインでしょ？・・・どうせ、あんた暇  
そうだから、こういうのあげてもいいかな、なんて思つたの」  
包まれた箱。

ふと上を見上げれば、やや顔を染めた博麗が恥ずかしそうにそう  
言つた。

口調はいたつて普通。むしろ、いつもよりつづけんどんだ。

「まさか、毒物は入つてないよね？」

「入れると思つてるの？さすがに、その・・・人に善意であげよう

思つてゐるのに」

「あはは。そりやそうだね。悪意しかなかつたら断つてた」

博麗が顔を赤らめて言い淀んだ訳は聞かないでおこう。うん。

オレは包みを開ける。

すると、博麗が目を見開いてこちらに向かつて叫んだ。  
大慌て。

「ちよ、ちよちよ!? 何ですぐ開けるの?!」

「別にやましいわけじやないだろ? ならいいだ……ろ」

オレも目を見開く。

なんていうか、その……。

可愛い趣味してるなあ、なんて。

様々な動物型のチョコレートクッキーが箱に入っていた。  
チョコ・・・うん、チョコだ。クッキーでもチョコが入ってる。

「・・・」

博麗が歩いて行き、席に座る。

オレは一つ口にして、博麗に声をかけた。

「美味かつた! ありがとな!」

「ふんつ。当たり前よ・・・」

はずかしそうに顔を背けた博麗がなんだか可愛く見えて、とても嬉  
しく思つた。

また一步、博麗を知れた、なんてね。

---

魔理沙Side

・・・べつに、靈夢に触発されたわけじやない。

包み箱のある場所においてきてしまった後に、私は言い訳するよう  
に心でつぶやいた。

誰にも聞こえることはない。

「あーあー、何で面と向かつて渡せないんだか・・・」

簡単だ、はずかしいから。そして、気まずいからだ。

あれからずっとあいつ・・・獄寺隼人とはぎくしゃくしたままだ。  
むしろ、嫌われているとしか思えない。

だけれど、私はあいつが特別好きなわけではない。  
申し訳なさからだ。そうに決まってる。そうじゃなければ、ここまで手のこんだ物は作らないだろう。

「・・・おい」

「そうだ、そうなんだ！・・・つて、うわあ!?」

「なにがだよ」

噂をすればとかなんとか。

私の背後には、包み箱を持つた男、獄寺がいた。  
ん？ その包み、見覚えがあるような・・・。

「あああああ!!おま、それ私のつー!」

「・・・置いてつたのはお前か」

どこかホツとしたように見えた獄寺。  
しかし、どこかいやそうな響きを含んだ言葉に、つい私は「イラツ

☆』ときてしまう。

「そうだよ！ 悪いか！」

「別に。ただ、一言言いたかつただけだ」

獄寺はそういうと、再び口を開き、声を放とうとするも、

「・・・」

そのまま静止してしまった。

しばらくすると、「なんでもない」と言つて去つて行く。

もう一度見た包み箱は、もうすでに開けられていて、中が幾たびか漁られたように見えた。

何で私だとわかつたんだろう？

ふと、獄寺の表情が浮かんできて、一人で顔を熱くした。  
あのホツとした表情・・・。

なんで。ああ言つた表情を浮かべた？

あいつ、たくさんもらつてるはずだろ？ なんで、確認しにきたんだ・・・？

よくわかんねーけど、まあいいか。

気楽に考え、獄寺とは逆方向に歩く。

うう、なんだかしてやられた気分だぜ・・・。

(もう少し、笑つてやつてもいいかもな、なんて)

自分で、自分を笑つた。

それをしても、関係は戻らないのに。

---

妖夢Side

作つてしまつたと、愕然とする。

慣れない洋菓子な上に、日頃の感謝の気持ちを、だなんて。ありきたりすぎて、でもそれ以外のあげる理由は見当たらなくて……。

いやそもそもが、あげようと思うことすら間違つているんだ。

咲夜さんの助力もあつて形にはなつたが、普段作らない菓子は一段とあげるのがきつい。

もしや味が悪かつたり、どこかで手順を間違つてたり、しないだろうか?

ぐるぐるぐるぐる、ぐるぐるぐるぐる。

回る思考の果て、私は包みを机上に置いた。

私は机の上の袋を開けて、それを消費しようと手を入れる。

「なに食つてんだ?」

今、一番聞きたくない声が聞こえて、硬直した。

ふと顔をあげれば、山本さんがそこにいて。

「へえ、チョコか! 妖夢のおはぎはうまかつたけど、チョコは始めてだな。誰かにあげるのか?」

「い、いえ」

「じゃあもらつていいか?」

「いやです!」

「……俺、嫌われた?」

どこか寂しそうに山本さんが言う。

私はとつさに「違うんです!」と否定した。

山本さんは私を見下ろす。

「慣れない、ものですし」

「……ん」

「不味かつたら、と」

「んー」

ひょいっと山本さんがチヨコを口へ放り入れた。

「きやああああ！」と悲鳴をあげてしまう。

「ん、美味しい！甘くていいなー」

「そうですか……？」

「うん。さすが妖夢！」

「わ、私ではなくて、咲夜さんですよ……！」

「え？作つたのは妖夢だろ？」

「……ハイ」

山本さんの純粋な表情に、私は頷く。

「やつぱりな」と笑つた彼。

きゆう、と心臓を締め付けられた気がした。

「妖夢？」

「へつ」

「ああ、この包（）ともらつてくな。じやなー！」

「ええ、ちょ、山本さん？」

山本さんは私の机の上から包みを奪つていくと、行く用事があつた  
か教室から出た。

ただ呆然とその後ろ姿を見ていた。

（……喜んで、くださつたならいつか）

気がつけばいつのまにか、私の顔には笑顔が浮かんでいた。

---

咲夜Side

心なしか、私の足は早くなつていく。

彼を見つけられない焦りか、それとも……。

いや、余計なことを考えている暇はないと首を振る。  
応接間にはいなかつた。校内を回つてもいなかつた。

とすると、あそこしか、と屋上へつながるドアを開ける。  
ドアを開けると、フワツと風が頬を撫でる。

それと共に、クスクスと声が聞こえた。

その声の方を向けば、雲雀さんが寝転がっていた。

彼の隣まで移動して、彼の目前にチョコレートを晒す。

チョコレート、というよりは、純粹に洋菓子と言った方が正しいかもしれない。

チョコを使った、マフィン。

彼はそれを手にとつて、まず食らいつく。

それを見て、びっくりした。

見た目の感想もなしに、まず噛み付くのか。

「・・・ん。まあまあ」

「光榮です」

「・・・」

雲雀さんがこちらにマフィンを向ける。

意味がわからず、マフィンと彼を見比べてしまう。

行動の意味がわからない。

「・・・食べなよ」

「け、結構です」

「そう」

雲雀さんは諦めたのか、また食べ始めた。

なんだか、ホツとしたような嫌なような・・・。

従者にあつてはならない感情である。消せねば。

「・・・ねえ」

「はい、なんでしようか?」

「ホワイトデー、なにがいい?」

「・・・はい?」

「欲しくないの?あげようと思つたんだけど、美味しいから」

「も、勿体無いお言葉です・・・」

正直そう言つていただけると思わなかつたので、バカみたいに驚いている。

雲雀さんが、私に?ホワイトデーで?

「・・・まあいいや」

「どつちの意味でですか」

「別に」

ふいつと顔を背けた雲雀さんに、私は少々笑う。

なんだか、オモチヤを壊した子供のような……。

「なに？ その視線」

「いえ、失礼しました。では、これで……」

「咲夜」

急に名前が呼ばれて、ビクツとしてしまう。

「……もうちょっとここにいたら？」

顔は見えない。

私は、ただ「はい」と返事して、そばに座った。

---

フランドールSide

私は、マーマさんに教わったチョコの作り方を実践した後。  
その出来上がったものをせつせと箱に入れて、それを持ってリボーンのところにいく。

「リボーン、リボーン！」

渡したいと思っていた人の名前を呼んで家を駆けずり回る。

探し人は、つなよしの部屋で優雅に読書していた。

私は気づいたか、リボーンはハンモックから降りて挨拶してくれた。

「ああ、フランか、ちゃおっす」

「ちやおっす！ ねえね、これ……あつ！」

慌てていたせいか、リボーンに渡す前に落としてしまう。  
ぐしゃつ、と聞こえた。

落下の衝撃で、きっと『脆かつた』チョコレートが壊れちゃつたんだ……。

箱の蓋が空いて、中から壊れたチョコレートカップケーキ。  
こぼれたカップケーキのかけらを、リボーンはつまみ上げた。

「……うん、うまい」

「な、なんで食べたの？ 落ちたものだよ！」

「なんでつて、作ってくれたんだろ？ だつたら食うさ」

「リボーン・・・」

「ちょうど腹も減つてたしな」

リボーンは、こぼれたカツプケーキを箱に戻して、キツチンに持つて行つた。

私はそれについていく。

すると、マーマさんから皿とスプーンをもらつて、皿の上に欠片を出した。

「・・・フラン、ありがとうな」

「リボーン！だいすきー！」

スプーンですくい、口にいれた瞬間、私は思いつきり抱きしめた。

そのリボーンの顔は、確かに笑みを浮かべていた。

・・・まるで、いないはずの娘を見るような顔で、笑みを浮かべていた。

「フラン」

「なーに？」

「うまいぞ」

「えへへー！ありがとう！頑張ったんだよ！次はもっと頑張るね！」

「ああ、楽しみにしてる」

リボーンの言葉は、私の心にジーンと染み込んで、私はまたやる気を出した。

次は、リボーンに、「超うまい」と言わせてやるんだー！！

現在、外界異変の始まり

## プロローグ

「いやよ！なんであんたに決められなければいけないの?!」

赤いリボンが、やや茶の混じった黒髪が揺れる。

普段は閉ざしていることの多い口が、いつもより大きく開かれている。

その表情には怒りの色が滲み、その握りしめた手で、バン、と卓袱台が叩かれた。

卓袱台の上におかれていたもの・・・写真が舞う。

幻想郷にやつてきたメモリーカードなどによつて色鮮やかに移されたソレは、畳の上に落ちていく。

「しかたがないことでしょう？それは、代々伝わる『ウチ』の博麗の巫女の運命、『しきたり』よ」

女性——八雲紫——は目を閉じ、冷静なまま茶を飲んで・・・そんな巫女に返答する。

ぐつと言葉が詰まつた巫女は一旦落ち着いて座り直した。未だ不服そうなまま。

「・・・とにかく私はいやよ」

「もうスキマをつないでしまつたのに？」

ひよい、と手を上げ、また指を動かせば、くぱあと開くスキマ。空間に切れ目が出来、それが中央から開いていく。両端はリボンで結ばれている。

そしてその中には・・・大きな目が幾つも幾つもあつた。趣味の悪いものだ。こんな目がいっぱい、どうして見ていられるのか？

「・・・だけどいやよ。そんな『しきたり』に従いたくないわ」

『ウチ』の博麗の巫女は代々、とある世界の中で力を持つものと婚約し子を成してきた・・・それを潰える気？」

「潰える潰えないじゃないの。そもそもがどうして……」

巫女は唯一卓袱台の上に残っていた写真……否、先ほど巫女が卓袱台を叩いた際、命中し舞い上がることとはなかつた写真を八雲紫に押し付ける。

「こんな、たいしてバツとしない男なわけ?!」

「その子と結婚しなさい。きっと、感覚の鋭い子が産まれるわ」

「結構よ。する気ないわ。しなくとも紫が連れてくるでしょう?」

「それは緊急よ。あなたが子を産む前に死んだ時の対処法なのよ。あなたが産まないといけないの」

写真を受け取った八雲紫は渋い顔をして写真をまじまじと見る。巫女は「ふん」とそっぽを向くと、次の瞬間立ち上がって不機嫌そうに障子を開け、閉め、八雲紫の家から立ち去つた。

感覚でわかつた。彼女は八雲紫の式神に止められても止まらず、博麗神社まで戻るのだ。

クスリ、と笑んで指で写真をつまんで懷にしまう。

「いいと思うのだけれど、『沢田綱吉』は」

ポツリとつぶやいた八雲紫はその口元に笑みを浮かべ、スキマを開けた。

「藍、橙、準備なさい。わからせてあげるわ、靈夢」

――『しきたり』の重要性を、沢田綱吉の元でね!――

# 一話：訪問者につき頭上注意？

??? S i d o

『ボンゴレファミリー』——。

そこのボスになつたオレは城をたてて、地域ならず世界を守るために自警団として、マフィアを榮させた。

もう、ボスになりたくないと泣いたあの時が懐かしいな。 アイツは、いないけど·····でも、いると信じてる。

そうじやなきや、未来を変えてきた意味もない。

と何時の間にか思い出に浸つていると、コツリと額が叩かれる。 それまでまつたく気づかなかつた、戦友の姿がそこにあつた。

「や、綱吉」

「炎真·····なんだい？久しぶり·····ではないけど」

「うん。外が騒がしくつてね。どうせなら一緒にと思って」

「そうか。じゃあいこうか·····どうしたの？」

オレが椅子から立ち上がつた瞬間、ボンゴレの一員が部屋に駆け込んでくる。

血まみれで、傷だらけ。

なんてだ。

「ぼ、ボス！！ただいま、謎の物体と少女たちの交戦が、ボンゴレアジト上空で行われている模様！ボンゴレ一員も、守護者さんたちもみんなで戦つてます！流れ弾がーーがふつ」

報告しようとしている人は、あまりに早くしゃべりすぎたおかげで吐血した。

オレは未だにしゃべろうとしている人の隣へ駆け寄り、制止させた。

「しゃべらないで。わかつたから。炎真、近くの人に救援お願ひ。先いつてる」

「うん、わかつた」

オレは、走つた。

外へ出ると、そこは戦場だつた。

よくわからない生物と、少女が戦つていた。  
な、なんだあれ！オレはただ走つて行つた。  
そのうちの一人、紅白の巫女服の人の元に！

?? S i d o

雑魚妖怪をなぎ倒していると、急に目の前に男が現れた。  
つい構えていた封魔針を隠す。

男はオレンジの炎を纏つた拳を妖怪の頬にぶつけ、そのまま上にあ  
がり別の妖怪を蹴り倒す。

「・・・なにしてんのよ」

「ああ、悪い。女が戦つてるのを見て・・・危なつかしくて」

「余計なお世話。他に加勢しなさいよ」

女扱いされた・・・。

女子率の高いうちでは、私はあまりそういう風に言われるのが少な  
かつた気がする。

気がする。せめて見栄を張らせてほしい。

つい、つつけんどんな態度を取るが、厳しかつたのは事実。

それに対しても男が口を開いたよう。

こつちに背向けてないで正面から話してくれないの？こいつは。  
「目についたのが君だつたから」

「・・・だから、余計なお世話つていつてーーーなにしてんのよ?!」

言い終わる前にそいつはまた妖怪に攻撃していつた。

私はそいつの後頭部に封魔針を投げる。

そいつはやすやすと避け、妖怪への攻撃を再開した。

「・・・危ないだろ」

こつちを向いてきた男は、どこか見たことのある顔。

ああ、確かにこの世界最強はこいつだつたつけ？

名前が思い出せないけど、紫から見せてもらつた写真と似てる。

・・・・・そうすると、この異変の原因が思い出される。

とりあえず邪魔。退かさせたい。

「邪魔なのよ」

「・・・そうか」

そう言つた男はまた戦闘を始める。

人の話聞け・・・!

また新しい男がこちらに寄つてくる。

「炎真、他の人に加勢を。できればみんなに言つてくれないかい?」

「わかつた」

そう言つて、炎真というらしいやつは何処かへ飛んで行つた。

「・・・あんた名前は?」

「沢田綱吉」

「沢田ね。私は博麗靈夢。ちなみに、こんなくだらない戦闘に巻き込んだのは詫びないわ。関わってきたのはそつち。・・・ま、発端はあなただけど

「はあ?!」

「これ以上の質問はもつと向こうにいる重要人物との対面を果たしてからよ」

「あ、ああ」

私は沢田と飛んで、妖怪を蹴散らしながら向こうへと向かつた。

??? S i d o

息が切れる。

こんな量の妖怪と戦つたことなんてない。

最高で三匹。やつぱり修行が足りないのか?

私は、刀を一閃させながら、余計なことを考えていた。すると、ふと背後に迫る殺氣。

急に現れたもので、咄嗟に判断が出来なかつた。

見てみると、飛んでくるのは槍。

狙うは心臓。

・・・これは、死んだ。

半分しか生きてないといつても、死は恐ろしいものです。

キンツ

刹那、間に割つて入った男の方が槍を打ち上げ、妖怪の胴を切り裂く。

刀の使い手さんらしい。

「大丈夫か?!」

「は、はい！」

「背中は任せろ。味方だ！」

「・・・了解しました！」

男の方は、そのまま庇うように刀を振るつていた。  
どこか・・・かつこいい。

私も負けないと、刀を再度握る。

と、ふんわりと妖怪を押し退けて降りてくる人がいた。

否。人で在らず。靈で在る。

私、魂魄妖夢が住み込みで働いている白玉楼の主であつた。

「残念だわ、妖夢。靈夢の側に付くなんて」

「幽々子様——申し訳ありません」

「誰だ?!」

「お初ね。私は西行寺幽々子。そこの魂魄妖夢の主人よ」

男の方が息を呑むのがわかつた。

話の展開に追いつけないのでだろうか？

「・・・俺は山本武。一応、寿司屋の息子なのな！」

「あら寿司？まあ・・・いいわ。さ、二人とも。私が相手よ」

私も息を呑む。

山本さんというらしいその方と刀を同時に構える。  
幽々子様はただ笑っていた。

## 二話：訪問者につき怪我注意？！

??? S i d o

私が箒に乗りながら妖怪を蹴散らしていると、下の方で爆発が起きた。

何事かと見やり、するとそこにダイナマイトを構えた男が立っていた。

「おい、余計なお世話だぞ！」

「うつせ！十代目のご意向だ、従うほかないんだよ！」

「誰だ？まあいいか。だから邪魔！」

「俺は無視してろ！俺は勝手にやる！」

そしてまた爆発が再開する。

うん、うるさいんだよなー。

仕方ない、私は降りて行き、そいつと顔を合わす。

なんだ、チャラい・・・。

「迷惑だって言つてんだろー！うるさいんだよー！」

「はあ?!俺の武器はダイナマイトだ！」

「じゃあ変えろ！」

「いやだね」

・・・・・と、話していたら妖怪が襲ってくる。

そのままそいつと同じように攻撃を与えてしまう。

すると、自然と目が合う。

「・・・・一度、戦うぞ」

「・・・・ああ」

お互い、武器を構える。

そして同時に飛び出した。

私は上空で、そいつは地上から。

そこは、爆発でなにも見えなかつた。

「あ、魔理沙～！」

気の抜けた声。

でつかい腕が私を襲う。

な、これって！

「おい!?」

「つへへ、久しぶりだな、萃香！」

「よーし、ひく、宴会だ、宴会♪」

上空で胡座をかき、瓢箪をあおぐその姿は幼女のもの。  
伊吹萃香。鬼だ。

楽しくなってきた・・・！

「おい、お前！邪魔すんなよ！」

「あ、バカか？あ、俺もやる！」

「はあ?!お前は邪魔なんだよ！むしろお荷ーーー！」

ドツカーン

人の言うこと聞きやしねえ・・・！

私はしかたないと溜め息を吐いて、八卦路を構えた。

??? S i d o  
吹き飛ばされてます。はい。

神奈子様と遭遇、戦うようになることになりました。

吹き飛ばされました。

「あいたつ」

「お？」

誰かにぶつかってしまう。

私はすぐに離れて頭を下げる。

「すいません！どなたか存じませんが・・・」

「んー？平気。だつて、俺王子だもんな♪」

「お、王子？」

「うん、俺、王子♪」  
嘘くさいです・・・。

王子様っていうのは、白馬に乗つて颯爽と現れるものでしよう?!

そうじやないんですか?!

自分を王子だからって言う人は信用できないですよ。もう。

「・・・」

「ありー？ 何その目、信じてないっしょ」

「ま、まあ」

王冠をかぶつたその人は指でナイフを弄びながら笑った。  
なんで、笑つていられるのでしょうか・・・？

「ああ、早苗。こんなところにいたのか。さあ、帰るぞ」

「！！！・・・神奈子様・・・。私は帰りません！ 霊夢さんに、来るよう言

われたのですから！」

「・・・なんだ、面白そうじやん、混ざつちやお♪」

その人はナイフを構えた。

「この人には勝てませんよ?! 下がつてください!」

「大丈夫大丈夫♪だつて・・・」

神奈子様のオーラが私の肌を焼きそうなほど、こちらへ襲つてくる。

御柱が突き刺さつていて、私はぐくりと息を呑んだ。

その人——『王子』は構えたナイフを神奈子様に向けた。

「俺、王子だもん♪」

### 三話：訪問者につき前方注意？

炎真S.i.d.o

俺は綱吉に言われて他に加勢しようとあたりを見渡す。  
すると、こちらに吹き飛ばされてきたのが、金髪の女性であつた。

「つ！！・・・ゞ、ゞめんなさい」

「いえ・・・大丈夫ですか？」

「大丈夫。心配はいらぬわ」

女性は懐からなぜか人形を取り出し、空中へ放る。  
その人形は槍を手にしてまつすぐ飛んで行つた。

「新たな人がきたのね。まあ、焦がすけれど・・・」

「周りの人は関係ないはずよ、パチュリー！」

「だからといって、こちらへくるのだから巻き込まれてもいた仕方ないのよ、アリス？」

アリスというらしい女性は、目の前に現れたパチュリーと言うらしい女性へ叫ぶ。

俺はただアリスをかばうように立ち、手のひらをその人へ向けるだけだ。

「なにをしているの?!」

「え？いや・・・ただ、加勢しなくちやつて」

「いいから退きなさい！心配はいらぬいつていつたでしょ？」

「うん。でも、俺はあなたを手伝う」

「・・・ああもう！勝手になさい！」

アリスは諦めたように構えた。

俺は少し面白かった。自分を心配してくれているのに、妙につづけ  
んどんな言い方しか出来ないらしい彼女はとても人と話すのに慣れ  
ているようではなくて、距離を図り兼ねたような感じだつた。  
それが少し見てて面白かつたのだ。

パチュリーはアリスへ手のひらを向け、ポツリとつぶやいた。  
「ロイヤルフレア・・・燃えなさい」

俺はその炎を見て、手のひらをかざした。

さて、助けてあげなくちゃ……ね。

??? S i d o

私がナイフで妖怪どもを蹴散らしていると、建物付近から誰かよくわからぬのが飛んでる妖怪を踏んで登ってきた。

黒髪に、トンファーを持つていて、学ランを肩にかけていた。

「……どなた」

「雲雀恭弥。群れている原因は君?」

「群れてつて……。私は寄つて集つて攻撃されてるだけ。それを群れてるつて見えるのかしら?」

「まあ……。見えるには見えるね」

雲雀はガシガシと頭を搔いて、言つた。  
そう、と短く言つて返す私は妖怪を殲滅すべくまたナイフを構える。

すると雲雀はトンファーで足場にしていた妖怪を殺して、降りる際に何匹か殺していた。

「へえ……なかなかにやるのね」

「あとで手合させお願いするよ、強いメイドさん」

フツと微笑んで見せた雲雀はそのまま走り去つていった。

追いかける気も起きない。

私はそのまま妖怪駆逐マシーン（笑）となつてそいつらを殺していくた。

もう、メイド服が汚れるじやない……。

これは、『人』じやない、『妖怪』だ。

??? S i d o

私は槍を手のひらで踊らせる。

隣では妹も炎に包まれた大剣で妖怪を薙ぎ払い、焼き殺していた。

目の前に降りてきた少女は、よく見知った顔で。

妹経由で知り合つた古明地姉妹。

私の妹は、古明地の妹と別の場所へ移動した。

よく、わかってるじゃない、フランドール。

「さて、私たちもやりますか」

「そうね・・・手つ取り早く終わらせて帰りましょう」

「私は靈夢に誘われたままよ。帰るわけにはいかないわ」

お互いに構えて、姿勢を低くする。

これは弾幕ごつこでもなんでもない。

命をかけた殺し合い、ね。

「おーっと、いけないね、お嬢さんがた」

「!?」

鞭・・・のようものが私と古明地の姉を絡め取る。

そのまま宙に持ち上げられ、そして近くの地面へと吹き飛ばされる。

しかしあ伊達に妖怪をやっている。飛べるのだ。  
吹き飛ばされる途中で姿勢を整えて停止した。

「誰なの」

「・・おや、・・・ただもんじやねえな、あのバケモンどもといい」

古明地の姉、さとりは苦い顔をする。

私は嘆息して急に介入してきたそいつを見やる。  
すると、顔の熱が上がっていく。

ボフンツと聞こえた気がするがきのせいだ、うん。

「くす、わかりやすいわよ、レミリア」

「う、うるさいわね!! 人間、介入せずおとなしくそこで待ってなさい!  
あんたにはあとで拷問しなくちゃいけないのよ!」

「うげえ、そいつあ怖い」

私は一つ咳払いをして槍を一回振る。

うつむいて、目を閉じて集中してから、顔をあげて目を開ける。

「かかってきなさい、さとり

「ええ。いくわよ、レミリア」

ニツとお互いが笑ったあと、周りが焦土と化す大爆発が起きた――

## 四話：訪問者につきスキマ注意？！

フランドールS·i·d·o

お姉様がさとりさんとお楽しみになるつていうなら、私だつてこいしと遊ぶもん！

そう意気込んでこいしを弾幕やらを使って誘導する。

あ、ここは誰もいないね！

安心して暴れられるよ！

私は炎の剣、レーヴアテインを振りかざし、こいしに向けて振りおろした。

こいしはそれを軽々と避けた。後ろの森が火事になる。

「きやははつ・こいし！ 誰か居たよ！」

「あー、ほんとだー」

「あいたたた・・・ミーは巻き込まれただけなのですがー」

力エル頭がひよっこりと出てくる。

私は面白くなつてそつちの方に斬撃を飛ばす。  
すると、力エル頭は急に消えた。

「!？」

「あ！ あそこだよ、フラン～」

「！ そこだね！」

さすが、無意識！

改めてレーヴアテインを振り回す。斬撃がこいしの指差した方向

に飛んでいく。

「うわっ、ちょー、ミーばっかり虐めて酷いですよー。これはいつも受けてるようなのと同じくらいひどいですー」

「キヤハハハハハハハツッ!! ホラホラ、逃げナヨオオ！」

力エル頭が逃げ惑うのを見て、私は狂気に染まつてくる。  
やめて、やめてよ・・・。

また壊すの？せつかく、せつかく外に出られたのに・・・!!!

刹那、急な重量感を覚えた。

「ミーばっかひどいですー。それだから、バツを受けるですよー」

下で逃げ惑つて力エル頭が私を押さえ込んで地面まで落ちて行った。

「なんでも?!」

こいしも驚いた顔をして、硬直していた。

「ふ、フラン!?

すぐそこで逃げ惑つていた力エル頭が消えていた。  
関節を決められ、動けなくなつた。

「ミー、そこの女の子知らないですよー」

「え?」

「そんな変な厨二じみた格好の子、知り合いにはいませんですがー」

私にそんなことしてた力エル頭はバカなことを言い出す。

フランって呼ばれて、自分が答えた? どういうこと、なの?

「あなたの名前はなんなのですー?」

「ふ、フランドール・スカーレット」

「ふーん。ミーもフランですよー」

「は?」

「・・・・オモシロイネ」

ニタリ、と笑みがこぼれる。

そして・・・

すべてが焼けたような気がした。

---

靈夢S·i·d·o

私と沢田はただ妖怪を片付けながらスキマがいるであろう所へ飛んでいく。

こいつ、おかしいのね。

グローブから炎が出て、それで飛んでるなんて。

「紫ー?」

「・・・」

「なにかしら・・・つて結婚する気になつたの?」

「結婚?!」

沢田が顔を赤くして、慌て始める。

私は説明してなかつたのを思い出す。

まあいいか、どうせ説明する気もないし。

「ちよ、どういうことだ?! 結婚とか、聞いてないぞ!」

「言つてないもの」

「おい!!」

「ふふ・・・一緒に戦つてきて、その息のあいよう・・・やつぱり博麗の巫女に相応しい力をもつもの」

「まだ言つてるのね、紫」

呆れてしまうじゃない。

紫は「言うわよ?」と笑つた。

沢田も呆れてきたのか、苦笑していた。

「さて、沢田綱吉」

「え」

「あなたには帰つてきて欲しい人がいる、違う?」

「・・・うん。二人」

紫が聞いた瞬間、沢田の表情に陰がさす。

・・・二人?

「リボーンと、笹川京子」

「・・・!」

沢田がびっくりした目を紫に向けた。

紫はなんでもお見通し、とばかりに微笑んだ。

「あなたたちに、タイムスリップする方法をあげるわ」

「嘘、だよな」

「まさか、スキマにいじれない境界なんてないわ。・・・多分、ね」

「・・・」

「あなたたち当事者は、この事によつて過去へ送られたという記憶を失う。その代わり、今のあなたの戦い方が、体に残つてゐる。そして靈夢たちはすべてを忘れてあなたたちの世界に馴染む。住みやすいようにな。でも親はない。ここまでいいわね」

私と沢田はうなずいた。

「そして、今日になつたとき、すべてを思い出す。チャンスは一度切

り、よ。もう送ることはできないわ」

「・・・いかせてください、過去に」

「沢田・・・？」

「俺は助けたい。そして、今日に連れてきたい。リボーンと京子ちゃんを」

しつかりと紫を見据えて、沢田は言った。

拳は握り締められていて白くなっていた・・・。

私は笑った。

「気に入った。私も手伝うわよ、沢田」

「博麗さん・・・」

「靈夢、よ沢田。紫、お願ひ、沢田を全力でバックアップできる立ち位置にしてくれるかしら?」

「できないことはないわ。わかつたわよ、靈夢・・・頑張りなさい♪

「うるさいつ

スキマに吸い込まれる。

沢田を抱き寄せて、迷わず、過去に行けるように。

私は願つた。

## 過去と並盛の物語

五話：並盛、とある家族と女の子

靈夢S·i·d·o

ゴロリ。

私は寝転がつた。

青々とした芝生が風で揺れ、頬を撫でる。

ただ、空を見上げていた。

面白みもない世界。私はなんにも干渉しない。

母親も父親もわからない。なのに生きていた。

幸せな家庭をみると辛い。

だからこうして空を見上げる。空は広大で、寛大だ。

こんな私の愚痴さえも、飲み込んでかき消してくれる。

本当に、寛大だ。

「・・・・ひまねー」

ほう、と息を吐いて目元を腕で覆う。  
すると、暗くなつた気がした。

緑色のスカート？

・・・ああ、あいつか。

「いくら休日でも、だらけ過ぎですよ」

「いいじやない、休日なんだから」

私は起き上がる。勢いをつけて、よいしょ、というように。

スカートがめくれてもまあ気にしないでいいでしょ。

「んで? なんで来たのよ、妖夢?」

「はい、沢田さんにお礼がしたくて・・・」

「沢田ね。で、家へ案内しようと?」

「・・・迷惑でしようか?」

肩を竦ませてこちらを伺つてくる妖夢。

ああ、前に沢田に自殺止められてたバカがいたわね・・・。

確か妖夢って野球部のマネージャーとか言つてたつけ? そりやあ

お礼もしたくなるわ。

・・・あと、剣道部も兼部してた気がする。

「全然。まあ、最近面白いやつもきたし、家に帰るついでね、行きましょう」

「え、家つて遠いですね？」

「翌日が学校の時は沢田家に泊めてもらつてるのよ」

妖夢の目が丸くなる。

何で驚くのよ、私は笑った。

その頭を小突いて私は歩き始める。

慌てた妖夢は私を追いかけた。

「——で、来たの？」

うんざり、というようになつ——沢田綱吉——はドアに手をついてため息をついた。

へえ、私にそんな態度とれるのね。

「私については明日学校だし」

「は、はい！先日は大変お世話になりました！」

「ああ、いえ、いいんですよ。あ、あの・・・えつと」

しどろもどろする沢田に不幸が舞い降りた。

「よう、博麗靈夢」

すると、沢田の頭が飛び・・・あ、間違えた。沢田が前のめりに倒れた。妖夢の方に倒れたが、妖夢はそれをひよいと避けた。おめでとう沢田。ラツキースケベはなかつたわね。

倒れた沢田の背中には、黒スーツを着た子供・・・明らかに赤ちゃんの姿だつた。

最近沢田の家庭教師としてきたとか・・・。よくお母様は何も思わないわよね。

「あら、リボーンさんじやない」

「さ、沢田さん！」

「んでこいつは」

「魂魄妖夢。剣道部所属で、今は副将を務める将来有望な剣士よ」

「・・・ふーん」

リボーンさんの口元に笑みが浮かべられた。  
好い加減、沢田からのかないのね。

するとリボーンさんが妖夢の肩に乗る。

「おい、いくつか確認するぞ」

「？」

「お前も、博麗と同じか？」

妖夢の表情が固まる。

同じ、といつても、身寄りがないだけ。

父親の形見の刀を今も背負っている。

「・・・はい」

「そうか。なら、うちの家族になれ」

妖夢の肩から降りて、妖夢に向けて手を差し出す。

私は苦笑した。

「リボーンさん？ それ、私には言わなかつたわよね？」

「お前にや、やらなきやいけないと言つたコトがあるだろ？」

リボーンさんは何も言わず、私を誘つていた。

しかしこんな私にもやらなければならないことがあり、私にはそれを達成する義務がある。

私の家は博麗神社であり、ここ、沢田家だ。

巫女として務めなければならぬ仕事がある。

それを、リボーンさんは言つていたのだ。

「ま、そーだけど

「家族、に？」

「ああ。ま、別の意味で手伝つてもらうがな」

またニヤリと笑えば、妖夢の口元は潤んで行く。

「だーーー！ オレ抜きで話をするな！！ というか、家族云々は母さんに言つてから・・・！」

「マンマには後でいう

「いいのかよ！ それでいいのか!!」

沢田は相変わらずうるさいわね・・・。

私は手招きする。

何も考えてないのだろう、キヨトンとした彼はこちらに寄る。

広い庭に出ると、沢田を抱き寄せた。

「・・・?!」

「ど、思いましたか沢田！」

すぐ引いて下から腹へ蹴りを入れる。そのまま一回転して地面に叩きつける。

気絶はするだろうけど問題ないわね、死ななければ。

黙らせられるだけマシよマシ。

「相変わらずの腕前だな」

「うつさい。つたく」

沢田を見下ろす。ピクピクと痙攣するように倒れ伏していた。まつたく、面倒なやつ。

腕を掴んで引き上げて壁にもたれかからせる。

これでOK。

すると、その頃には話もついていたか、妖夢の顔は晴れ晴れしている。

「よし、じゃあ二人とも、今日は休め。明日学校で話してやる。事の次第を

「?」

リボーンさんはさつさと入つていった。

ま、私も追いかけますか。

「オレは・・・」

## 六話：快活少女と紅白巫女！

靈夢 S·i·d·o

そして、翌日。

今、私たちは、並盛中にある。

あれから、妖夢が「不安じやない」と言つたこと。それは、喜ばしいことだ。

私も親しい人間が嬉しそうにしているのは、素直に嬉しいと思える。

そこまで殘忍な性格はしてないし。

・・・まあ、自分ではかりかねているだけなのかも、だけど。

「沢田」

私と沢田は、そろつてそこの・・・消化器の入つてる赤い箱っぽいのつていえば伝わるかしら？・・・そこをずうつと見ていた。

沢田に呼びかけると、沢田は不機嫌そうに目を閉じてため息混じりに言つた。

「・・・別に。なんでリボーンさんがそこでお茶を飲んでいるかの理由が聞きたかっただけ」

「これはお茶じやない。珈琲だ」

「あら、ごめんなさいね」

「そういう次元の話できない気がしますけど・・・」

リボーンさんはあまり人が注視しないところに基地を作るのが得意なようだ。

とてもユニークなところに作つてゐる。

そしてそこでお湯を沸かして珈琲を飲む・・・とても、赤ちゃんとは思えない行動ね。

「それで？リボーンさんはなにを妖夢に教えてようつていうの？」

「ボンゴレファミリーについてだ」

「ボンゴレ・・・？」

私を一瞥する。・・・なによ。私には教えたくないってわけ？

苦笑したりボーンさんは、私の肩に乗ると、ゆっくりと喋り出した。

「お前の霧雨魔理沙はいるか？」

「・・・さあ？学校にはいないんじゃない？」

「よし、そいつを連れて来い、博麗」

「教えてくれたつていいじゃない？」

「教えるぞ？」

「・・・まつたく、リボーンさんはワガママね」

私はリボーンさんを妖夢に押し付けるように抱きかかえさせると、走つて校内を出る。

バレなければいい。

しばらく走つていると、見知った金髪が頭を書きながら何かを移動させてるのが見える。

髪の毛？いや、頭・・・？

人。しかも、男ね！

「ちよつと、魔理沙!!その人は・・・」

「んあ？ああ、霧雨か。いやあー、何か爆弾持つて飛びかかつてきたからさ。思いつきり殴つてやつたのぜ」

「あのねえ・・・なにをしたらそうなるわけ？」

「んー？勝手に怒つてきたから一発。理不尽だろー？」

「あんたが何か言つて怒らせたんじやなくて？・・・そこの人、平氣？」  
さきほどまでもがもがと金髪、霧雨魔理沙に首根っこ掴まれてたのに声をかける。が、返事はない。

「・・・人殺しは犯罪よ」

「してねえ！！・・・おーい」

ぺчинペchinペchin。魔理沙が往復ビンタで目覚めさせようと試みる。

いや、流石にそれで目覚めさせても、頬が痛いからまた怒らせるだけでしょ。

私は魔理沙の頭を小突く。

魔理沙は止まり、ん？とこちらを見上げてくる。

男はむすつとした顔で胸ぐらを掴まれていた。頬は赤い。

多分、羞恥の赤ではない。叩きまくったからだと思う。

「あのなあ、女」

「お？起きたか。よかつたよかつた！」

「そういう問題じやねえ!!とつとと離しやがれ！」

「わりーわりー」

ケラケラと笑いながら魔理沙はそいつを手放す。

そいつはケツと言うと、さつさと行つてしまふ・・・。  
ま、関係ないか。

「リボーンさんが呼んでるわ。行きましょう」

「ん？リボーンが？りよーかい、行くか！」

魔理沙は男のことなど一切気にしていないのか、快活に笑つて私の  
肩に手を置いた。

まったく、元気なやつ。

私たちは学校へ戻る。

すると、そこには、殺されそうな沢田と、殺しそうなリボーンさん。

そして寝ている妖夢の姿だつた。

## 七話：爆発と疑惑

靈夢S i d o

数日後。

どうやら妖夢は何か言われたようだ。  
何で私を避けるんだか。

まあいいかと私は席へつく。相変わらず笑つて私の前の席に陣取  
る魔理沙に飽きれてものも言えない。

沢田はこちらをチラツと見て、申し訳なさそうに目を逸らした。  
何でこつちを見たのよ。問い合わせたいけれどあまり関わらない  
ほうがよい、と本能が告げているのだ。

ならばそれに従うのみ。気になるし、隠されればモヤモヤした。  
だからこそ、危険だというならば従わないといけない。

私は知らないのだから。

予習のために教科書に目を落とした。

放課後。

その日に恐ろしい出来事が起きた。

先日魔理沙が一発ボコつた男が転校してきたのだ。  
名を獄寺隼人。ファミリーとかいうのの一昧らしく、リボーンさん  
と知り合い。そして自己紹介をされた、その後、魔理沙と沢田に喧嘩  
売つて倍にして返されて、……いいや、沢田は返してないか。でも、  
獄寺は沢田を「十代目」と呼び慕うようになつた。魔理沙にはいつそ  
うの敵意を見せつけて。。。

なんでなの？

というより、十代目つて？

沢田は一体なんなの？

私の知らない間に、何が起こっているの・・・。

私は無意識にも拳を握りしめた。

「…靈夢？」

魔理沙が私を覗き込んでいるのがわかつた。

「！」

そこで私が小さく首を振ると、「そうか」と魔理沙は前を歩く。なんも怖くないとでもいうように、意気揚々と歩く魔理沙に悲劇が襲う。

大爆発だ。火薬によるもの。私たちは、「なんだあいつか」と苦笑したが、それは思ったよりも深刻な状況になっていた。

締め上げられない。それも、倍にして返される、という屈辱を与えた魔理沙によほどイラついていたのか、常識を見失ったような獄寺が魔理沙めがけダイナマイトをいくつも投げたのだ。

ここは、一般住民が多く居る住宅街。そんなものをここで投げてどうするというのだ！

魔理沙は周りを見渡して、焦ったように箒を出す。

火についた部分を箒で斬るように叩き落とす。

次に落とし漏らしたものがないか周りを確認した。

一個だけ。

子供へと向かつて飛んでいたのだ。魔理沙は、それには気づかなかつた。

私はほぼ反射的にそれを追つた。

獄寺の表情なんて読むヒマはない。ただ子供を抱きしめて庇つた。爆発が起きる。

爆風が私と子供を襲う。流石にあまり物を食べなかつたのが災いしたが、いともたやすく私の体は風で吹き飛ばされる。これならもつと考えて食事を取るべきだつたわ・・・！

もう爆発は起きない、私はそう横目で判断して、壁にぶつかるのを背中で行う。強い衝撃に胃の中の物が逆流しそうな勢いだつたがみつともないので堪える。

「・・・う、あ」

「お、お姉ちゃん、大丈夫?!」

「ええ、私は平気。あなたは早く行きなさい」

「うん・・・」

私は子供を見送る。そして獄寺を叱ろうと視線を戻した、はずだつた。

そこには二人の影がなかつた。

血痕が点々と続していく。

私はそれを追いかける。痛む体に鞭を打つて、よろよろと暗い道へ入つて行く。

すると、「ぐあああ！」という獄寺の悲鳴が上がる。  
しまつた、魔理沙だ。

魔理沙は確かに、常識がない部類に入るかもしだれない。  
自由が好きだし、樂観的だ。

でも、彼女は『爆発』に、確か恐怖を抱いていたはず。  
いけない、気でも狂つてしまえば最後、獄寺は五体満足で帰れない。  
よろよろと未だふらゆくもののしつかりと歩いていく。  
見つけた、私は鋭く声をあげた。

「魔理沙ツ」

「・・・あ」

血を吐き出した獄寺がその場でうずくまる。よっぽど痛めつけられたのだろう、青アザがいくつもできている。

こんな暴力は初めて見た。

しかし、少しおかしな点がいくつもある。

獄寺はこのようにそこらへんで爆弾を投げるような人だったか？  
答えはNOだ。いくらイラついていたと言つても、彼には常識があつたじやないか。こんなことをする前に、いくらでも確認できたはずだ。「これでいいのか？」と。

それに魔理沙も。こんな暴力の仕方は普通じやない。  
普通なら腕か指を折るんだけれど・・・。

こんな目に見えたアザをつけることはなかつたのに。

ハツとしたように、魔理沙は獄寺の前にうずくまる。アザができるいた獄寺の顔は腕に、魔理沙はどれほど自分がバカをしたかわかつてしまつたらしい。

優しく、その腕に触れた。

ひどい怪我である。魔理沙は申し訳なさそうになると、獄寺を見上

「私を殴るのぜ、隼人」

「バカ言つてんじやねえ……俺も普通じやなかつた。……今日は帰る」

「・・・」

獄寺が立ち上がつて私を一瞥すると、怪我を庇うように歩いて行つた。

あの一瞥は、「すまない」の意味でもあつたのだろうか。

魔理沙に手を伸ばすと、魔理沙はその手をとつて立ち上がり、「行こうぜ」と笑つて行つた。

作り笑いしないでよ、魔理沙。

さて、私も沢田の家に帰つて知り合いを当たつてきますか……。

## 八話：風紀委員と紅白少女

靈夢S.i.d.o

私は携帯の一覧をざつと見る。

ダメだ。『常識を失わせるような』ことをするやつはいない。  
記憶を探れ。何処かにいるはず――。

「じゅうだいめえええ!!!」

・・・そこで私の集中力は普ツリとされた。

携帯を思い切りベッドへ投げ捨てる。獄寺うるさい・・・!

私はとりあえずそのまま携帯を放置してリビングへと降りた。  
今、沢田は確かにボーンさんと一緒に山本の元へ行っていたはず。  
おそらく、妖夢もそちらへ向かつたんだろう、ここには沢田母と私し  
かいないはずだ。

そこには、金髪の幼女を抱え上げた獄寺がボロボロになつて駆け込  
んでいた。

・・・誘拐ダメ絶対。

と、その幼女には見覚えがあつた。

「あら、フランじゃない」

「あー。れーむー。このお兄さんがね、なんかねー」

「こらー! お前なあ、勝手なこと言うなよ!」

「むぐぐー?」

誘拐したの? という疑念のこもつた私の視線に耐えきれず、獄寺は  
その手を離した。

自らは潔白であり、何の罪もないと言つているようだ。

「こいつが風紀委員の連中にいびられてた気がしたから連れてきたん  
すよ」

「うー? ふーキいーんちょーさん・・・だつけ? に直接、道を聞いただ  
けだよ?」

「確かフランも並盛中に入るのよね」

「うん! だから職員室どこかなーつて」

獄寺は一気に脱力した。それで風紀委員に目を付けられて・・・つ

てもともとか。そもそもあんな真面目な奴らがいびる、なんてするはずがないと思う。

私はフランを抱き寄せてその頭を撫でながら、獄寺へ向けてため息をつく。

フランはあり得ない。獄寺と初対面の様子からして、そうなのである。

記憶喪失（物理）でなんか忘れさせそうだが、それ以前にフランなら殺せそุดだから、それは無いだろう。

そこへ魔理沙が訪れる。

魔理沙は獄寺を見て一瞬気まずそうに顔をうつむかせると、フランを見つけたかそちらへ駆けていった。

・・・獄寺の顔が、また渋いように顰められる。

私は気にしていないふりをして、フランを魔理沙へ引き渡す。  
「さて、獄寺。その風紀委員長さんの元へ行きたいのだけど

「なんでだ？」

「いいえ？ ただ的好奇心。・・・私は私で、行動させてもらうわ」

獄寺を引きずつて私は歩き出す。

・・・そして並盛中。その屋上。探しつかれたからとりあえず来て見た。

獄寺はもう帰っている。

風がサアツと抜けた。

殺意らしき感情が向けられる。私は咄嗟に体制を低くした。

先ほどまで頭があつたところをトンファーが通り抜けていく。  
危ないわね、まったく。

「わあお、これを避けたのは君が一人目だよ」

「あらそう。後ろの知り合いは避けられなかつたわけ？」

「当たらなさそうで当たつた。それだけだよ」

とても着崩している男を見てただ思つたこと。

こいつは、おそらくフランが言つていたやつである。

雰囲気というか・・・なんというか、まあそんな感じがしたから。

トンファーを構え直したそいつはまた突進してくる。

懐からお祓い棒を取り出して何回か振つてトンファーを受け流す。

私はそいつの横つ腹に蹴りをいれてやつた。

「フン、と鼻を鳴らして、私はそいつを見下ろした。

「・・・結構やるね。群れなくて、強い・・・理想だね」

「うるさい。で？まだやるの？」

「赤ん坊が君の実力を見たいって言つてたから付き合つてあげてただけだよ。ほら、咲夜。帰ろう」

そいつは知り合い——咲夜を一瞥したら帰つて行く。

群れる？・・・なんのことやら。

「赤ん坊」と言わされて思い浮かぶのはリボーンさんしかいない。

リボーンさんが私の肩に乗つていた。

「流石だな博麗」

「どーも、お褒めに預かり光榮にござります・・・んで、秘密事はよろしくないので？」

「そうだな・・・。お前が俺に一本とれたらいいだろう

「なによそれ。無理難題でしよう」

私はリボーンさんが肩から降りるのを、呆れながら見ていた。

刹那、パン！と破裂音が響く。その弾丸は私の真横を通つて行つた。

『見切り』。私はこれをそう呼んでいる。

「ふむ・・・。お前、確か結界を張れるといつていたな」

「あのねえ。それしいぶん前のお話よ？今引っ張つてきてどうするの？」

「その結界を張つて、三弾、耐えられたらしいだろう」

「・・・それ、負けたら巫女としての面目丸潰れよ」

「そうだな」

リボーンさんはニイツとだけ笑つた。

これは少し面倒臭いことになりそうだ。

私はその場で正座し陰陽玉をイメージする。

それに近しい色・形をした結界が形成される。

「・・・」

リボーンさんがガン見……ええい！ 気にするな！  
すると、チャツと銃が構えられる音がする。

パン！

・・・一発。

パン！

・・・二発。

パン！

・・・三発。

結界はまだ無事である。

少々怖かつた、というのはここのだけの秘密としておこう。

「・・・よし、よくやつた、博麗」

「ふう。で？これでどうなるのよ？」

「さあな？・・・これからも頑張れ。ダメツナをよろしくな」

「なんで沢田が・・・あつ?!リボーンさん!!」

リボーンさんはトンツと屋上から飛び降りて行つた。

私はきつと顔を赤くしているだろう。

「・・・つ！なんでそんなりボーンさんは・・・！」

カアーッン！

おそらく山本がホームランを打つたのだろう、そんな音が屋上まで響いてきた。

## 九話：訪問者？！

綱吉 S.i.d.o

風紀委員長との喧嘩で何とか勝った……と言つていた靈夢が帰つてくる。なんで顔を赤くしていたのだろう？

そして、翌日……？ 休みである。

この日はなぜか神社に帰らなかつた博麗だが、まあ気にしないでおこうかな。

そこはかとなく、俺が睨まれてるのは気のせいだろうか。リボーンがめつさ笑つてるよ……え？ なに？ なんなの？ と、リビングにちょこんと座つている子が居た。

「えーっと、つなよしー」

「ん？ ……つて何でこの子まだいるの?!」

「新しいファミリーだ。歓迎してやれ」

「ええええ?! 聞いてないよ!？」

ギャーギャーうるせえと言わんばかりに蹴られる。痛いよ……。

博麗は微笑みを浮かべてその子を撫でてあげる。

「ブランドール・スカーレットです！ よろしくお願ひします！」

「ブランドールちゃんかー……。よろしくね」

「うん！」

未だその力は未知数、つてところかな？ 多分。

博麗もリボーンも、こんないい笑顔なんだから……。

すると、俺の持つっていたカツプが跡形もなく消え去つた。

「!？」

「つなよし抱つこー！」

「ふ、ブランドールちゃん?!」

「抱つこー！ぎゅー！」

「肋骨が折れるううううううう！」

力強すぎでしょ……つて言うか、ブランドールちゃんはどうやって遠くにあつたカツプを壊したのだろう？

いや、フランドールちゃんがやつたのか……？  
ピンポーン。

ん？こんな時間に、誰がきたんだろう？  
オレは知り合いを思い出す。

山本は妖夢と野球の試合だし、獄寺くんはそんなことしないし。  
かといって魔理沙さんなわけでもない。

まあいいや、とドアを開けてあげる。

「あ、急にごめんね」

そこにはオレが密か（？）に憧れていた京子ちゃんがいた。  
リボーンを信じてやろうと思うきつかけになつた（気がする）出来事の一つ、京子ちゃんに告白したこと。

本人は本気と捉えていないようだつたが、「死ぬ気弾」を知ることになつたから、まあいいのかな……。だつて、京子ちゃんと話せるだけ満足だし。

なるべくなら、もうあの弾、撃たれたくないなあ。

・・・・んん？

エ？ナンデ？京子ちゃん？

「!?あ、ああ、いいよ。多分……ええつと……」

「あら、笹川……だつたかしら？」

「博麗さん！あ、お邪魔だつた？」

「別に。ほら、入るなら入りなさいよ」

博麗が勝手に京子ちゃんを家へ押し込む。

何でそう勝手に……！

オレはため息をつきながらそれを了承した。

「ああもう……いいよ。オレはやることあるから、またな  
「ん？話さなくつていいの？」

「いいよ。女同士で話した方が盛り上がるだろうからね  
仕方ない。京子ちゃんを困らせるわけにはいかないんだよ。

てしまう。

なんていうか、焦つて いるよう で面白い。

「やつぱりツナ君、いいひとだなあ・・・」

「・・・は？」

「ど、こ、が、？」と聞き返したい気持ちに駆られるが、口を噤む。

「・・・変態としか、聞いたことないんだけど」

「え？ そうなの？ いい人じやないかなあ・・・ね？」

「なにが「ね？」のかわからないわ。まあ、あいつを善悪でわけたら  
善になるんでしょうけどね」

「博麗さん、そういう考え方、ちょっと硬いんじゃないかなあ・・・」

「他に考え方があるなら提示して頂戴」

私はため息混じりに 笹川との会話をつなげていく。

私の考え方が硬い？ 変なことをいうやつね。

至つて普通のことを言つて いるだけだとと思うのだけれど。

「ううん。無いよ。私からはね」

「・・・ふざけてるの？」

「え？ なんで？」

笹川がきょとんとする。

何よその顔と苦笑したら、 笹川もまた苦笑した。

何で笑うかもなぜ私の考えを硬いと言うかもわからない。  
けれど、なぜか楽しいと感じた。

「・・・不思議ね、あんた。沢田が惹かれるのもわかるわ」

「ん？」

「いいえ。なんでもない」

私は立ち上がりつて一言言つて部屋から出る。

なぜか、無性にイラついてしかたない。

こんな気持ちになるなんて知らなかつた。

どうしようもなく、私は拳を握つた。

## 十話：束の間の静寂？

綱吉 S.i.d.o

京子ちゃんと博麗が話してる。

オレはただのんびりと過ごしていた。ソファの上でごろりん。まあすることがないっていうのが一の理由だ。

それに、山本たちも野球の試合出てて癒し役（謎）がいない上にお氣楽さん（魔理沙）と彼がいないから・・・暇だ。

はあとため息をつければ上にリボーンを抱きしめたフランちゃんが乗つかつてくる。

軽いけど・・・まあいや。

「フランちゃん？」

「つなよしつ！あーそぼ♪」

「・・・」

はつきり言つて、我が身が怖い。

フランちゃんはオレのカツプを消し去つた張本人だ。

『うつかり』オレを壊されても困る・・・。

すると、トン、トン、という音が聞こえ、階段のあつた廊下から京子ちゃんが顔を出す。

「えーっと、ツナくん。帰らせてもらうね。急にきちゃつてごめんなさい」

オレはフランちゃんを背に乗せたまま京子ちゃんを玄関まで案内する。

申し訳なさそうに言つた京子ちゃん。

・・・そんな顔も可愛いけれど、なあ。

少し戸惑つたままオレは返事する。

「ああ、いや・・・いいよ。それより博麗は？」

「うーんと・・・」

「・・・なんとなくわかつたよ。ありがと。じゃあ気をつけて・・・送つた方がいい？」

「ううん、大丈夫」

京子ちゃんは笑つてオレの手を払う。

「氣遣いは無用、とでも言いたいのだろう。京子ちゃんはそのまま「お邪魔しました」と笑いながら言い、去つていく。

いつのまに時がすぎたのだろう？もう日は落ちかけていた。

「・・・入ろう」

フランちゃんを背負い直し、オレはリビングへ戻つていった。

博麗がそこで携帯をいじっていたのをなんの疑問もなく一瞥し、オレは冷蔵庫から茶を取り出し、コップに注ぐ。

そしてそれを飲み下した。

「博麗、どうしてさつき京子ちゃんのところにいなかつたの？」

「うつさい。気にしないで欲しいのだけど」

「そつか、わかつた」

オレはぶつきらぼうに返事した博麗へのまともな回答を諦めると、冷蔵庫に茶をしまい、博麗をじいつとみる。

どこか不機嫌そうに眉を寄せた博麗は携帯に向かつてただカコカコとなにかを打つているだけ。

「なにしてるんだ？」

「あんたには関係ないことよ」

「なんだよ。獄寺くんに関係ある話かと思つたのに」

「あんたが私に隠し事するからでしょ。・・・そうやって、私があんたに関係無いつていうのは」

ボソリとつぶやいた博麗はより不機嫌そうにため息をついた。なんなんだつて・・・。

「・・・」

「・・・」

「れーむ、つなよしと仲良しじやないの？」

「いつ仲良しになつたのよ、男ど？」

フランちゃんの質問に博麗はただ返すだけだつた。

・・・そうか。博麗の考え方だとそうなるのか。

ちよつと、ショックだな。

「こいつがどうのじやない。私を拾つたこいつの母親とリボーンさん

に恩があるの

「また野垂れ死にそうになつたの？」

「う、うつさい」

フランちゃんがジトーッと博麗を見れば、気まずそうに博麗は視線をそらす。

こうやつてみれば綺麗なんだけどな、博麗は。

「なに見てんのよ、沢田」

「いや、別に」

オレはまたぐて一つとする。

・・・この時は浮かれてたんだ。

翌日から、オレの生活はまた思いも寄らない方向へ進むことになつた。

# 十一話：フラン「えーい！」ツナ「ぎやああ！」

綱吉 S.i.d.o

翌日。家でフランちゃんを背負いながらリビングを右往左往する。

何でだろう、落ち着かない。

ピーンポーン。

わ！また来たつ！この頃は来客が多いなあ・・・。

オレは思考の片隅でそう考えながら応答する。

フランちゃんをおいて、だ。

「はいー？」

『沢田綱吉の御宅でしようか』

「はい、そうですが」

綺麗なお姉さん？

・・・どこか誰かに似たような。

『受け取つて欲しいものがあるので、いいでしょうか』

「どうぞ・・・」

オレは一旦それを切るとドアを開けた。

すると、缶ジュースが渡される。

なんだろう・・・とても不安だ。

後ろからフランちゃんが抱きついてきて、缶ジュースを眺める。

お姉さんがビックリしたように目を丸くすると、口を開けた。

刹那、パンツ！と缶ジュースが塵と化す。

それを見たお姉さんは舌打ちをし、「では」と告げてそそくさと去つて行く。

な、なんだつたんだ・・・。

「なんだ、脆いの。つなよしのコップより脆いよ」

「まったく・・・フランちゃん、急に壊しちゃダメだろ？」

「はーい！」

オレらはリビングへ戻る。

するとそこには、妖夢と山本、リボーンが居た。

なんでだ？さつきまで玄関にはオレがいたはずだが……。

「あ！綱吉さん」

「よう！ツナ！」

「おいダメツナ、さつき誰に会った？」

「ひいつ！銃を向けるな！銃を！……綺麗なお姉さんだつたよ。変な缶ジュース渡してきた」

「・・・ふん」

ニヤツトリボーンは笑つて見せた。

オレは首を傾げる。

「おそらく、そいつはビアンキだ。俺の殺し屋仲間だな」

「えええ?!殺し屋?!」

「そう。まあ、簡単にいえば、あいつの渡す料理は全部毒物だ。絶対食うなよ、魂魄、山本」

「はい！（おう！）」

「オレには忠告しないのかよ！」

リボーンはオレを見る。

なんだよ？オレが首を傾げると、リボーンはオレの背後を指差す。そこはフランちゃんがいる。

フランちゃんがどうかしたのか？

「お前の後ろにいるそいつがいる限り、お前は死なねーだろう」

「え？フランちゃん？なんで？」

フランちゃんと目を合わせ、首を傾げる。

本人もわかつていないうだ。

ダメジャーン。

多分破壊能力を指して言つてるんだろうけどなあ……。

「まあ、そんなわけだ。じゃあ俺は博麗んとこ行つてくる」

「？ああ、帰つたんだつけ。じゃあオレも……」

「お前はくるな。あいつは今少し神経質になつてているからな」

「邪魔つてか?!」

「ああ。それとフランと離れるな。……じゃあな」

リボーンはスタッフと降り立つと玄関から去つて行つた。

山本、妖夢が苦笑したままオレを見る。

なんだ、その生暖かい目は。

「じゃあ、私も稽古があるので失礼しますね」

「ああ。俺も野球の練習しなきやな！じゃあなー！」

「三人とも、バイバーイ！」

彼らは何をしにきたんだろう。

オレは頬を搔く。

——めんどくさいことになりそうだなあ。

なんて、思いながらオレはフランちゃんの頭を撫でた。

## 十二話：紅白はカウンセラー兼・・・

靈夢S.i.d.o

気がつけば、私の腕にどつかの中学校の女がひつついでいる。  
・・・なにが、あつたんだっけ。

それは数時間前・・・いや、数日前に遡ることになる。

☆ ☆ ☆

「リボーンさん、本当ににをするつもり？」

「お前には関係ないだろ」

中学校から帰っていると、リボーンさんと出くわした。  
私に結界を張らせて試していたリボーンさんの真意がわからなかつたために私は問い合わせているわけなのだけど、未だにはつきりしていない。

「・・・お前には、ツナを支えてもらわなければならねーんだ」

「私が沢田を？」

「ああ。・・・つとー」

ぎゅうう！

リボーンさんが言葉を続けようとした時、その姿が宙に浮いた。  
それは、女の子がリボーンさんを抱き上げたからである。

「リボーンちゃん！お久しぶりです！」

「・・・おう、久しぶりだな」

「相変わらずキューートですね！」

「そうか」

適当にあしらわれているような気がするのだけれど、この子はなかなかタフな子らしい。

全く気にしていない。

私はひつたくるようにリボーンさんを取り返すと、ため息をついてその場に下ろす。

リボーンさんはまた歩き出した。

「ああー！リボーンちゃん！あなたー！なんで邪魔をするんですか！」

「・・・あんた、いたの？悪かつたわね、気づかなかつたわ」

「はひつ?!そんなわけありませんよね?!」

「じゃあ先を急いでるから」

「そうやつてあしらい、私はその場をあとにしたけど、その翌日も朝からうるさかつた。

ピーギャー喚いて・・・何が楽しいのだか。

リボーンさんのことばっかり反論してきてあまり関わり合いたくない。

そんな時、私の視界に入ろうとしたか橋の手すりの上に立ち上がったのだ。

平べつたく、人が確かに立てるものではあるけど、それはあまりにもでは。

「危ないでしようが」

「やつと見てくれました、ね・・・ひやああああ?!」

そいつが落ちて行く。私はすぐさまその橋の手すりを飛び越え、川へ落ちてしまつた彼女を抱き寄せる。大丈夫、私なら救える。

あまり時間が立たなかつたようで私にしがみついてくるそいつの背中を軽く叩いて、「しつかりしなさいよ」とつぶやく。

ああもう、昨日今日でこいつと何の因縁があるつての?!

「・・・無事?」

「はひ、なんとか・・・」

川岸へと上ると、だいぶ疲れた様子のそいつがブルリと震えながら私にすがりつく。

寒さからかしら?

「・・・悪いけど、うちに暖房なんて贅沢なもの、ないからこれ着てなさい。濡れてるけど無いよりマシでしょ」

「?!」

私が羽織つてた薄日の上着を掛けてあげる。

そいつを立たせて「あんたんちに送るわ」と言つて笑つてあげる。

「あ！あなたの名前は?!」

私の方へ駆け寄つて聞いてくるやつに私はただぶつきらぼうに告

げる。

「博麗靈夢」、と。

「私は三浦ハルです！よろしくお願ひします、靈夢さん！」

どうやら、懐かれてしまったようだ。

なにか面倒がおきそうな気がしてならない。  
ばれないように深いため息をついた――。

☆ ☆ ☆

そんな三浦ハルは未だに私に懐いているのである。

リボーンさんは何も言わないし、沢田の家にいるとバレたら沢田が迷惑こうむりそうだし……。しばらくあの家には泊まれないわね。しかたない、魔理沙の家でも借りるか。

「……三浦、私はそろそろ帰りたいのだけど

「三浦じやなくて、ハルですっ！わかりました、ではまた明日！」

「あー……明日ね」

手を振つて追いやる。

憎めないのだけれど、少々苦手なタイプだ。

「なあ、今のつて？」

「あら魔理沙。ちようどいいわ。泊めて頂戴」

「沢田は？」

「あの女、ちょっと沢田とあつてね。だからしばらくあなたの家に……」

私の肩に魔理沙の顎が乗つっていた。  
重い。

「やだよ。ベッドそんな無いし」

「そうね……まあ床でも……つて、あなたの家床なかつたわね」

「失敬な。あるにはあるさ。ちょっと散らかつてるだけで」

「足の踏み場が無いのに、『ちょっと』散らかつてる……？」

「うるさいなあ。お前は私のオカンか？」

「あんたのがよつぽど失礼よ」

そんな会話を交わした後、これは泊めてもらえないと判断した私は疑問に思つていることをぶつけてみる。

「獄寺とは話したわけ？」

ビクリ、と魔理沙は私の肩の上で反応を示した。  
話してない、ってか。

「あつそ・・・あ！獄寺――！」

「な、・・・？！」

魔理沙は顔を染めてキヨロキヨロして電信柱に隠れる。

・・・しかし返事もなければ姿もない。

光の早さと言つても過言ではないほど早く魔理沙は私につかみか  
かつてくる。

「お前なあ・・・・つ！」

「なによ。そこまで警戒することないじゃない。それに、あんたは  
謝つたんでしょ？つてかまだ不安ならもう一回腹割つて話せばいい  
じゃない。お互い平常心じやなかつたんだし」

「・・・そう、か」

魔理沙はうつむいた。

あーあーこんな空氣嫌だ。

私はそれから魔理沙に手を振つて立ち去つた。  
しかたない、沢田の家行こ。

## 十三話：ガキ牛と新たな人の登場の予感？

靈夢S.i.d.o

沢田の家はもつとカオスだった。

リビングに入れれば見知らぬ女性はいるわ、牛柄のガキはリボーンさんにいじめられてるわ・・・。

妖夢がいるし・・・。あれ？ なんですよ？

「あ、靈夢さん！」

「・・・家を間違えました」

「ま、待つてくださいよ～！」

ごめんなさいね妖夢。私、今の状況が把握できないの。

あなたがなんでガキどもの集まりにいるのかわからないのよ。

私の知らない間に沢田とリボーンさんになにが・・・。

「博麗、紹介するぞ」

「あら、リボーンさん。その牛と女の人は？」

「女はビアンキ。殺し屋だ。・・・んで、牛は・・・そうだな。ランボつていう」

「ランボさんだもんねーーぎやははは！あ、お前のおっぱい小sぷぎやあ!?」

バチーン。

このガキ、何を言いやがるの・・・？!

つい殴ってしまったじゃない！

吹き飛ばされてそのまま壁にぶつかった後、うつ伏せでピクピク。しばらくすると、むくりと起き上がって、

「・・・が、ま、ん」

・・・我慢できないわよ、泣いてる時点で。

泣きわめいたランボはそのまま走り去つて行つた。

・・・何がしたかったのかしら。

「まあ、あいつもマフィアの一員だ。また来るだろう」

「あいつ・・・『も』？」

「・・・いいや、言葉の綾だ。気にするな」

リボーンさんは帽子を深くかぶつて誤魔化す。  
なんで、隠すのかしら。

そんなに私は頼りない？情けない？弱い？  
深いいため息をついて、私は言つておく。

「あ、そ。まあ面倒ごとには巻き込まれたくないからあれだけど  
「ああそうだ、博麗。お前にもこれを渡しておく」

ヒヨイと投げられた小さな箱。

私はハテナを浮かべてそれを開けようとする。  
しかし、開かない。

「そいつを開けるには、ダメツナから認められる……信用されなければいけないらしい。……そしたら、お前も面倒事に巻き込まれることになるがな」

どこか遠いところを見るように、私を見上げるリボーンさん。

そう言われたら、なんだかこの箱が禍々しいものに見えてきて。

「……捨てていいかしら」

「お前も時期に知ることだ。持つておけ」

「はいはい、まつたく、私が何をしたっていうのよー」

その辺のソファに座つて箱を掲げて見る。

どこか見覚えのある烙印が押された箱だつた。

「……売つたらいくら？」

「おそらく、1000000……まあ、売れるはずもないから売ろうとは思うなよ。ちなみにこの中身は魂魄が知っている」「よーむー」

「いえ、ご自身が確かめた方がよろしいかと」

につっこりと笑顔を浮かべた妖夢に私は舌打ちをしてまた箱を見る。

これが私をどうこうするかもしれない、ねえ。

無くしそうだけどまあいつか。

私はその箱をポケットにいれた。

「んで、沢田は？」

「さあな？」

「ああもう、リボーンさんがいじめるー」

「いじめてはいなきどな」

すると、家の外が騒がしい。

少年の声と、・・・爆発音？それに、走り去るような音。

私は反射的にそのソファから立ち上がり、リビングから出て玄関

へ向かう。

妖夢もついてきていた。

「・・・ま、いつてみますかー。妖夢、刀持つといて」

「決して人は切りませんけどね」

「いいわよ。脅しになるから」

「そういう目的で持つているわけじゃあ・・・」

グチグチと文句を垂れる妖夢を引きずつて外へと飛び出す。

嫌な予感がする。

後々、こんな予感がしながらも馬鹿正直に追いかけてしまった自分を呪いたい。

## 十四話：ランギングフウ太。

靈夢S.i.d.o

私と妖夢のスピードでたどり着いたのは、マフラーをつけた少年と、それを追う黒スーツ二名。

はい、変態決定。

私は妖夢に視線を送つて、妖夢が頷いたのを見てすぐに駆け出す。黒スーツの片っぽに踵落としをくれてやる。

「変態はツ！死刑ツ！」

踵落としが決まったあと、そのまま回し蹴りでその肩を蹴る。ま、首を折るわけにもいかないから肩なわけだけど。

ふふん、得意気になつていると、もう一名の黒スーツが私の肩をつかんだ。

「よくお前、仲間を——!!」

「……ツ!?」

体が強張る。動けない。

それは、こいつがどうのじゃなくて——私の問題。

振り下ろされる拳に、どうすることもできず、私は目をつむつた。

「いけ、ダメツナ」

「う、うおおおおおおおおおおおおお!!!」

黒スーツの頭が殴り飛ばされる。

その後、私は誰かに抱えられていた。

・・・沢田だ。パンツ一丁の。

とりあえず、殴り飛ばしたいけれど……抑える。

「ちよ、お、降ろしなさいよ?!」

「……はつ！あ、ええと、博麗大丈夫？」

「私は大丈夫！つてかあんた、なにしにきたの？」

「なにしについて……助けに来たに決まってるだろ！お前、男嫌いだから行つて大丈夫かなつて

「余計なお世話！そろそろ降ろせつ！」

沢田を押して私は降りる。

ああもう、調子が狂うわね……心配されると、どうもね。

すると、視界のはしにホツとした表情の妖夢と、その方にいるリボーンさん。

「……あと、早く服着なさいよ」

「うわあ！」「ごめん！り、リボーン！！」

「ほいよ」

「き、さんきゅー」

沢田がそんなバカなことをやっている合間に私は少年に近づく。  
「す、すごい……ケンカラんキング低いのに……」

「沢田のこと？」

ランキングって……もし私がつけられてるとしても、それはム力  
つくわね。

格付けされるのはあまり好きじゃないのよ……。

……沢田つて弱いんだ。ふつ。

「そう！男子ケンカ強いランキング！あ、博麗靈夢さんは……」

ああやつぱり格付けされてんのね。

急にボソボソ言い出したかと思えば、急に周りのものが浮き出する、な、なに?!なんなの!?

「……並盛中学校、女子ケンカ強いランキング……一位、博麗靈夢さん、二位、霧雨魔理沙さん、三位、十六夜咲夜さん……ただし、フランドール・スカーレットさんは論外」

……ふうん、魔理沙が強い、ね。

てつきり妖夢が入るかと思つたけど。

「と、言つた感じだね。ええつと、靈夢姉つて呼んでいい？」

「別に構わないわ……あなたは？」

「フウ太だよ！よろしく、ツナ兄、靈夢姉！」

「お、オレも！……よ、よろしく、フウ太」

沢田は照れ臭そうに笑つた。

……なんか、嫌な予感がする。

誰かが霧の中で、笑つているような……。  
私はしつかりフウ太を見た。

「フウ太・・・けつして、この中の誰かと離れないで  
「え？な、なんで？」

「嫌な予感がするの・・・あまり当たつて欲しくない」

「あ、そういうばさ、フウ太。男子ランギングは三位まで・・・誰なの  
？」

フウ太は沢田の問いにキヨトンとする。

それを聞きますか、今。

すると、フウ太が爛々と目を輝かせて言つた。

「ああ、それはね！一位が雲雀さん。二位が山本さん、三位が獄寺さん  
だよ！」

へえ、あの三人が・・・。

総合も知りたいけれど・・・まあいいか。

私はフウ太の手と妖夢の手を繋がせる。

そして、さつさと帰る。

あーもう、疲れた。寝たいわ。

## 十五話：兄と妹、紅白巫女とマフィアボス（未定）。

靈夢S.i.d.o

笹川がまた来た。

今度は、お誘いらしい。

沢田が私を連れて外へ出ていく。寝てたつてのになんなのよ……。

「博麗さんもいくよね？」

「何で私が……」

「……」

「……あーハイハイ。行くわよ」

「……！」

パアツと表情を明るくした笹川は私の手を握る。ブンブンと揺らして、ニコニコ笑う。

何が面白いのだか。

沢田がガツツポーズしてる。どうせ、（京子ちゃん可愛い！）と思つてるんでしょうけど。（正解）

ムカつくから殴る。腹にヒット。

「うぐう?!」

はいはい自業自得自業自得。

笹川は満面の笑みで言つた。

「行こつか！」

……こいつ、沢田を見ているのかしら。

「……もう、めんどくさいわね」

ピクピクする沢田を見捨て、笹川についていく。

「救いは……救いは……」

無い。

---

「うん？ 京子、ダレだそいつらは?!」

鼻糸創膏の男が筋トレしていたらしく、汗だくでこちらを見て不思議そうに首をかしげていた。

家に入つたら見える筋トレ模様つてなによ。

「私のお友達！ツナくんと……博麗さん！」

私たちを指して 笹川が笑つた。

・・・まあ、いいか。なにもいわないでやつても。

「俺は 笹川了平で、京子の兄だ！極限によろしく頼む！」

「つ?! 沢田綱吉です、よ、よろしくお願ひします……」

「……博麗靈夢。よろしく頼むわ」

「応！」

了平さんは笑つた。

それに対し、私はため息を吐くしかない。

「どうしたというのだ、博麗よ」

「別に……暑苦しいやつだなと思つただけよ」

「おお！極限にありがとう！」

「褒めてない……のだけど、まあいいか」

とてもマイペースな人らしい。

了平さんは「?」を浮かべている。

「なんでもないわ」と言つてやると、なんだかムカつく笑みを浮かべられたのでつい殴つてしまう。

そのパンチは了平さんの手のひらにきつちりと収まつてしまつた。

「！」

受け止めた瞬間、了平さんはニヤリと笑つた。

「いいパンチだ！是非、ボクシング部n・・・！」

「うらつ！」

了平さんを蹴り上げる。

しかしそれは腕によつて防がれてしまう。  
反射神経はいい方なのね。

「はつはつは！楽しくなつてきたな！」

「知らないわよっ?!」

しゃがみこむ。

了平のパンチが頭上を通り抜ける。

危ない。しゃがまないと顔面にパンチが入つてたわ……。

「京子ちゃんのお兄さんって、いつもこうなの？」

「うん！ そうだよ？」

「へ・・・へえ、す、すごいね。お兄さん」

「ふふふつ。そうでしょ？ お兄ちゃんはね、いつもああなんだけど、私が小さいころからずっと私を守ってくれたんだ」

笹川の笑みが目に入る。

沢田もそれを見て、「そつか」と笑った。

私には向けられない笑みだつた。

(・・・なんだ、本当に仲がいいのね。私、入るスキがないわ)

なんて考えてしまつた。  
何を考えてるのよ！ 思考を飛ばすように了平さんの腹へパンチを  
いた。

## 十六話竹寿司。

靈夢S.i.d.o

妖夢に連れられてやつてきたのは、『竹寿司』というらしい店。  
へえ、寿司のお店なのね。

「ここにちは、山本さん！」

「山本ー！遊びにきたぜー！」

「・・・」

店の前で二人が嬉しそうに声をあげた。

あーもう、近所迷惑だつての・・・。そういうのに疎いはずはないわよね。特に妖夢。

人の家でそんな声をあげられる意味がわからない。

すると中から山本が出てくる。

・・・なんで店の前に集まってるのよ。入れないいいやない。

「ようー！博麗と霧雨も来たのな」

笑みを浮かべて山本が迎えてくれた。  
来ちや悪いのかしら・・・。

「おーい、山本ー」

突如、中からツナと獄寺が出てきた！

・・・・え？何でいるのよ？

「あ、あれ？博麗たち？！」

「・・・げっ」

獄寺を見た瞬間、魔理沙は辛そうにうつむいた。  
当の獄寺もまた、傷ついたようにそっぽを向いた。  
山本と妖夢はそれに気づかない。

「あれ？沢田さんと獄寺さんも来てたんですか」

「ははっ。ダチは多い方が楽しいだろ？」

「そうですねー！」

・・・もしかして、その『ダチ』には私まで含まれてるわけ？

ため息しかない。

私は別に友達になんていらないってのに。

いたとしても、どうせ先にいなくなるしかないのよ。

「は？誰が友達ですって？勘違いしないで頂戴……」

「は、博麗、そんなこと言うなよ！」

「そうだぜ、靈夢！」

私の言葉に沢田が焦ったように言い、また魔理沙はカラ元氣のように明るく振る舞いながら言つた。

別にそんなの気にしないし……。

「そうですよ、靈夢さん。素直になつた方がいいですよー？」

「……なんで、あんたら私のことを理解したみたいに言つてんのよ？」

「理解してるからな！」

妖夢が言つた言葉に私はただ呆れたようにつぶやくしかなかつた。

魔理沙がまた強がつて胸を叩いた。

・・・私は冷たい視線を向けると、魔理沙は「あっ」とつぶやいたうつむく。

強がらないで。まつたく。

「おーい！寿司持つてきたぜ！」

「おつ寿司か！」

「美味しそうですね！」

「・・・」

山本がいつのまにか寿司を持って出てきた。

獄寺がキラキラした目で寿司を見る。妖夢もにつこり笑いながら

言つた。

「だろ？なにせ、親父の寿司日本一だからな！」

「そうですね♪その通りだと思います！」

ほわわん。あつたかいような甘いような空気が流れる。

寿司を盗み取つて、口に含む。

あ、美味しい・・・けど、

((((お前らもう結婚しろ!!!)))

二人の世界が繰り広げられ、私たちはそう思つた。

・・・いいわね、思い合えるだろう存在がいるって。

## 十七話：理科の授業で

綱吉 S.i.d.o

ぼけーっとしていた。

まあ、次の時間の準備はしてるし、することないし・・・。

「あ、山本さん！次の授業、なんでしたつけ？」

「理科なのな！」

そんなのほほんとした会話が聞こえてきて、オレは瞬間に叫んだ。

「・・・っていうかつ！学校始まってるっていうのに獄寺くんと霧雨こないんだけど?!」

「ま、まあ、魔理沙さんも獄寺さんも普通に遅刻かまたはおサボリですよ」

妖夢が苦笑しながらオレに言葉を返す。

山本も、「だなあ」と笑っていた。

あ、根津来た・・・。

授業が始まる。

気が重い・・・じやなくて、そこはかとなくやる気が出ない。

まあ、オレがダメダメなのは変わんないんだけどさあ。

あ、博麗がうざったそうに表情を歪めてる。

「話長いっての、そのないようもくだらないし・・・」

「ぼそりとつぶやいた言葉。根津に聞かれてないようだつた。なぜか安心。

そして、根津が教卓の前に立つてプリントのようなものを抱え上げる。

な、あれって?!

「では、この前の理科のテストを返す」

「「「「えーーーーーーーーーー?」」」」

根津の言葉にクラス全員が嫌だといたげな声を漏らす。

まあ、そんな反応するよね。

オレだつて嫌だし……。

根津は無慈悲だ。そのブーイングを受けながらも名前順にテストを返していく。

とうとうオレの番だ。

オレに渡されるはずのテストは、オレの元にはいつまでたつてもこなかつた。

・・・・持つていいままなのだ、根津が。

「これはあくまで仮の話だが、もしクラスで一人だけ二十点代を取り、クラスの平均点を著しく下げている奴がいるとしよう。私が思うに、そんな奴は社会のクズだ！ まず、大学にはいけない！ 一流大学を出た私がいうのだからな！」

テストを抱えたまま根津はそう言つた。

「はい？ それって、まさか……オレのこと？

嘘だろ、嘘だろ？！

それに続くように幼い声が上がつた。

「ねーれーむ、あの人結局自慢してるよー？ バカなのー？」

「知らないわよ……あとそういうのは小声で言いなさい。とばつちり喰らいたくないわ」

「えー……」

フランちゃん！ 頼むから変なこと言わないで！ 根津の額に青筋を立つた！

オレはただひたすら、オレに博麗のいう「とばつちり」がこないよう祈つた。

「その二十点代は……沢田だつ！」

ピラリと提示されたテストの点数は本当に二十点代。

や、や、やつぱりいいい！

「うわあああああ～～～？」

オレはそれを見て情けない声を出してしまつた。

「なんで見せるんだよ！」

（どうしよう……！ 明日から生きていけねえ……！）

半泣き状態になりそだつたが抑えて根津からテストを受け取る。

うう、最悪だ……！

ガラツ。

全員の視線が教室の入り口に集まつた。

獄寺くんだつた。

やや不機嫌そうに獄寺くんは自分の席へ座る。その後、霧雨も入つて來た。

いたたまれないように、どこか悲しそうに顔をうつむかせながら博麗のとなりに座る。

「こらー！お前ら遅刻だぞ?!」

「ああ？」

「ひつ?!」

獄寺くんは根津に叱られたら凄んで睨みつける。

根津は情けない声をあげた。

「うー、獄寺くん……」

「十代目！」

パアツと表情が明るくなる獄寺くん。

・・・なんでだろ、ちょっと無理してる氣もあるなあ。

「・・・、これも仮の話だが、もし遅刻して平氣でくる奴らがいるとしよう。そいつらは間違いなく落ちこぼれとつるんでいる！」

またピラリと二枚のテストが晒される。

「んなーー?!獄寺くん、百点?!んで霧雨は八十点う?!」

「そーいや、十代目、こここのテストつてけつこー簡単っすね!」

「あ、あはは・・・」

めっちゃいい笑顔で言つてるよ！

やばいよ獄寺くん・・・。

霧雨は驚かれたのに驚いた表情をしたかと思うと、複雑そうに笑つた。

ううーん・・・なんであんな元気ないんだろう？

「今回のテスト、調子悪かつたわけ？魔理沙」

「いや、靈夢は買い被りすぎだつて。私はあの程度の点数しかだせねえよ。お前じやねえし」

「・・・そ

え？博麗つてもつとすごい点数どれの？

・・・ん？根津が震えてる？

「ありえん・・・！こんな落ちこぼれが百点を取るなど・・・！お前らあ

！カンニングしたな？！」

まさか、カンニング？！彼らがするわけないじやないか！  
でもまあ霧雨はするかもしれないけど！普段すごいしそうな霧雨  
気してるけど！

すると、ガタン、と音が鳴った。

博麗だ。

「人の実力をカンニングだなんて言うのね。あつつきれた。情けない奴ね。自分の方こそ、何もしてないのに？」  
「私は・・・！」

根津が言い返そとしたら、靈夢がピシリと指を突きつけ静止させる。

なんだか、凜々しく見えて・・・不思議だ。

「ああ、そこでテスト採点したなんてバカな返答はやめて頂戴。あんたは實際、生徒のために、必死になにかをしたの？ただ授業してるだけじやない」

「んぐつ？！」

「そうだぜ。・・・靈夢のいう通りだ！」

「んー。うん！そうだよ！」

「確かに、そうなのな」

靈夢の言葉に霧雨とフランちゃん、山本が賛同する。

何でみんな根津いじめてるのかなあ。

妖夢が何か言いたげにすると、ふいと目を逸らす。

根津が叫んだ。

「沢田！博麗！獄寺！霧雨！山本！フランドール！魂魄！」

なんで妖夢まで？！

妖夢も驚いたような顔をしているよ・・・。

「お、お、お、お前ら・・・退学だああああああああああああああああああああ!!」

「「「ええええ?!」「」」

「はあ?!」

まさかの、その一言だった。

## 十八話：お説教とお勉強

咲夜 S·i·d·o

いつもどおり、雲雀さんと部屋で待機している。

「茶」

「はいはい・・・どうぞ」

雲雀さんがそう呟いた。私は嘆息する。

雲雀さんのその一言だけで意味が分かるようになつた。これはかなりの進歩・・・なのかも知れない。

すぐお茶を淹れて渡す。

「・・・」

「まつたく。自分でいれな s・・・」

『みーどりたなびくーなみもーりーの一』

お説教しようかと思つたら雲雀さんの携帯が鳴る。

雲雀さんの視線は私を貫く。

ああ、もう。

『あ、咲夜さんでしょか。校内の見回り、終わりました』

「あら、お疲れ様です・・・? ところで草壁さん、あの校庭にいる人たちは?」

『ああ・・・あれはタイムカプセルを探しているらしいですよ』

タイムカプセル? また急になんで・・・。

『なんでも十五年前のものが見つからならうしくて』

十五年前・・・ね。

まあ先生たちがどうこう言つて探してるんだろうけれど。はつきり言つて私には関係のないことね。

チラリと雲雀の方をみれば、本人は聞いていたか、興味もなさげに「ふうん」と言つた。

---

時遡ること校長室で…

靈夢 S·i·d·o

「校長、いつらを退学にしてください!」

校長室に集まつた私たちは、校長をじいっと見た。

校長は根津の言葉を聞いて考え込むようにうつむく。

退学ねえ・・・生徒を脅すにはいい文句よね。

「いやあ、でも・・・」

「こいつらは私をバカにした上に、カンニング行為までしているんですよ?!」

「おい、さつきつから聞いてりやあカンニングカンニングと・・・。証拠はあんのかよ?!俺はしてねえつていつてんだろ!」

「そこは私の分まで否定しろよ?!」

魔理沙が獄寺に言い放つ。獄寺は魔理沙を一瞥したあと、何か言うと口を開いて・・・そっぽを向いた。

それに気づいた魔理沙はまた悲しそうに眉を寄せる。

すると、校長室に誰か入ってくる。

「待つてください!先生、ツナ君たちを退学させないでください!」「京子ちゃん?!」

笹川だつた。

笹川は校長と根津に詰め寄つて言う。

・・・どうせ、沢田のことだ、(やつぱり京子ちゃんつて優しい)とか考へてんでしょうね、・・・あの表情。

とても恍惚としている。・・・そんなみつともない顔良くできるわよね、本当に。

「・・・、ゴホン。仮の話だが、もしここに心優しい可憐な少女がいたとしよう」

(それってロリコンの話にならない・・・?)

長くなりそうだったから、私が叫んで止める。

さつきつからうだうだと・・・。どうしても退学にさせたいわけ!

「全く!」

根津も、全員が一斉に私を見る。

あーはいはい、急に叫んだのは悪かったわよ。

「いつまでも過ぎたことを・・・ちやうるさいわよ!こんなことで退学だなんてバカバカしくてやつてたんじゃないわ。器が小さい!」「な、な、な、な――?!」

「そうだ、沢田も博麗も我がボクシング部に極限に必要だーー！」

「お、お兄ちゃん?!」

暑苦しい声がする。

・・・あー、あいつね。

私はボクシングなんてやんないけど。

・・・あんた、いつから居たのよ』

「うつせーんだよ芝生頭！」

「なんだとタコ頭！」

一人がいがみ合つて唸り始めれば、根津はすぐに声を上げる。

「とにかくっ！お前らは明日再テストを行う！」

まつたく、私はやつてない無関係者だつていうのに・・・どうしてなのよ？

「とにかく、勉強を頑張りましょうか！ツナさん、靈夢さん！」

ハルがニコニコ笑いながら言つた。

まあ、やらないことには始まらないでしょし・・・。

でも無駄なのよねえ。

「私はいいわよ。別にあんたらがどうなろうが私は知らないし」「・・・ふうん？」

リボーンさんがにやつとする。

ああ・・・この笑みは嫌なことを言う時の笑みだ。

「でも、根津に啖呵切つて退学止めようとしてたじやねえか」

「あ、れは・・・あのウザつたい奴にムカついたから、よ」

「へえ？」

またニヤニヤして・・・。

まつたくもつてリボーンさんの意思がわかんない。

そして、全員が勉強を始めた。

私とかの成績優秀者がツナと意欲のある魔理沙に教える感じ。

フランは途中で飽きて魔理沙にかまつてかまつてついてきていた。

その結果。

・魔理沙とフラン・山本と妖夢・筐川兄弟

・・・爆睡中。

それ以外は起きてるけど・・・まあ詰め込んだからかしらね。

「あ、ハルコーヒー持つてきたんですよ！飲みましょう！」

「持つてるかしら・・・ピザ、夜食にどう？」

「あ、アネ・・・キ・・・」

ハルが連れてきたのか、ビアンキまで来た。

とても嫌な煙を立ち上らせるそのピザを私は視界にいれず、ハルのもつてきたコーヒーを飲む。

煙はコーヒーへ入つて行く・・・危ないわね、飲むとこだつたわ。

「・・・はひ?!ピザとコーヒーの化学反応ですか?!」

「そんなわけあるか!?

(沢田・・・ツツコミはいらないわよ・・・)

## 十九話：作業開始

綱吉 S.i.d.o

「し、しまつたああああああ!!!」

必死に勉強したというのに、オレは遅刻してしまった。は、博麗に怒られる！みんなに迷惑かけちゃうよお！！オレが学校に着くとみんながそこで待っていた。みんな、遅刻せずこれたんだね！

「・・・遅い」

「ゞ、ごめん！」

「・・・こんな大事な時に遅刻をするなんて、バカなの？」

「う、ゞ、ごめん・・・」

「・・・沢田」

そんな時、根津が咳払いをしながらオレに声をかけた。

「・・・遅れるなんて言語道断！退学だつ！」

「う、うううーゞ、ごめんなさい！」

「あのねえ・・・。せめてもうワンチャンス頂戴。休む、とかテストダメダメってわけじゃない。遅れただけじゃない。あなたの目の前にいるでしょ？」

「れ、靈夢？」

「・・・では、別の条件を出そう」

根津は仕方ないと言わんばかりにため息混じりで言つた。

「この学校の敷地内に、十五年前のタイムカプセルがあるっ！それを見つけ出せたら取りやめでいいだろう！」

「・・・へえ。ヒントはあるのな？」

「無い」

山本が聞けば根津が即答する。

これにはみんな目を丸くした・・・そりゃあそんだろう。ヒントが無いのにどうやって探せっていうんだ！

「・・・つざけんじゃねえよ！」

根津の胸ぐらを獄寺君が掴み上げた。

獄寺君が睨みを利かせるが、根津はそれに怯えるようなそぶりを見せなかつた。

「……、獄寺……！ 落ち着くのぜ！」

「黙れッ！ 」いつは十代目の人生を……！

魔理沙は勇氣を振り絞つて制止するも、獄寺君の叫びで辛そうに後ずさる。

「……オレが止めればいいのかかもしれない。でも、オレには魔理沙のような勇氣なんてないんだ。

そんな時、根津が口を開いた。

「ダメな人間に何ができるというんだい？」

「……てめえっ！」

パンツ

獄寺君の首根っこを掴んで引き寄せた妖夢が思い切り彼の頬を引つ叩いた。

「……感情に任せるのはやめておいたほうがいいですよ」

「……悪かつたな」

全員が呆気にとられる中、獄寺君が引き下がる。

妖夢はその後根津の前に立つ。

「どうしても、ヒントは無いとおっしゃられるんですか？ 根津先生」

「あ、ああ。そうだ」

「そうですか……じゃあ、みなさん、探しに行きましょうか！」

「「「「」……はい？」」「」」

「つだーー！ 見つかんないなあ……」

「……ごめんなさい、私のせいで」

「いやいや、妖夢は何も悪くないだろーむしろ巻き込んじやつたら…」

「……お気遣いありがとうございます。じゃあ私、あっち探してきますね！」

オレは妖夢が向こうへ行くのを見届けたあと、校庭にどかつと座り込んだ。

ふうと息を吐いて作業を中断する。

すると、隣にちっこいのが来る。

「ちやおっス、ツナ。どうだ？」

「リボーン！どうだもないよ。十五年前のタイムカプセルなんて見つかんないよ……」

「そうか……じやあ死ぬか？」

「……ううん、まだ頑張る。みんな頑張ってるからさ」「

「……わかった。まあ気が変わらないうちに言えよ」

「あ、うん」

リボーンは満足げに頷いた後、スタッタと歩いて行つた。  
なんだつたんだ、あいつ……。  
オレは立ち上がりつて伸びをする。  
「……始めるか！」

## 二十話：嘘は良くない（震え声

「あはは、根津先生も悪いお方だ。あるはずもないタイムカプセルを探させるなんて……それに、校長にも是非を問わなかつたのでしよう？」

「はつはつは。まあ、あれくらい当然でしょう」

「……今のは、確かに録音したわよ、根津」

ツナS.i.d.o

あつちこつちを探しても見つからない。

ああもう、これはダメかもな……。

「……よし、じゃあ死ね」

「うわあ?!り、リボーン!」

「お前諦めただろ?」

銃口をこちらに向けたまま、リボーンはニヤリと笑つた。

「うう、早く降ろせよ……。

「は？い、いや……」

「諦めたらそこで試合終了なんだぞ！」

「なんのネタだよ!」

リボーンが叫ぶように言つて、俺がそれに対して突つ込んだ瞬間、パンツと頭が撃ち抜かれた。

(……嘘、だろ?ここで死ぬのか……?)

(嫌だ、嫌だ……!関係ない人まで巻き込んだまま死ねるか……!)

(こんなことなら、最初から死ぬ気で探しとけば良かつたなあ……)

「死ぬ氣でタイムカプセルをさがーすッ!」

私が校庭に戻った時にはカオスな空間が生まれていた。  
また上半身裸で沢田がダウジングマシンを持つて唸つている。

「地脈発見ツー・ぶつ壊す！」

拳を振り上げる。

すると、その後ろで獄寺がダイナマイトを持った。

「十代目！手伝います！」

「私もやるのぜ！」

魔理沙はどこから持ってきたかミニ八卦路を構え、放つ。  
ドーンという爆音と共に、悲鳴が上がる。

「だ、大丈夫か、妖夢!?」

山本が妖夢に駆けつける。

妖夢は沢田に抱き上げられていた。

爆風で吹き飛ばされたのを助けたんだろう。

「こ、この通りです！」

「そつか、よかつたのな！」

「よかつたよ本当に。巻き込んでごめん」

「い、いいんですって！」

私は沢田たちが空けた穴の方へ行く。

魔理沙とフランが覗き込んできた。

「こらー！お前たち、なにをしているんだ！」

「げつ、根津……」

「お前たち、こういうことをして……退学だぞ、退学！」

根津が校庭に出てくる。

沢田たちの前に私が『それら』を持って出た。

「……うつさいわねえ」

ジジジ……

『あはは、根津先生も悪いお方だ。あるはずもないタイムカプセルを探させるなんて……それに、校長にも是非を問わなかつたのでしょ  
う？』

はつはつは。まあ、あれくらい当然でしょう』

録音機からそんな声が流れ出る。

根津のメガネがずれた。

「あと、このタイムカプセル……どうやら四十年前のものらしいな。エリートコースまつしぐらなんだつけか？」

魔理沙が私が持つてた紙を奪つて言つた。

そしてペラリ、と根津が沢田のテストを見せたみたいに見せてやる。

根津が青ざめた。

「・・・なんで平々凡々なうちの学校のタイムカプセルにお前のテストがあるんだろうなあ」

魔理沙はへへっと笑つてテストを綺麗に折つてポケットにいれた。私も録音機を同じようにポケットに入れて歩き出す。

・・・目指す場所は校長室。

根津は、学歴詐称のためにクビにされた。

☆ ☆ ☆

ツナS.i.d.o

「・・・・つくーーー！清々したぜ」

「はいはいお疲れ様」

「博麗、お前いつの間にあんな会話録音して・・・」

「・・・別に。どうでもいいでしょ？」

博麗はそっぽを向いてしまう。

魔理沙がニヤニヤしているが、気にしないでおこう。ろくなことにならない。

「・・・博麗、ありがとな」

「なんのことだか」

窓を見やつた博麗。空を見ているのだろう。

今日の空はあんなことがあつた後だからか、いつもより澄んで見えた。

## 二十一話：「妖夢強い」

ツナS.i.d.o

朝、なぜかオレのところまで迎えにきた獄寺くんと、魔理沙、博麗と家を出る。

その途中で京子ちゃんと出会い、オレたちは学校へ向けて歩いていた。

「それで、今日、調理実習でおにぎり作るんだ！」

「へえ、そ、うなんだ・・・」

（よつしやーー！京子ちゃんのおにぎりが食える〜〜！）

オレは心の中でガツツポーズすると、獄寺くんの嫌そうな声が耳に届く。

「うげっ」といつた声だ。

獄寺くんをみやり、その視線をたどると、山本と妖夢がいた。

「それで、もしよろしければおにぎりを差し入れにしようかと思うのですが、なにがいいですか？」

「鮭だな！鮭！」

「わかりました！」

笑顔でやり取りを交わす二人。

傍から見たらリア充カツプルのそれだ。

しかし、山本も妖夢も人気者であるからして茶化すものは居るが嫉妬の視線を送るものはいない。

まあ、羨ましいといった視線はあるけれど。

「おーい！山本ー、妖夢！」

魔理沙が駆けていく。

ほぼ全員が「あつ」と声を漏らした。

・・・当人たち以外だが。

「あ、魔理沙さん。おはようございます」

「おはよーさん、霧雨」

「おう！おはよー！」

「ツナたちもいるのか！」

山本と妖夢はこちらを振り返り笑った。

うん、邪魔した気しかしないけど・・・まあいいか。  
オレたちも歩を進め、山本たちに追いつく。

「お前らもおにぎりの話してたのか？」

「はい！」

「そうなのな！」

「ふうーん？」

「獄寺とツナはなんのおにぎりが欲しいんだ？」

山本が無邪気に笑つて聞いてくる。

オレは苦笑して答えた。

「オレはもらえりやいいよ！」

「・・・」

「獄寺は？」

「どうでもいい」

獄寺くんはぶつきらぼうに返した。

妖夢がそれに詰め寄る。

そして、口を開いた。

「ダメですっ！」

その勢いに押されたか、獄寺くんは一步下がった。

それに比例するように、妖夢もまた前へ出る。

人差し指を突きつけて妖夢は言い放つた。

「女の子たちにがつかりされますよ？」

「・・・それこそ、どうでも」

「よくないです！まつたくもう・・・」

「・・・食えりやなんだつていい」

負けたらしい獄寺であつた。

なんだかその様に、つい笑えてしまう。

「ああ！十代目！笑いましたね？！笑いましたねええええ！」

「ごめん、ごめん！」

「・・・おにぎりねえ」

博麗がどこか遠くを見つめるように、ぽつりとつぶやいた。

オレにはその真意なんてわからない。

(・・・よくわからないけど、今日はいろいろありそうだなあ  
そしてまたオレは人知れず苦笑した。)

## 二十一話：ポイズンクツキングおにぎり

「今日、おにぎりを作るつて？」

応接室で、雲雀は咲夜に聞いた。

窓の向こうに目をやりながら、雲雀は笑った。

それに、咲夜は何に笑んだかわからないまま返す。

「ええ。そうですが・・・」

「じゃあそれ頂戴」

ぐりん、と咲夜を向いて、雲雀は言つた。

笑みはすでにそこになく、無表情であるが。

咲夜はそれに目を丸くする。

「えつ・・・」

「鮑ね」

「は、はい・・・」

勢いに押されるまま、咲夜は頷いた。

雲雀はその咲夜の返答に満足したのか、またそっぽを向いた。  
やや間があつて、状況を把握した咲夜はため息を吐いた。  
(仕方ない人ね)

ツナS.i.d.o

「実習で作つたおにぎりを男子にくれてやるーーー！」

「おおおおおおお!!!!」

女子がおにぎりを持つてやつてくるなりそう叫ぶと、男子もそれに釣られるように雄叫びをあげる。というか、歓喜の叫びだ。

女子の列には、京子ちゃんもいるし、博麗たちもいた。

・・・しかし、恐るべきことに京子ちゃんのおにぎりと、博麗、魔理沙のおにぎりはポイズンクツキング済みだ。

うん。フランにはやめておいたんだろう。おそらく。

ああ、神よ。あなたはなぜこんな苦行を・・・！

「・・・ツナくん？」

「な、なにかな!?」

おにぎり（ポイズンクッキング）を持つた京子ちゃんがオレの顔を覗き込んだ。

（うわああ、ど、どうしよう?!）

「食べる？作つたんだけど・・・」

「え、あ・・・」

「十代目、食わないんすか？」

「お、ならもらつていいか？」

何も知らない獄寺くんと山本が手を延ばした。

オレはそれを、自分の腕を振り上げることで阻止する。

「食べたら、死ぬんだぞ！」

「は、」

「えっ」

叫びながら、オレは言い放つた。

彼らの手から落ちたおにぎりは、オレがキヤツチする。

獄寺くんたちは呆気にとられたようにオレを見る。

「ツナ、くん・・・？」

しまつた、京子ちゃんの食べないと、嫌われる！

どうしよう?!

ぐるぐるぐると思考が回る中で、パンツと破裂音が響いた。

強い衝撃。それは頭と腹を通過した。

「死ぬ気でおにぎりを食う!」

オレは次の瞬間、両手のおにぎりを口に入れ、京子ちゃんが持つていたおにぎりまでも口に入れれる。

そして、その隣の人の中を食う。

「きゃあ！」

「さ、沢田!?」

驚いている声が聞こえるが、知らないな！

オレはまた近場の人のおにぎりを食べる。

「食われた！」

「おにぎりがないわ！」

「沢田は暴走したああああ！」

「誰か、止めろ！」

もぐもぐ、とおにぎりを咀嚼するオレを取り囲むクラスメイト。

その山を飛び越えた。

そして、その先にいる博麗の元へ・・・行くと殴られた。

「あでつ?!」

「なにしてんのよ」

「は、博麗・・・痛い。結構」

「早く服着なさいよ」

「うわあ?!」

博麗に指摘されてオレは何処かに落ちてている制服を拾って着る。

うう、また死ぬ気になっちゃったよ・・・。

ああやばい、口元に米粒が・・・。

焦るオレを見てため息をつく博麗が、「あつ」と声を漏らした。

「「「「「さくわくだあ」」」」

「ひいつ?!」

男子が恨めしそうにオレを囮んだ。

オレはそれに身を縮こまらせるしかできない。

その男子の一人に、ポンツと肩に手を置いた博麗が口を開く。

「あんたら、さつき沢田が言つたこと覚えてんの?『食べたら死ぬ』のよ? 笹川のはともかく、他の女のには毒が仕込まれてるかもしれないわ」

「な、なによ博麗さん。私たちがなにかするとでも・・・?」

「違うわよ。魔理沙よ。魔理沙の薬ならそういういたものすることできるでしょ?」

「やつと私に話を振つたかと思いきや、酷いぜ靈夢!?!」

博麗が魔理沙を指差すと、魔理沙がやや涙目で反論。

女子の目は、魔理沙に向けられる。

「魔理沙さん、言い訳はあつちで聞くわ。おにぎりを置いてちょっといきましょ」

「ええ?! いや勘違いなのぜ! あれは靈夢の罠で・・・お、おい、聞

いてんのか?!見てないで助けてくれ妖夢ー!・フランー!」

「あー……頑張つてください」

「ドンマイ☆」

「救いがねえ!」

魔理沙は女子に引き摺られていった。

おにぎりはそこに残つたままである。

男子の喉がなる。

そこにあるのは、ポイズンクッキングされたおにぎりがあるのみだが。

「……いただき」

男子が手を伸ばすと、たつた一つのおにぎりに触れたものがいた。獄寺くんだ。

彼はそのままひよいつと口にすると、顔を青ざめさせる。

しかし、なんとか全部咀嚼し飲み込むと、がつくりと膝をついた。

「……ごちそうさま」

「(う)、獄寺くん、頑張つたね……」

「……じゅう、だいめ」

獄寺くんは、カクリと意識を失つた。

オレはそばに寄つて、背中を撫でる。

「……やつぱこれポイズンなのねー」

「……ははは」

「食う?」

「えつ」

「食う?」

博麗におにぎりを差し出される。

どこか期待を含んだような視線が突き刺さる。

「……イタダキマス」

「あら、そう?・・・いいのね?」

「……」

無言でおにぎりを取る。

そして、大きく口を開けて押し込む。

つい、そのまま飲み込む。  
しかし、毒はある……。

「おい……しいよ……」

「あー、さ、沢田……？」

申し訳なさそうな博麗の声を聞いたのを最後に、オレは眠りについた。

## 二十二話：おにぎりおにぎり。おにぎりいっぱい

「山本さん！」

妖夢が笑顔で山本に駆け寄る。

山本はそれに気がついたか、「ん？」と返しながら振り返った。

妖夢の手の上には、綺麗な形のおにぎりが二つ。

それを掲げるように見せると、山本は疑問に思つたか声に出す。

「それ、どうしたのな？」

「おにぎりですよ！よくできたものなので、差し上げようかと」

「さんきゅな、妖夢！これで今日のこの後も頑張れるぜ！」

山本がガツツポーズで妖夢に返すと、妖夢がとても嬉しそうにはにかんだ。

そして、その場でおにぎりにかじりつく。

咀嚼音がその空間に響く。

「良くてきた」といつたものの、あまり美味しくなかつたらどうしよう、と妖夢は内心ハラハラしていた。

たかがおにぎりだが、妖夢はそれにかかわらず不安そうな面持ちで山本を見あげる。

「うん、うまい！ちなみに、妖夢」

「はい、なんでしょうか？」

「いや・・・。よくできなかつたら、俺もらえてなかつたのかなつてな」

そう問うた山本に、妖夢は考える。

確かに、そうかもしれない結論に至つた妖夢はそのまま伝えた。「・・・まあ、そうですね。悪い気もしますが、人に差し上げるのだからいい出来の方がいいじゃないですか！」

「そうだなあ・・・。でも、俺はもらえばいいぜ？妖夢の、美味いからな！」

妖夢はその場で硬直した。

いくら靈夢のように鋭くなくとも、だいたいの意味合いはわかるであろう。

今の妖夢の思考では、「妖夢のあればどんなものでもいい」といつた感じで捉えている。山本の方が無意識に言つてゐるということを知つても、自分の料理の腕を認めてもらえているだけだとわかつていても、そう言う意味合いで捉えてしまう。

どうやら、今の妖夢は冷静でないようで、つい声を発しようと口を開けてしまつた。

山本は不思議そうに首をかしげているばかり。

「……あの——」

「あ、悪い！ そろそろ時間だ。話はまたあとでな」

「へつ？ ……あ、はつはい！ すいません、わかりました！」

山本の言葉を聞いて、ハツと気がついた妖夢はつい反射的に言葉を返してしまう。

それを聞いた山本は安心したように「おう！」と言つて去つていく。ぽつんと一人残つた妖夢ははふう、と息を吐いて胸を撫で下ろす。「なにを言おうとしてたんだろう……私つてば、勝手に勘違いしてその挙句、山本さんを困らせるような……」

また、息を吐く。

何を言おうとしていたかすら自分で把握できずに、妖夢は顔をしかめた。

久しぶりに体を動かしたい。その一心で妖夢は足を動かした。

---

コンコン、とドアがノックされる。

応接室の主と化している雲雀はそれを聞いてすぐ動いた。

ドアを自ら開けると、そこには丁寧にお辞儀をした咲夜がいた。

「ここにちは、雲雀さん」

「……おにぎりは？」

「勿論ここに。ご所望通り作つてまいりました」

微笑んでおにぎりを差し出す。

雲雀はそれを掴むと口にする。

「……悪くはないね」

「勿体無いお言葉です」

「咲夜、もう一個あるのかい？」

「はい？ いえ、ありませんが……」

「そう。……なら、いいよ」

「??」

どこか不機嫌そうに眉をひそめた雲雀に、咲夜は何のことかわから  
ない様子で雲雀を覗き込む。

しかし、ふいと逸らされた目と、目が合うことがなく咲夜は肩を落  
とす。

「……雲雀さん？」

「別に。なんでもないよ」

「そうですか」

雲雀のそつけない態度は普段通りなので咲夜は至つて普通に接し  
ようとする。

「……が、思つたよりも雲雀は不機嫌なようだ。

「……そろそろ行きますね」

「うん」

「では」

咲夜は立ち上がり、応接間から出た。

——刹那、ヒュンツ、と空を切る音が聞こえた。  
続けてカアンと金属音がする。

銀の刃が咲夜に襲いかかつたのだ。

それをナイフでやり過ごすと、咲夜は笑つた。

「久しぶりに暴れてるわね、妖夢」

「フーッ、フーッ！ ……咲夜さん」

「はいはい。ここじゃなんだから移動しましようか」  
のんびりと歩き出した咲夜に、妖夢が斬りかかる。  
パリインと窓が割れる。

二人は、窓の外へ投げ出された。

---

フランドールは単身、勝手に早退していた。  
おにぎりを袋へいれて、それを持って走つて。

家に着くと、ただ彼がいる部屋に向かつた。

「あ、やつぱいた！」

「・・・フラン。学校は？」

「リボーンに渡すために帰ってきた！」

リボーンはスタスタとフランに近づく。

フランドールはそれを不思議そうに眺める。

パンツ！頬が思い切り叩かれた。

「い、いた」

「バカか、お前は」

「えつ・・・・・」

「何で休んだ。お前は遅くから勉学に励み始めたんだ。追いつくためにもつと――」

「・・・・・んで」

ポタリ、と、リボーンの頬に零が落ちる。

フランドールの紅の瞳が潤んでいた。

「渡したいって思うのはいけないことなお・・・・・？」

「・・・・・」

手を離した時に、落ちてしまつたおにぎりの袋をリボーンが拾う。ごそごそとおにぎりを取り出し、口にいれた。

フランドールの手が小さいからか、やけに小さいおにぎりを咀嚼する。

しかし忘れてはいけない。それは、ポイズンクッキング後のおにぎりであることを。

小さいながらも形の悪いおにぎりをまた一つ、口に放る。

「・・・・美味い」

「！」

「ただ、早退するのはいただけない。明日からしつかり取り組め」

「うん！ありがと、リボーン」

「・・・別に」

フランドールが涙拭いて笑つたのを見て、リボーンも笑つた。

・・・ただ、顔色は悪かつたが。

## 二十四話：ハンバーグ

第三者Side

「A組———つ、極限に頑張るぞ——！」

体育館から響く叫び声。

咲夜は屋上で、ため息をつきながらそれを聞いた。

そして視線を落とし、もう一人の人物に話しかける。

「みなさん、体育祭のために頑張ってるみたいですね」

「……」

「あの、雲雀さん？」

雲雀は黙つて咲夜を見上げた。

咲夜と目が合う。

「……体育祭の日に、ハンバーグ作ってきて」

「え？ 私ですか？」

咲夜は急な頼みごとに、目をパチクリさせた。

雲雀がこくりとうなずく。

「君が作つたものが、食べたいから」

その一言は咲夜の向けて放たれたものの、雲雀の目線は咲夜でなく明後日を向いている。

咲夜からその表情が読み取れない。

「……いいですけど」

しばらく、間が空いた。

話すことがないのか、雲雀はそれ以来黙つてしまつたのだ。

それが余計、咲夜を焦らせる。

（どうして黙るの？ 私がなにか言つた？）

（いや、言つたには言つたけれど、どうしてこんなに黙つてしまふのかしら）

咲夜は心内でもんもんと考える。

しかしつこうに答えは見つからず、ただため息しか出なかつた。

そんな時、屋上のドアが開き、そこから風紀委員がくる。

その人物を二人は知つている。

「委員長」

「草壁さん……？」

「なに？」

「それが、棒倒しの対象に、笹川了平ではなく、一年生の沢田綱吉が選ばれたみたいでして」

「ふうん」と返した。

「まあ、それくらいならほつといていいよ」

そうつぶやくように言つた雲雀は、草壁の横を通り過ぎて屋上から出て行つた。

咲夜は草壁に近づいた。

「お疲れ様です。……あ、草壁さん、ちょっとといいですか」

「なんですか？」

目の前で引き止め、少々考え込む。

草壁にとつては、このようなことはそこそこあるので、何も思わず待つた。

問いたい内容を整理して、草壁に聞いた。

「雲雀さんつて、ハンバーグが好きなんでしょうか」

「そうですよ。ああでも、作るのなら……委員長はにんじんが嫌いなので、抜いてきた方がいいですね」

「ありがとうございます。引き止めてすいません」

「いえ、いいんですよ。では」

咲夜は草壁を見送つた。

そして、簡単にハンバーグのレシピを思い出す。

(……結構雲雀さんつて、子供っぽいんだなあ)

そんなことを思いながら、咲夜も屋上を後にする。

指折り数え、結論は。

「まあいいか。今日はスーパーにでもよつて足りないものを買い足しましよう。少しでも喜んでいたたけるよう、頑張らないとね」

くすりと笑つて、

## 二十五話：オカイモノ

第三者Side

咲夜は、雲雀の要求したハンバーグの材料を買いに出かけることにした。

人混みはそこかで多くなく、比較的通つた店でもあるので、目的の材料は揃えられた。

よし、レジへ向かおう。

そう足を動かした時、見覚えのある黒いリボンが揺れた。足音を抑えて、息を潜め、その背後に近づいた。

それは半ば反射的だつた。

彼女の姿を見て、体が動いたのだ。

——トンツ、と。

「ひやああああっ!!!」

「しーつ」

「あ、・・・さ、咲夜さん」

オーバーリアクションだ。

咲夜は冷や汗をかきながら、妖夢に黙れと声をかけると、妖夢ははたと気づき、口を塞ぐ。

こちらを認識した彼女がホツとしたように胸を撫で下ろす。

そんな怖がることであつたのだろうか。

彼女の苦手な幽霊は昼間に出てははずもない。

驚かせにかかりたのだから、それ相応の態度は望んで正解だろう。彼女としても、ここまで驚きの声が出るとは思わなかつたのか、顔をやや赤らめてうつむいてしまつた。

ふと、妖夢の持つカゴの中身が気になつた。

「あら。あなたも?」

「はい・・・えつと、えつと、家で食べるので・・・」

「あなたつて確か沢田と同じどこに住んでなかつた?」

「変な言い方はよしてくださいよつ!」

妖夢はやや顔を青ざめながら、咲夜の言葉に反論する。

何か嫌なことでもあつたのだろうか？

だとしたら、綱吉を殴つてこなればならない。

友人を傷つけた罰なのだしき

周りを確認したが妖夢は、ふと息を吐いた。

「よつ、二人とも」

「ひやああああああああああああああああつ?!」

あら・・・山本

なんとなく、青ざめた訳がわかつた。

妖夢は目を逸らし、咲夜は何とも言えない表情

見ていた。

「・・・こんにちは。どうしたの?」

「ん？ああ、まあな。」妖夢の声がしたから来てみたんだ！わりいな、邪

「ふのよ」

「八、  
ハビ」

妖夢はもうかちんこちんに固まつてしまつてゐる。

本当に彼女に何があつたのだから。

〔！〕  
われがにはしないが  
咲夜は去って行く山本の手を握りていた

「山本、妖夢を手伝つて行きなさいよ」

「・・・あ、ああ。わかつた」

妖夢の背中を押して、咲夜はその場を離れた。

深呼吸をしてから一旦後ろを見やる。

顔を赤くした妖夢と、それを気遣う山本の姿があつた。何だかそれを見て、咲夜はフツと笑み、レジへ進んだ。

## 二十六話：笑み

咲夜 S·i·d·e

私は、雲雀さんを探していた。  
こんなとき今まで見つからないとは、どこにいるというの、あの人は……。

と、言うのを忘れて居た。

本日は体育祭当日。時刻は昼の十二時ほど。正確な時間は、今は時計を見る暇すらないからいいとする。

何故雲雀さんを探しているかというと、作ってきたハンバーグを食べてもらうためである。

案外こういった物が好きだという雲雀さんのために作ってきたこれを、なんとかして食べてほしいのだけれども……作ってこいと言つてきたくせに、姿を消すとは何事か。

ハンバーグがどうなつても知らないというのか。

まあ、これをなんだかんだするのは、食材がもつたいないからやめておくけれども。

私としては、一つの場所でおとなしくそこに居てもらいたい。  
探す手間が省けるし、すぐ報告することも出来る。

そちらの方が、こちらとしても願つたり叶つたりなのだけれど、現実はそうも甘くはない。

それは知つていること何のだが、どうしても運命……いや、現実を呪わずに居られないわけだ。

様々などころを搜索しつつも、私はところどころ駆けたり、探したりで、忙しない昼を過ごしていた。

「……はあ、居た」

「……咲夜」

「どうしてすぐに離れて言つてしまふんですか」  
「群れるのは好きじゃないからね」

「つん、と顔を背け言う雲雀さんに、私はため息をこぼした。  
「でしたら、少し離れた場所にいるでいいんです。なんなら屋上にい

てくださつてもよかつた」

「じゃあそうしようか」

「いや、ダメです！やつと見つけたというのに、どうして野放しにしま  
しょうか！」

「ん？ 屋上には来ないのかい？」

行くとは言つてないんですねが。

私は心中でそうつぶやいてから、雲雀さんを見た。

雲雀さんは、木の上でくつろいでいた。

とりあえず、私は抱えて居た箱を雲雀さんに手渡す。  
もちろん、私も木の上にのぼつた。

「・・・ハンバーグ」

「はい、どうぞ」

「・・・ん」

ぱかっと箱を開けた雲雀さんは、思うことがあつたのか、表情を変  
えた。

私はそんな雲雀さんを気にかけることもなく、ただそのハンバーグ  
に物を差し込んだ。

「これ、さしあげますね」

「・・・！」

並盛印の旗。

ハンバーグには、それがぴんつとたつていた。

爪楊枝と紙で出来た簡素な旗だが、気に入つていただけただろうか

？  
「・・・」

「草壁さんに教えてもらつて、作つてみたんです」

苦笑しながら、私はその旗を見る。

これで気に入つてもらいたら、私はとんだ幸運を得てしまつたかも  
しれない。

こん名簡単な物で、喜んでいただけるのか――。

「・・・ありがとう」

ふつとほほえんでみせた雲雀さんがそう言つて、ハンバーグを口に入れ、咀嚼した。

私は、ついその一言に思考が止まつてしまつ。

私が止めるのは・・・・・なのに・・・！

「・・・戻つていいよ」

「は、はいっ！」

その言葉に、はじかれるように私はその場を離れた。

ふと木を見上げる。

嬉しそうにハンバーグを食している雲雀さんの姿がそこにはあって、私はなんだか心が暖まつた気がした。

## 二十七話：○○○○病（笑）

綱吉 side

朝から俺は憂鬱な気分だつた。

まあ、こんな事態になつちまつたら、誰だつて憂鬱にもなるよ  
な・・・。

「はー・・・」

「・・・」

「・・・なにしてんのよ、沢田」

「さあな」

俺のため息に、博麗とリボーンがぼそぼそと（リボーンは隠す気はないらしい）話しているのが聞こえた。

何をしてるかなんて、聞かないでくれよ・・・頼むから。

俺は腕まくりをし、その腕にあるものに目を通して、ひつそりと溜息を吐いた。

「おい・・・それ、ドクロ病じやねえか」

「なんだそれ?!」

「なにこれ・・・ドクロ・・・?」

『昔、女だと思つてた好きなキャラが男キャラだつたことがあつた』

『ぎやああああああああああああああああああああああ?!』

「ふうん・・・」

「は、博麗っ!」

「いーいこときいたあ」

博麗が棒読みでそれを言つてどこかへ行こうとする。

俺はその腕をつかんで、口止めをしておこうと口を開けて、そのまま声を放つた。

博麗はそれを聞いて、嫌な顔をしていた。

「・・・はあ、あいつを呼んでおくか」

☆ ☆ ☆

「俺の患者ちゃんはどこかなあ～つと」

「よう、シャマル」

「よお。患者はどこだい・・・？」

「こいつ殴つていいわよね」

変なおじさんが来たかと思えば、まっさきに博麗の胸に手を当てようとしていた。

それを全力で阻止しながら、青筋を立てる博麗も、変だと思うけどなあ。

「こいつだ」

リボーンは俺の肩に乗つて、シャマルというらしいおじさんに言った。

シャマルは俺の胸を触つて、舌打ちした。

「男かよ・・・」

「はつ」

「じゃあやめた。診ない」

「はいいいい!?」

シャマルは俺から手を引つ込め、ハンカチでその手を拭いた。

なんだよ・・・こいつ・・・！

「この男マジで殴りたい・・・」

「我慢しろ博麗」

「診てほしいんだつたらこの別嬪ちゃんとちゅーさせてくれよ」

「なつ!？」

「・・・殴ろう、そうしましよう」

博麗を向いて唇を突き出すシャマルに、無性に俺はイラついた。

シャマルと博麗の間に割り込んで、俺は頼み込んだ！

博麗の怒りを買うのは俺になつちまう！それだけは嫌だ！

「・・・！」

シャマルの顔が、びっくりした、というように変わった。目を丸くして、何かをじつと見て いるようだつた。

「・・・いやだが、しかたねえな・・・。診てやるよ」

「いいの!?」

「ほう

シャマルは、申し訳なさげに視線を逸らすものの、こくりとうなずいた。

俺の隣で、リボーンが笑いながらそれを見ていた。

「よかつたじゃねえか。死なずに済んで」

「ただけどよお・・・、なんでなんだ？」

「いや・・・。お前、さつき腕に書いてあつた・・・いや、なんでもない」

『初対面の女の子に殴られ蹴られればこぼこにされたのがトラウマになっている』

黒歴史ともすでに言えないようなことが書かれていた。

それをみんなが見てしまう。

「――――!?」

☆ 少年治療中 ☆

「おお、おお・・・治つてる!!」

「けつ・・・当たり前だろ」

「ありがとうございます!!それじゃあ、お茶でも・・・」

「私も、お茶くらいには付き合うわよ・・・」

「!よし、じゃあおねがいしようか!!」

((やつぱやめときやよかつたかも))

俺らはそんな風に談笑しながらリビングに移動する。

ああいつてしまつた以上、お茶を出さないわけにはいかない。

完全に、博麗狙いな気がしてならないが、まあ・・・違うだろう、とは思いたい。

ガチヤつ「じゃあそこら辺に座つて・・・はつ?」

俺は目を疑つた。

「・・・」

ソファに座つた獄寺君の膝に座り、そのまま彼に抱き寄いでいる霧雨がいた。

俺は、一旦開けたドアを閉める。

それを不審に思つたらしいシャマルと博麗がドアを開け、中身を確認する。

「……どうした？……つて、かわいいk……隼人……？」

「十代目、シャマル……タスケテクレ」

うつろな目で彼はそう訴えかけてきた。

うん、でもね、幸せそうだなって思うよ。

「……デレデレ病、だな」

「なにそれ?!」

「ゞおくでらゝ」

「う、うおつ!」

霧雨が獄寺君にしがみつく。

それに彼は戸惑い、わたわたと慌てた。

なんだか、その様は……ずっと避けてるようにも思えた霧雨らしからぬ態度で、「ああ、これも病気なんだな」と妙に納得できた。

「これも治したほうがいいのか?」

「いや、治そうよ!」

しかたない、とシャマルは獄寺君の手の平に何かを乗せた。

霧雨はもつともっと密着していく。

寂しがり、なのかな……。病気のせい?

「……うう、どうして……どうして、私を嫌ってるみたいにするんだ……」

その言葉に、獄寺君はびっくりしていた。

デレデレ病は、自白しちゃうような効果もあるのだろうか?

「うつ、ひぐつ……。うう……ゞく……むう!」

獄寺君が、彼女の言葉をさえぎつて手で口元を覆つてやり、なにかを口に放り込んでやつていたような。

「うるせえ……」

「ゞ、ゞく……?」

「……大丈夫か?」

霧雨の様子がおかしい。

いや、さつきほどおかしい物はないが、今も十分と言つていいほどおかしいとは思う。

パクパクと金魚のように口を開閉させて、魔理沙は見る見るうちに顔を赤くさせていく。

「お、まあ・・・！」

ぶるぶると震える霧雨。

さすがに嫌な予感がしたか、獄寺君がその顔を覗き込む。

おそらく、それがきっかけになつたのだろうか。

霧雨の拳が振り上げられる。

「はつ？」

「ばかああああああああああ!!!!」

パンツ!!!

乾いた音。

俺らは耳をふさいでその音を最小限にとどめた。

☆ ☆ ☆

「とりあえず、霧雨の病気が治つてよかつた〜！」

俺はほつと胸をなでおろしながらそうつぶやいた。

「まあ、獄寺は重傷だけどな」

「でも、仲直りしたみたいよ?」

「え?」

「ほら」

博麗が指し示した方向には・・・、

「いつてえ・・・」

「ご、ごめん・・・」

「いや、俺も・・・その、離れるの忘れてたし・・・」

「う・・・」

獄寺君を介抱しながらも、顔を赤く染める霧雨の姿があつた。そこに、シヤマルが向かう。

「つたく、俺よりも先に彼女作るなよ、隼人」

「「はあ!?」

にやけた顔でそういうと、二人はすぐさま声を上げた。

「いいねえ」「

「リボーンが悪乗りした・・・」

リボーンまでもがそういう始末で、俺は溜息しか出なかつた。

「彼女、か」

そんなつぶやきが聞こえた気がするが、その声の主と内容が一致しないせいで、どうでもいいんだろうと高をくくり、聞き流してしまつた。

## 二十八話：デイーノと少女

デイーノ s i d e

「いつて……。また転んじまつた……」

俺はそんなことをぼやきながら、打った頭を押さえ、あたりを見渡した。

周りには人がいない、それを確認したとき、ふうと息を吐いた。  
(よかつた……)

なんでそう息を吐いて胸をなでおろすのか。

さつきの言葉を聞いてわかる通り、俺はよく転ぶ。

当然、よく転ぶのならば見る人はいるわけで。

いつもなら、転ぶと「ヘナチヨコデイー！」とからかわれるか、無視されるか。その二つだけではない、睨んでくる奴だつている。

・・・マフィアこええよ。

「友達、作れよボス」

「しつかりやれよデイー！」

ロマーリオと親父の言葉がよみがえる。

その二人が、俺が今入っている学校に入る前、そんなことを言つてくれたのにな……。

申し訳ない気持ちを抱きながら、天井を仰ぐ。

天井をぼんやりと眺めながら廊下を歩いていると、ドンッと何かにぶつかってしまった。

それがなにか視認する前に、それは、

「きやつ」

・・・短い悲鳴を上げた。

誰かにぶつかってしまったようだ、俺は急いでその人の背中に手を添え、支えてやりながら声をかける。

「わりい、大丈夫か？」

慌ててその人に怪我がないかを確認する。

あまり固くない体。

支えてるのも楽だと感じるほど軽く、体格は小さめ。

・・・少女、だつた。

しかも、その子の顔は真っ赤で、俺はつい怒らせてしまつたのか？  
と不安に思つてしまつた。

「・・・」

「あーっと、痛いところはないか？」

顔を覗き込みながら俺は問う。

少女は真っ赤な顔のままこちらをジロリとにらみつけるように見  
ると、ふいと顔をそむけてしまつた。

「・・・ちゃんと、前見て歩きなさいよー。」

俺を小さく押して支えていた手を払うと、彼女は早足で歩いて行つ  
てしまつた。

小さめな子だつた。

「・・・あの子も、マフィア関係者なのか・・・？」

この世界は非情だなあ、なんて。

俺はそんなことを思いながら、また歩き出す。

今度はちゃんと前を向いて。

数日後。

俺は食堂で昼食をとろうとしていた。

・・・こんなところで、またドジだけはしたくない。

そんな思いで昼食をもつて席につく。

と、目の前に誰かが座つたような気がした。

「ちよつとあんた・・・いいかしら？」

「ん？」

俺はその子の顔を見やる。

(誰だつて、この子・・・)

どこかであつたような感じがする。

(失礼がないようにそつと) 彼女の顔を見る。

そして彼の中で一つの答えが導き出された

(ああ・・・あー！何日か前はふーかーた手たせ・・・なんかが硬いし、マジで怒ったのか？)

言つてゐるような顔だつた。

そしてあるかは僕にもわからぬ

方言の研究

「私を、護衛してくれないかしら」

待つが彼女の言葉は「それ」

やや間はあつたものの、驚きの中で絞り出せた声はそれしかなかつた。

仕方がないとは思わないか？  
急に現れて、急に何を言い出すかと思つたら、「護衛をしてほしい」

疑問を抱いた俺は問う。

一  
・  
・  
・  
誰  
が  
？

「。 。 。 。 。 。 ま ॥ ॥ ॥ ॥ つ ?

俺の問いに即答して見せた彼女は、状況がいよいよ読み込めなく

(護衛つて……この子を?!俺弱いのに?え、ちよつと待てよ、そもそも  
も・・・・・何で俺?)

混乱する俺を見て、彼女は首を傾げた。

俺が未だに答えを出さないのを不思議がついているようで、彼女なりに考えをまとめたのか、声を発する。

「報酬は、払うわよ?」

「なんだよ、報酬つて！」

別にそういうわけじやないんだって！ そう言つ間もなく、彼女は言葉を紡ぐ。

「お金でもいいわよ。別に、何かのお手伝いとかでもいいし・・・」  
ほほえみながら、彼女は報酬の内容を話した。

ほほえみながら、彼女は報酬の内容を話した。

それを言われてなお、俺は困惑する。

これは確実に、彼女のペースで進んでしまつてゐるのだ。

( 開け二かな 。。。

そんな不安に駆られながら、俺はふと思つた。

これまで、俺はず

・・・これはいい転機ではないだろうか？

誰かを守れるやつになれば、俺も少しは変われるのではないだろう

か？

いや、違う。

これからは、今までと違う俺になれるかもしね。・・・なるんだ。

誰かを守れるやつになりたい！

そんな結果に行きついた俺は少しでも勇気を出そうなんて思った。

「……いいぜ。お前の護衛、するよ。その代わり、報酬つていつても

「ええ、恩に着るわ。本当

「…………じやあ、その。あれだ……」

俺はその言葉を受けて、言葉を絞り出した。

「・・・・・友達に、なつてくれねえか?」

え？」

俺のその『報酬』の内容に、そいつは目を丸くした。  
うう、そりゃあそんな反応もするだろうさ！

ううそりやあそんな反応もするだろうぜ！

ううそりやあそんな反応もするだろうさ！

「俺、友達いねーから、すつげえほしかつたんだよ」

うな顔をする

なんだか顔が赤いような気がしないでもないけれど、俺はそういうの言葉をまた待つ。

いいわよ あなたの友達 増やしてやるわよ」

そっぽを向きながら、そいつがそう言つてくれる。

それが嬉しくて、俺は少し詰め寄りながら戸を開ける

ん  
だ?  
└

「レミリア、か。俺はティリノだ。はろしくなー」

「……ええ、よろしく、ティーノ」

お互いが笑いあい、軽く握手を交わす。

護衛っていう仕事が、俺にとつて本当に転機と呼べるものになると  
は。

この時の俺は、そんなこともつゆ知らず。

友達ができる、という嬉しさに心を躍らせていた。

## 二十九話：デイーノの人探し

レミリアの隣で、ぼんやりとしているふと、一つの考えが浮かんだ。

つい「はっ」と声を上げてその場に立ち上がる。

隣にいた彼女がいぶかしむような表情でこちらを見上げてきた。

「どうしたのよ、いきなり大きい声だして」

案の定聞かれた。

さきほど、俺は護衛の仕事を引き受けた。

引き受けたは、いいのだが。

がつくりと肩を落として俺は答えた。

「・・・そういうえば、俺、弱えんだった・・・」

「は？」

訳が分からないと言わんばかりにレミリアが顔をしかめる。

俺はやや言い訳に聞こえるかもしれないが、ぶつぶつとしゃべりだした。

「護衛ってことは、誰かと喧嘩になつたら俺が守るんだろう？でも、俺力もないし、銃も使えねーし・・・つーか、運動音痴だし」

隣から、ぶちつという音が聞こえた。

レミリアがこぶしを震わせていた。

「うくくくく・・・。コホン、だつたら」

青筋を浮かべながら、レミリアは落ち着いたらしく提案をしてくれる。

「強い奴にでも護衛の仕方、教えてもらいまさいよ」

呆れたように言うが、俺のために言つてくれてるんだよな、きっと。

俺はそれにもうなずいて「そうだな。サンキュー、レミリア」と礼を言つた。

レミリアは「依頼した身としては、しつかりしてもらわないと困るから」とそっぽを向いてそういってくれる。

それが照れ隠しのように見えて、俺は苦笑した。

「・・・でもなあ、俺、友達どころか知り合いもいねえんだよ？」

「悲しいわね」

「うつ、言わないでくれ」

「もう……。それだつたら探しに行けばいいじゃない。友達も増えるわよ」

レミリアも苦笑しながらそういった。

友達も、増える……。そんな言葉に俺は嬉々として「よし、行つてこようぜ！」とレミリアの手を引いた。

「ちよつ?! わ、私もなの……?!」

「いいからいいから！」

☆ ☆ ☆

「し、失礼しました……」

ガラガラ、と戸を閉める。

はあとため息をついて俺は廊下の壁にもたれる。

「話しかけられないんじや、しようもないじやない……」

「うう、面白い。……よし！ もう一回だ!!」

（今度は生暖かい目で見られるのがオチだと思うけど……ま、いつか）

☆ ☆ ☆

中庭に出てきた俺は、がくりとうなだれ、頭を抱えてその場にしゃがみこむ。

そんな俺についてきてくれていたレミリアは「どうするのよ」と声をかけてきた。

俺の眼尻には涙が浮かんできてい、それを見たレミリアはぎょっとした。

「マジで、どーしよう……」

あせあせと言葉を選ぼうとするレミリアを見て、俺は涙をぬぐう。えつと、あの……そんな言葉が彼女の口からこぼれるので、俺はなんだから珍しいなどと思つてしまつた。

（……レミリアがこんなに焦るなんてなあ）

こほんと咳払いしたレミリアは、改めて口を開く。

「……まあ、別にいいんじやない？ 私もバカじ————」

「ヴォ”オ”イ!!」こは俺の繩張りだア！死にたくないやつはさつさと出ていけ！」

と出ていけ！」  
雄たけびに近い声が聞こえて、中庭にいた他の人はそそくさと  
どつかへ行く。

「スクアーロ・・・！」

卷之三

「誰よ、そいつ」

レミリアのほうを見やると、彼女はどこか据わつた瞳でスクアーロ

「す、スクアリコつて言つて、先輩でも構わぬケンカ売るやつなんだ」

「要するに不良ね」

とあえずおひでおひで、俺は口を開く。

「でも、つえーし……。この学校、結構裏でも荒れてるからな……。

説小一九

レミリアが声を上げる。

立ち上がつて俺の背中を押した。

「え？！」

「ほら早く！」

俺はレミリ

俺はレミリアの元から離れてスクアーロの元に向かつた。  
近くで見ると、すごい威圧。

・・・すつごく、怖いです（震え声）

•  
•  
•

スクアーロは半眼でこちらを見上げてくる。

明らかに、（なにこいつ）と思つてゐるような目だ。

うう、怖い……が、言わなければ！

「あ、あの、俺に護衛の仕方……教えてください！」

「だが断るぞオ！」

「返事早いっ！」

遠くにいたレミリアが震える俺の代わりに突つ込むと、スクアーロは「ああ？」とすぐんで見せた。

「うう……頼むよ、スクアーロオ……お願ひだよ……」

俺はついスクアーロの服の裾を泣きながらつまんでそういった。

スクアーロは俺を見て目を丸くして、「うおおい！」と声を上げた。

「断られたぐれえで泣くなア！」

困つたようにスクアーロが言うと、レミリアのほうを一瞥して、大きくため息をついた。

?レミリア、何をしたんだろう?

「……チツ。しかたねえな……。わかつた！引き受ける！だからひとつくな！」

俺は「本当か?!」と声を上げてスクアーロの肩をつかんだ。

「ただし！」

俺を引き離しながら、スクアーロは人差し指を突き付けていった。「俺も護衛なんてしたことねえから、教えられねーが、お前の修行くらいになら付き合つてやれる。いいなア?!」

「ありがとうスクアーロ！本当に助かるよ！」

涙をぬぐいながら俺がそう言うと、スクアーロはそっぽを向いてまたため息をついた。

「よかつたわね」と声をかけてくれるレミリアに、俺は大きくうなづいて感謝の意を伝える。

「レミリアもありがとな。お前が背中押してくれたおかげだ！」

「……別に、私は何もしてないわ。あんたがいつまで経つても行動しないから、イラついただけで」

「は、ははは……」

その言葉に俺は苦笑しながら、レミリアの次の言葉を誤魔化した。

この日からレミリアのために修行することとなつた！  
よーし、飽きられないよう、がんばるぞ！

## 三十話：パーティー会場の悲劇

しばらく経つて、レミリアが浮かない顔をして俺の目の前に現れる。

こんな顔するなんて、よっぽど嫌なことがあつたのだろうか・・・。そんな風に俺が考えていると、レミリアは顔をうつ向かせた。俺はなんだか間がもたなくなり、つい問う。

「で、何だよ・・・。レミリアが頼みたいことって」

そう。

レミリアは俺の元まで来たかと思うと、「頼みたいことがあるの」といつて、俺を中庭・・・人気のないところへ連れていった。そして、今に至る。

「・・・これよ」

彼女は封筒を取り出し、俺に手渡す。

俺は何気なく宛名を探す。

「私の家から、手紙が送られてきたの」

「へー・・・？」

「今度のパーティーに、私も参加しろって。だから、あんたも一緒に来なさい。・・・ボディーガードとして」

「え？ 俺？」

俺は、彼女の言葉に自らのことを指さす。

「ええ」

「いいけど、勝手に人連れてきて大丈夫なのか？」

「いいのよ。一人や二人ぐらい・・・それに、私・・・いえ、なんでもないわ」

「わかった・・・。俺も行くよ。一人じゃ心細いんだろう？」

「・・・っ！ そんなわけないでしょ、馬鹿！」

ぼこつと一発殴られ、俺は「おおう」という声を上げた。パーティーカあ・・・。

俺はわくわくしていた。どんな楽しいパーティーなのかと！

「それで？」

パーティー会場に向かう車内で、レミリアが声を上げた。

「なんでスペルビまでいるのよ」

「俺にもよくわからねえ」

助手席で首をかしげるレミリアに、俺の隣でスクア一口がレミリアの問いかに答えるように、ぽつりと声を漏らした。

俺は二人に聞こえるような声で答えを告げる。

「ほら、俺よりスクア一口のほうが強いだろ？それに、大勢で言つたほうがレミリアもパーティー楽しめるしさ！一人でもいいんだろ？」

「…………余計なお世話よ」

つんと彼女が顔をそむけながらそういう。

ガーン、と俺は肩を落とした。

うう、喜んでもらえるかと思つたのに……。

☆ ☆ ☆

パーティー会場はやつぱりいろんな人がいた。

それをぽつりとつぶやくと、レミリアからは「当たり前でしょ」と

冷たい言葉。

しかし、その表情はやつぱり楽しそうではない。

・・・なにか、あつたのだろうか・・・・・。

俺はとりあえず出されている料理に手を出す。

あ、美味い。

スクア一口にもそれを差し出すと、彼もそれを食べた。

「――久しぶりだね、レミリア嬢」

「……お久しぶりですね、おじ様」

(うわ・・・・)

レミリアに近づいた男は、ちよつと老けた感じのおっさんだつた。

・・・だいたい、三十後半くらいだろうか？

それぐらいに見えた。

「元気そうで何よりだよ」

どこを見て言つているんだ。

レミリアは現に、少しばかり顔を青くしてゐる。

俺がそつとレミリアの元に逝くと、俺の手に触れられた。  
俺にやつと気づいたおつさんは、問いを投げかけた。

「ところで、そちらの少年たちは友達かい？」

「……はい」

「俺は、警護で「あ、俺の友達です！」……オイゴラア」  
浮かない顔をして黙るレミリアの代わりに、俺が答える。  
彼はけして、レミリアの表情に気づくことはなかつた。

……こんなにも、明白にわかるつて言うのに。俺でも、わかるの  
に。

「そうか。では、私はこれで」

「……はい」

レミリアは間を開けて、「さよなら」とつぶやいた。  
おつさんは離れていき、他の人と談笑する。

「……なんだ？あのおつさん」

「私の親戚」

先ほど少々おびえた態度をとつていた割に、淡白に答えるレミリ  
ア。

俺は「そうか」と答えて、……一つ、疑問を口走つた。

「なあ、レミリア。……俺ら、周りからめつちや見られてないか？」  
「多分話しかけてくるわよ」

ため息交じりに、レミリアはそう答えた。

俺がつい、「えっ？」と返すと、スクアーロが俺らの元を離れる。

「俺は、抜けるぞオ」

「えつ、ちょ、待てよ……て、もういねえ……」

「……勝手にさせておきなさいよ」

俺の服の裾をつかみながら、レミリアがうつむきがちにそいつ  
た。

「さつきから、どうしたんだよ……大丈夫か？顔色、悪いぞ」

「…………私、苦手なのよ。あの人たち……だから、その……  
少しだけ、裾、つかんでもいい？」

「いえーぜ……でも、あれだなあ」

「? なによ」

きゅつとつまんでくるレミリアに不満はない。

むしろ、これくらいでいいのかと思う。

・・・その成果、体が動いた。

「こつちのほうが、安心しないか?」

ぎゅうと握る。

俺は彼女の手を取つて、握つた。  
手をつないで、俺は笑いかける。

ボボツと顔を赤く染めるレミリアに、俺は怒るスイッチでも押してしまつたのかと思ったが、それでもなかつた。

「・・・・・・ばかじやないの?」

そっぽを向いて、それだけ、つぶやかれた。

俺はそれを聞いて笑つた。

他の連中よりクールなレミリアが手をつなぐぐらいで照れるなんて!

俺らはしばらく、親戚の人々と談笑し、俺らだけで話し、飯を食つていた——そしたら。

パリーン!!!!

窓ガラスが割れ、室内に散乱する。

悲鳴と、謎のうめき声が響き、俺らは状況把握に少し遅れた。

「なんだ、あれ・・・モンスター?! って、こつち来るし!」

「大きいわね・・・全長10mつてところかしら」

「冷静に分析してないで逃げろよ! 俺は腰抜けたからおいていつてい  
い!」

しりもちをついてしまつている俺はせめてレミリアだけでもとい  
う思いでレミリアに叫ぶ。

すると、彼女は呆れた顔で言つた。

「・・・あんた、本当にバカね。私がこんな倒し甲斐のあるようなエモ  
ノ、見逃すわけないじやない」

その言葉の後にレミリアは長い槍を取り出した。

赤い、紅い槍。

「れ、レミリア？」

モンスターにどびかかるレミリアは、鋭く突きを放つた。

それをモンスターはぎりぎりで避けられず、肩を深くえぐられる。

「グオ、アアアアアアアアアアアア」

「うるさいわね……まつたく」

くるくると一回振り、耳に指を入れてモンスターの奇声が聞こえないようにするも、ため息をついて彼女は地を蹴る。

「はっ！」

上段から振り下ろし、一旦槍を後ろへ振つてからまた突き刺す。

今度は的確に心臓部を貫いたらしく、妖怪は何度か痙攣した後、くたりとその場に倒れ伏した。

鮮血は噴き出していないらしく、彼女には返り血が……ついていた。

おそらく俺の死角になつてゐる部位で噴出した血があつたんだろう。彼女の右半分はほぼ鮮血にまみれていた。

「……しくじつたわね。せつかくのドレスが」

「おおおお、おい、レミリア大丈夫か?!」

「あんたも見てわかるでしょ、ただの返り血よ。怪我はないわ」

「なら、よかつ——レミリア、後ろ！」

「ツ！」

俺が指さした方向には、同じ類のモンスターが室内に入り込み、レミリアに拳を振り上げていた。

レミリアはその場にうずくまり、衝撃を槍で防御しようと槍を頭上に構えてそれを待つた。

しかし、いつまでたつても衝撃は来ない。

「スクアーロ！……と、誰だ？」

「ケツ。……ウ”オ”オ”イ”！俺にもこのデカブツもつと寄越せエ!!」

「……うるせえぞ、カス共」

そのスクアーロの後ろには知らない人がいて、その人は手から炎を……えつ、炎!!

その人をよく見る。

いや、知らない人じやない。  
知つている!!

「ざ、ざざ、ざ、ザンザ s」

ドゴオオオオオオン!!!

爆音が響く。俺はとつさに目を閉じて、端っこでプルプルしていった。

・・・しばし、静寂が訪れる。

目を開ければ、目の前には槍をしまつていたレミリアが立つてい

た。

「何ボーッとしてんのよ、役立たず」

「や、役立たず・・・」

「・・・まあでも、無事でよかつたわよ」

「はは、ありがとな」

「・・・・・・ツ。別に」

レミリアが顔をそむけて、その視線の先に会つた先ほどのモンスターを見つけて顔をしかめる。

俺もそちらを見やり、「あれ、なんなんだろうな」とつぶやく。  
「どこかで、見覚えが・・・あるような、ないような・・・?」

「?そう、なの?」

「・・・いえ、気のせいかもしれないわ。この惨状・・・どう説明するべきかしらね」

「あつ、確かに。ザンザスとスクアーロが遠慮しないから・・・」

「ウ”オ”イ?!俺のせいいかア!?”

「・・・・・うるせえ。俺は一足先に帰るぞカス」

ザンザスはそのまま踵を返した。

・・・何しに来たんだろう。

レミリアはそんなザンザスなど知らぬといった風に話を続ける。

「まあ、私が責任とるわよ。あんたたちは私の知り合い・・・友人つて理由で連れてきてるから」

「そうか・・・ごめん、レミリア」

「いいのよ」

苦笑して見せるレミリアに、俺は幾分か心が落ち着いた。

「さて、親戚のおじさま方に事情聴取される前に、あんたたちは早く行きなさい。あとは私に任せて」

「わかった。じゃあな！」

「・・・・・」

俺はスクアーロと一緒にその会場を出た。

何だつたんだろう、あのモンスター・・・。

レミリアのことも心配だ。ボディーガードの件に関して・・・もつと真剣に取り組む必要があると思つた。

いやでも、レミリアあんなに強いならボディーガードの意味、ないじやん？

### 三十一話：デイーノとレミリア

どうしてこうなった、とデイーノは強く思った。

目の前でロマーリオが自分より小さいその人を手で示して、「…というわけで、こちらが坊ちゃんの家庭教師をしてくださるお方だ」と、そう言つたのだ。

示されたその人は、見るからに赤ん坊で。

「リボーンだ、よろしくな。ヘナチョコから立派なボスにしてやる」赤ん坊・・・リボーンは確かにそ宣言した。

デイーノはしばし硬直した後、信じられないといった様子で口を開く。

「はあ?! ちょっと待てよ、冗談だろロマーリオ。こんな赤ん坊が――一つあつ?!

デイーノの腕に痛みが走る。

「俺は赤ん坊じやねエ」

「い、痛い！ 痛いって！」

いつの間にカリボーンに腕を持たれ、そして締め上げられていたのだ。

容赦のないその攻撃に、デイーノはすぐ悲鳴を上げてしまう。そんな彼の様子を見て、リボーンがため息をついた。

「…・情けねえやつだな」

にやつと口角を上げて、そう言うリボーンに対して、何も言えずにいた。

ぼうつとしているデイーノに、リボーンは聞いた。

「…・いつまでも女に守られていたいのか?」

パーテイー会場での戦闘が思い出される。

『役立たず』

思つたより傷ついたあの言葉が聞こえてきて、デイーノは自分の頬

をはたいてリボーンを見下ろした。

「…・嫌だ」

「なら、さつそく特訓だ。ヘナチョコを直すぞ」

☆ ☆ ☆

それから、なにをしたつけか。

なんてディーノは寝転がって息を荒げながら考えていた。  
撃たれかけ、しごかれ、無駄だと思えるようなその特訓にディーノ  
はすでに疲れ果てていた。

「お前、動きはまあまあだが判断力とかがねえな。よく転ぶし」

「それ関係ないよな・・・？」

ゼエはあと肩で息をするディーノの頭の近くに立つたりボーンは、  
冷静に特訓の中でのディーノの能力を分析していた。

嘆息するリボーンにディーノが小さく突っ込む。

やる気をなくした彼は、頭の後ろで腕を交差し、小さく愚痴をこぼ  
した。

「俺、もともと弱いし・・・ボスにもなれねえよ」

それを聞いたりボーンはディーノのほうを向き、鋭く頬に拳を入れ  
た。

軽く吹つ飛んだディーノは殴られた頬を抑え、「なんだよ」と抗議す  
るように声を荒げた。

「お前のそーいうところがヘナチョコだつて言つてんだ」

叱るような口調でリボーンが言う。

そして、黙つているディーノに向けてつづけた。

「部下を守る覚悟がなけりや、ボスにはなれねーぞ。・・・・・そ  
うだな」

にやり、と口角を上げて笑うリボーン。

いぶかし気に彼を見上げたディーノは「なんだよ」とその笑みの意  
味を質問した。

「お前、婚約者つくれ」

突然のその発言に、ディーノは目を瞬かせる。

「・・・なんで今の流れでそんな話になるんだよ?!」  
強い口調でそう問い合わせるように聞いた。  
リボーンはディーノを見て、

「ファミリーの奴らに甘やかされて育てられて、守られた経験しか無さそーだからな。わかりやすい、守る対象がいたほうがいい」

自分をヘナチョコじゃなくすための提案をしてくれたことはわかつたのだが、ディーノは複雑そうな顔をした。

「そんなこと、言われてもな・・・」

「まあ、ゆっくり考えろ」

リボーンはそう声をかけて、その場に座り込んだ。

胡坐をかいて、ディーノが考え出すと、リボーンは鼻提灯を膨らませ始めた。

(確かに「婚約者」つて結婚する人だよな? そんな軽々しく決めるもんじゃないだろ・・・)

しばらく経つて、ディーノはそんな考えをするようになつた。

ガシガシと頭を搔いて、考え方を続ける。

(なんていうか、そういうのはやっぱ気持ちがつていうか・・・「婚約者」を決めたからつてそいつを守りたくなるかつて言うと、また別問題のような気がするし)

(・・・つーか、俺、女の知り合い、いるのか?)

根本的なところに行きついてしまつた。

ぱちくりと瞬かせるディーノは、やがて「あつ」と声を漏らした。それと同時に、リボーンの鼻提灯がパンンとはじける音がする。

(――レミリア、しかしねえ)

たつた一人の女の知り合いの名前を上げて、ディーノはしばしつまつた。

リボーンがその隣に立つて、

「決まつたようだな」

と声をかけた。

「え?・・・まあ、一応?でも・・・」

返事をしてから、ふと思う。

迷惑ではないか。急にそんなことを言つて、彼女は怒りはしないだろうか。

そんな不安を抱え始めたディーノに対して、リボーンが言つた。

「考えるよりこういうのは行動だ。行け」

チャットとピストルを構えて、デイーノを脅す。

慌てふためいたデイーノは「すぐ行きます！」と言つて、すぐさまその場を駆けだした。

☆ ☆ ☆

「ということで、俺の婚約者になつてください！」

第一声、頭を下げてお願いをした。

人気のない廊下で、二人は向き合つて立つていた。

デイーノの言葉を聞いたレミリアは意味が分からぬといふうに、「はあ？」と聞き返す。

確かに、そういう反応をされても仕方ないと思つていた。実際に思つていた反応を返されると、意外と辛いものがあるなどデイーノは顔を伏せた。

「あー……やつぱり迷惑だつたよな……でも、レミリアだつたら話しやすいし、強いし、良いやつだし、なんだかんだ言つて優しいし……」

ぽつりぽつりと理由をつぶやくデイーノ。

その言葉にレミリアは顔を赤らめる。

「な、な・・・・、何言つてんの！恥ずかしいからやめなさい！」

「えつ、ごめん、怒つてる？」

「当たり前よ」

照れ隠しで怒り始めたレミリアに対し、デイーノは申し訳なさそうに聞いた。

即答されて、デイーノは肩を落とす。

「意味が分からぬわ。だいたい、『話しやすい』とかいう理由で婚約者になつてと頼むだなんて、馬鹿じやないの？」

鋭く言つたレミリア。

勢いだけで頼みに来たデイーノは、すっかり縮こまつっていた。

「でも、俺は……」

「私の足しか引つ張らないあなたが、私に婚約者になれというだなん

て、少し身の程知らずじやないかしら」

正論だ。

デイーーノはきゅつと口をつぐんだ。

「たしかあなたはまだ特訓の最中なのよね？ならそれを放つておいて私にお願いをしに来なくつてもいいのではないいかしら？」

ふつと笑つたレミリアは、やれやれと首を振つて言葉を切つた。

デイーーノが反応しないのを見て、ため息交じりに言う。

「・・・そこまで、あなたが強くなるのをあきらめて、護衛から降りたいというのなら、止めはしないけれど――――――」

「違う」

デイーーノの低い声が、レミリアの話を遮つた。

驚いたレミリアが一步下がると、肩が壁と触れる。

素早くデイーーノが頬の横に手を置いて、レミリアの手首をそつと握つた。

「コレも、強くなるためなんだって、言われたんだ。・・・それに、俺に友達がいないのも知つてるだろ？だから、レミリアしかいないんだよ」

話し始めたデイーーノと入れ替わるようにして、状況を把握できていないレミリアがデイーーノを見上げて黙りこくつた。

「・・・いや、違うな」

首を振つて、先ほどの言葉を訂正した。

「レミリアしかいないんじゃない。レミリアじゃないと、嫌なんだ」

レミリアの肩にそつとひたいを乗せ、デイーーノはしばらく口を閉ざした。

どうして、レミリアじゃないと嫌なのか。

ほかの女を見繕つてもらつてもよかつたはずだ。きっと父と口マーリオなら、頼めば誰か紹介してくれそうだが。

なにより、『ほかの女の知り合いがないから』とここまで来たわけだが、本当にそれだけだったのか。

(――ああ、そうか)

デイーーノの頭に、ある答えが浮かぶ。

「俺は、レミリアが好きなんだ」

目を見て、はつきりとそう告げる。

間違いようもない。いつからそうなのかと問われても、わからないけれど、そうなのだ。

「う、あ・・・」

真つ赤になつたレミリアがうつむいてしまう。

ディーノはそんな彼女を見て苦笑した。

「真っ赤だぞ、レミリア」

「う、うるさいわね・・・なんでそんなこと急に言うのよ・・・つてか、離れて！」

「うわ、ゴメン」

一步下がつて、レミリアの様子が戻るまで待つ。

レミリアがふうと一息ついたとき、しゃべりだした。

「・・・私が好きだから、婚約者になつてなんていつたの？」

「ん・・・と、わからない。けれど、レミリアがいいんだ。今まで頼りなかつたと思うけど、これからはしつかりレミリアを守るから」ぎゅっとレミリアの手を握つて、その質問に答えた。

やや顔を染めたレミリアはディーノをちらりと見あげ、

「・・・・・そう。まあ、守られてやつてもいいわ。でも次は逃げないで、ちゃんと私を守りなさいよ」

「！」

そっぽを向いたレミリアの言葉は、しつかりディーノの耳に届いた。

パアツと表情を明るくしたディーノがレミリアをぎゅっと抱きしめ、「ありがとう！俺、頑張るよ！」

喜びをあらわにした後、にこにこと笑つて再び離れた。

それを見て、レミリアも口元を緩ませるが、すぐため息をついて「そういうのだったら早く特訓に戻りなさいよ」とつづけんどんに言った。

その態度がどうしても照れ隠しにしか見えず、ディーノは「ああ、わ

かつた」と返事を返しながら、しばらくレミリアのその姿を見てから、  
その場から走り去った。

「…………うくくくくくくく！」

顔を抑えて、うずくまつたレミリアは顔を耳まで真っ赤にして悶え  
た。

### 三十一話・記憶喪失の少女と王子

ここは日本。そして、今は夜。

唐突で申し訳ないが、この平和だった日本に、悪さばかりしていたマフィアが逃げ込んだ。

しかし、そのマフィアはすでにほとんど壊滅状態で、残党らが逃げ込んできただけだったので、特に被害はなかった。

逃げていたせいで、誰かに危害を加えよう、なにかをしてやろうとなんて、考える者はいなかつたのだが。

そのマフィアを追つて、その残党の始末を任せられた二人の男が日本に向かつた。

ドサツ。

鮮血をまきあげながら、残党は倒れ伏した。  
その背中を踏みつけ、男はあたりを見渡す。  
首を動かすたびに、長い髪が揺れる。

「……う、お、おい。これで終わりかあ？」

低くそう言うと、懐から取り出した通信機で、もう一人の男に連絡を取ろうと、声をかけた。

「おい、ベル。こつちは全員殺つたぞお」

そう言うと、ベルと呼んだもう一人の応答を待つ。

だが、帰ってきた声は彼の呼びかけに対してのものではなく。

『ああ……王族の血を流しちゃつたよお……』

「……チツ。また意識飛ばしやがった。めんどくせえなあ……」

男は深くため息をついてから、その場から移動することにした。

☆ ☆ ☆

青年が一人、そこに立っていた。

それを見た男はその青年に近づいて、彼の背中を蹴とばす。

「う、おおおおおおい!!!ベル、さつさと起きろお！」

受け身もとらずに蹴り飛ばされたベルフェゴールが正気に戻つた

か、男のほうを見上げて、「あれ……？」と声を漏らす。

その場に座り、首を傾げたベルフェゴールに対して男は嘆息する。

男が顎で指し示す方向をベルフェゴールが見やると、そこは惨劇の跡が残されていた。

死んだマフィアの残党たち。誰もが銃すら構えられぬまま無残に殺されている中、一人だけ銃を握つたまま倒れている男がいた。

彼が、『あんなつた』こととつなげて考えると、つまり、この男は必死に撃つたら一発当てて、——そして、氣をおかしくしたベルフェゴールによつて――。

男はベルフェゴールを見下ろす。

ベルフェゴールは申し訳なさそうに肩をすくめて、

「あー……スクアーロ、えつと……ごめん」

「ごめんで済むかア！また派手に被害出しやがつて……」

スクアーロはひどく呆れたようにベルフェゴールに対して言う。

ベルフェゴールは小さく縮こまつて、スクアーロの小言を聞く体制をとつていたが、しかし。

「——う、う……」

そんな声が聞こえて、二人があたりを見渡した。

「……つたく、どうせなら全員殺れえ。まだ生きてるやつがいんじやねえか」

「だーかーら、ごめんつて。ちゃんと殺してくるからさ」

ベルフェゴールが立ち上がり、声の聞こえたほうへ歩いていくと、緑の髪の少女を見つけた。

全身が紅い——血でまみれており、着ていた服が真っ赤に染まつてしまっていた。

「……女？」

「なんだ、一般人のガキか？」

痛そうにうめく少女を見てボソリとつぶやくと、様子を見に来たらしいスクアーロがそう問い合わせた。

眉を寄せたベルフェゴールがスクアーロに対して指示を仰いだ。

「どうしよー、スクアーロ？」

「・・・はあ。とりあえずイタリアに連れて帰れ、お前が」「えー」

「もともとお前が原因だろオガア！」

不満そうにするベルフエゴールに一つ言い放つて、何度も目かのため息をついて、

「・・・それに、俺は『オミヤゲ』を買ってかねえといけないらしい」「お土産？」

「ああ、マーモンに『五円チヨコ、ジャポーネ製の買ってきて！』って言われた。あとクソボス用の酒」

「・・・」

うわあ、と明らかに嫌そうな顔をしたベルフエゴールは、少女を見下ろした。

「ん・・・？」

少女は目を開けた。

体が締め付けられているような感覚を覚えて、自分の体を見下ろした。

包帯だらけの自分の腕、胴、足——とにかく、包帯を巻かれているのだ。

「あれ？ もう起きたの？ 結構傷深かつたのになー」

そんな陽気な声が前の座席から聞こえてきて、少女はそちらのほうを見やつた。

体を起こすとすると、体に痛みが走る。

「痛つ」と声を上げながら前の座席に座るその青年を見た。

「・・・と、いうか、あの・・・あなた、誰ですか？ それに、ここ・・・どこですか？」

二つの質問をすると、前に座っていた青年、ベルフエゴールが答えた。

「王子♪」

「・・・え？」

予想外の返答だった。

少女は自称王子と名乗ったベルフェゴールにいぶかし気な視線を向けた。

ベルフェゴールは少女のほうを向いた。

そのことで気づいたが、彼の目元は前髪で隠れており、目があつているかもわからない。

(王子様に見えない……)

「ん？ どしたの？」

「ほ、本当ですか……？」

「まーな」

嘘を言つている様子は見られないものの、少女にとつても信じられない、いや、信じたくないことだつた。

(……この人が、王子様……? )

「んで、ここでどこだかは秘密だぜ、ししあつ」

軽くそう言い、面白そうに笑つたベルフェゴール。

その言葉に目を丸くした少女が戸惑いながら言つた。

「でも、私帰られなきやいけないんです、けど……」

「無理」

「つ、なんでですか！」

即答されて、少女は痛みを訴える体を乗り出して、ベルフェゴールに向けてそう聞いた。

彼は少女に向けて、

「理由はけつこーあるけどまあ、『ここ、イタリアだから』」

先ほども浮かべた笑顔で、そう言い放つた。

少女はしばし硬直して、そして、「いつ、」と声を漏らす。

「イタリアって外国じゃないですか――――――！ どうしてですか――――――?! なんで――――――!!」

「しししつ、おもしれー」

パニックになる少女を見て、ベルフェゴールは心の底から楽しそうに笑つていた。

☆ ☆ ☆

目的地にたどり着いたベルフエゴールは少女を連れて部屋の中にに入る。

扉を開けて中へ入つた彼を見つけたらしく、中にいた二人の人が顔を上げた。

「あら、ベル、おかえり。早かつたわね？」

「……」

ふわふわと浮いてる幼児と、オカマ言葉の派手な男が声をかけてきた。

そんなオカマ言葉の男——ルツスーリアに対して、ベルフエゴールは嫌そうに、

「うるせー、寄るな、オカマ」

とだけ言つた。

ルツスーリアはむつと顔をしかめる。

「んまあ！ つれないわね——！ ……ってあら？ そつちのカワイイ子は？」

「……あ、の」

ルツスーリアの勢いに押されて、少女はベルフエゴールの背後に隠れてしまつていた。

涙をうつすらとじませている。

「……これ、お前のせいだろ。すげーおびえてんじやんか」

はあ、とため息をついてベルフエゴールは少女を見下ろした。

「ところでベル、この子何者？」

「んー？ 一般じーん」

浮いていたマーモンが問いかけると、軽い調子でベルフエゴールが返す。

それを聞いてか、ルツスーリアが口をはさんだ。

「ちよつと、それまずいんじやないかしら？ スクアーロが責任とつてボスに殴られちゃうわよ～？」

「いーじやん。いつものことだろ？」

「あ、……すいません」

そんな二人の会話を聞いて、少女は申し訳なさそうにそう謝る。

ルツスーリアは少女の頭に手を置いて、ポンポンと撫でて、

「あなたは気にしなくてもいいのよ。良い子ね、あなた。名前、聞いていいかしら？」

「わ、私の名前、ですか？」

優しい声音でそう聞いた。

少女は問われて、少し困ったように眉をハの字に寄せた。

「あ、それ俺も知りたい♪」

「・・・」

ベルフエゴールまでも聞きたがつたので、言いにくそうに少女は頬を搔く。

そんなしぐさをするものだから、マーモンも声を上げた。

「ム・・・。答えたくないのかい？」

「違います」

マーモンの言葉を否定して、少女は言い放つた。

「その・・・名前が、思い出せないんです」

### 三十二話：少女の居場所

『名前が思い出せない』と告げてから彼らと少しばかり話した。本当に楽しそうな人達で、知らず知らずのうちに少女の肩の力も抜けていた。

彼らはVARIA<sup>ヴァリア</sup>と呼ばれる組織に所属している、とその時に聞いた。

少女はそのVARIAの名前を聞いただけで、その組織がどういった内容の仕事をしているのかは聞かなかつた。

彼らが所属しているというVARIAの本部に（ベルフエゴールに連行される形で）訪れた少女はその日、とある一室のソファで眠つていた。

誰かがその部屋に入ったようで、部屋の明かりがついたことで、少女が目を覚ます。

「おっはよー。記憶、戻つた？ ししあつ」

「…ベルつて、結構サドだよね」

ベルフエゴールとマーモンが少女の眠つていたソファの近くに立つていて（片方は浮いているけれど）、少女の視界に入つた。

少女は起き上がって、二人のほうを向いてペコリと頭を下げた。

「…ベルさん、マーモンさん、おはようございます」

そう彼らに向けて挨拶をする。

ベルフエゴールが「おー♪」と返し、マーモンが「おはよう」と返すと、少女はどこかホツとしたように微笑んだ。

実は、昨日の会話で自己紹介を受け、彼女はやつと彼らの名前を把握することができたのだ（ただ、間違つて覚えていたらなんて不安が少しだけあつたが、杞憂だつたようだ）。

名前も知らない人と話すのは少し怖かつたから——そう、思った時、少女は自らの名前すら覚えていないことに気づいた。

（…き、気にしないようにしよう！）

そう割り切つた少女は、包帯を巻かれた腕をちらりと見やる。

動かすとまだ痛む。昨日、意識を取り戻したばかり程の激痛ではな

いものの、しばらく行動が制限されてしまうかもしれない。

歩けはした。走ることは無理だろうが、でも――。

と、考えていると、ベルフェゴールが声をかけてくる。

「そりあえず、お前結構ケガしてるから、今日はゆっくり休んどきな

「・・・すみません」

と、そう少女が頭を下げる。「あら～」と声が聞こえる。

少女が頭を下げる同時に、部屋の中に現れたルツスーリアが近づいてきて、座る少女の肩に手を置いた。

「謝ることないのよ。記憶がないのだったら、今日だけじやなくて、ずっとここにいたら～？」

「オカマにしちゃあ良いこと言うじゃん」

ルツスーリアの言葉に、少女は口を開閉させて、なんていおうか戸惑つていると、ベルフェゴールがどこか楽し気に声を上げた。

そんな二人に挟まれながら、困ったように少女が二人を一瞥する。  
(嬉しい話だけど、なんでそんなことに――?)

イタリアに滞在するなんて、あまりにも無謀じやないのか。少女はイタリア語なんてしゃべることさえできない。一言二言、知っているくらいだ。

それなのにどうして、とおもつた少女はどこか遠慮がちに声を上げた。

「で、でも・・・迷惑じやありませんか?」

「ボスに許可を取ればいいだけだし。それに、お前がV A R I Aにいたら、俺うれしーぜ?」

「へっ!」

ベルフェゴールの予想外の言葉に、少女は顔を赤らめた。

なんてことを言ってくれるのだろうか、と少女が思つていると、マーモンが口をはさんだ。

「とりあえず、僕は反対しないよ。金に関係ないし。・・・でも一応、スクアーゴがこいつの情報を持ってくるのとボスが起きるのを待つたほうがいいよ、ベル」

「しししつ、わかってるつて」

そのまま、昼になつた。

ボスとはいつたい誰なのか、スクアーロと呼ばれる人が持つてくる自分の情報つて……？

不安に思つた少女がそわそわと落ち着かない様子でソファに座つていると、マーモンが何かに気づいたか、口を開く。

「どうやらボスが起きたみたいだね」

「……へつ？」

マーモンがそう言つて、少女が気の抜けた声を漏らすと同時に、部屋の扉が開かれた。

顔に傷のある男が入つてきた。……その後ろには、別の男性がついている。

後ろの男性が、少女を視界に入れたらしく、見慣れぬ顔だからか眉を寄せて「むつ?!」とうなつた。

「なんだそいつは！まさかボスの命を狙う刺かぐつ?!」

「……るせえ、レビイ」

男性——レビイが男に殴り飛ばされる。

男はレビューを放つておいて、近くの椅子に腰かけた。

「あ、あの……誰ですか？」

ルツスーリアの腕をつんづんとつづいて、そう聞いた。

彼はうつとりしたような顔で、

「我らがV A R I Aのボス、X A N X U S様よ。素敵でしょ♡」

(・・・素敵というか、怖いです……っ?)

フルフルと小さく首を横に振つて、心の中でルツスーリアの言葉に返した。

素的なところを探すために、X A N X U Sをジイツと見ていると、目があつてしまつた。

(ひつ……?)

身を縮こまらせると、X A N X U Sが何かをつかんで、それを少女めがけて投げてきたのだ。

少女は目をつむつて衝撃に耐えるべく構える。

しかし、聞こえてきたのは金属音。

「えつ・・・?」

「怪我ねーか?」

「は、はい」

ベルフエゴールがナイフを持つてそう聞いてくるので、少女はうなずく。

そんなやり取りの後、XANXUSがベルフエゴールに向けて聞く。

「・・・なんだ、そのガキ」

「えーっと、実は・・・」

そう、ベルフエゴールが説明しようとしたところで、バタバタと駆けてくる音が聞こえた。

「帰つたぞおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

駆ける音の主は部屋に入つた瞬間、大音量でそう叫んだ。

XANXUSが舌打ちをしてから手元の物をひつつかんで叫んだ長髪の男に向けて投げる。

「ぬるいぞお!」

それを避けながら、XANXUSの元へ向かう男は、その瞬間に頭をつかまれて床にたたきつけられた。

(なつ・・・?!)

「おー♪」

唐突の展開に、少女は絶句し、隣で見ていたベルフエゴールが愉快そうに声を上げていた。

XANXUSはどどめと言わんばかりに立ち上がり、倒れ伏した形になつた男——スクアーロを蹴り飛ばす。

「ぐがあつ!」

「黙れ、カス鮫」

その一言で片づけられてしまつたスクアーロがXANXUSをにらみつけるが、彼は涼しい顔だ。

諦めたのか、スクアーロは立ち上がる。

と、そんな彼にマーモンがふよふよ浮いて近づいた。

「大丈夫かい、スクアーロ」

「あ、あ・・・」

声をかけられて、スクアーロはマーモンのほうを見やる。

「——五円チョコ」

「オミヤゲのほうかよ！つーかふざけんな、あ、あ?!」

後から付け足されたその一言でスクアーロは眉を寄せ文句を言い、懐から取り出した五円チョコをマーモンに向けて投げつける。それを受け取ったマーモンは満足そうだった。

「・・・あと、もう一つの土産だあ」

ベルフェゴールに近づき、その胸に一枚の紙を押し付ける。

受け取り、スクアーロに「なんだよこれ」と問いかける。

「そいつの情報だ」

ベルフェゴールの持つ紙を、近づいたマーモンが読み上げる。

「名前、コチヤ サナエ。年齢・・・住所・・・——これだけかい？」

そう問い合わせると、スクアーロはうなずいた。

「あ、あ。おまけに写真も数枚しか見つかねえ」

そう付け加えると、レビイがその言葉に反応した。

「意図的に情報を隠されている、ということか」

「まあ、一般人ではねえだろう」

少女のほうを見て、スクアーロは付け加えた。

少女は戸惑いがちに、「えっと、あの」と言いよどんでいた。

「どうしたの？」

ルツスーアリアが問い合わせると少女は声を上げた。

「わ、私の名前つてサナエ、なんですか・・・？」

「なんか、思い出せた？」

「いえ、特には・・・すいません」

ベルフェゴールに聞かれて、少女は謝った。

そんな少女に対して、ルツスーアリアは声をかけた。

「いいのよ。気にすることないわよ、サナエちゃん」

「・・・はい、ありがとうございます」

少女——サナエは、その言葉にお礼の言葉で返すと、顔をほころばせた。

そんな中、XANXUSが部屋を出ていこうとする。

「おい、ボス！結局コイツどーすんだあ⁈」

「勝手にしろカス共。俺は寝る。スクアーロ、酒は後でもつてこい」

そう言い残して、XANXUSは部屋を出ていった。

そして、サナエを見下ろして、ベルフエゴールが話を切りだした。

「どーする？ サナエ」

「ここにいればいいんじゃない？」

「でも、それだと仕事をされる皆さんのが迷惑になりますし」

ベルフエゴールとルツスーリアの言葉に、サナエはそう言う。しかし、マーモンがそんなサナエに対しても、

「でも君、ほかに行くところないだろう？」

「それは・・・」

言われてしまえば、そうだ。

記憶もないまま、日本に戻ったところで結局変わらないだろう。事情を知っているうで、理解したうえで、住まわせてくれるところといつたら――。

「じゃーVARIAはいればいいじゃん！」

「あらあ！ それはいいわねー！」

「ええつ?!」

突拍子もない提案に、サナエは驚く。

それを聞いたスクアーロは頭をガシガシと搔きながら、眉を寄せた。

「それはいいが、ある程度の能力が必要だしな・・・。マーモン、イタリア語と各国の言語をこいつに教えてやれ。三週間ぐらいでなあ」「さ三週間ですか・・・」

「ベルは八歳の時、一週間で大体覚えたしな」

横目でベルフエゴールを見やつて、スクアーロはそう言つた。サナエも同じほうを向き、目を丸くする。

「す、すごいですね？」

「まーな。だつて俺、王子だもん」

得意げにするベルフエゴール。

「そうだな……お前が連れてきたんだ、ベル。お前が早苗の教育係やれよ」

「りょーかーいつ。しししつ」

あつさりと決まっていく物事に、サナエは呆然としていた。

(じよ、状況が理解できない……)

どうしてこの人たちは見ず知らずの自分を仲間に入れてくれるのだろうか？

サナエはベルフエゴールたちを見やつた。

なんて言つていいかもわからぬまま、サナエがあわあわとしている、マーモンがスクアーコに聞いた。

「言語を教えるつて言う仕事の報酬は誰からもらえばいいんだい？」

「あ、あ……？」

「んー、いくら？」

彼の言葉にスクアーコが反応したが、ベルフエゴールが口をはさんだ。

ベルフエゴールの問いにマーモンは一考して、

「Aランク分の二倍」

「じゃあ王子が払う」

さすがにそれはと思つたサナエがベルフエゴールに向けて、「あ

のっ」と声を上げて、

「べ、ベルさん、それは私に教えてくださるつていう報酬なんですよね？なら、少しだけでも私が……」

「けつこー高いよー？」

「でしたらマーモンさんのお手伝いでも……」

「マジ？ マーモン、どーする？」

ベルフエゴールに物申すと、彼はマーモンに再び問い合わせる。

「……」

どうするべきか考えているのだろう、マーモンは浮きながら、黙り

こくつてしまつた。

サナエはどうにか要求が通らないかと心の中で祈つていた。

(面倒を見てくださるつてだけでありがたいのに、これ以上迷惑なんてかけられませんつ)

その一心だつた。

「・・・一ヶ月、毎日三時間ぐらい手伝つてくれたら一割引き。それ以上はまけないから」

マーモンから、条件が提示された。

彼女が今のところやれることといつたら、言語学習と体の回復に努めることくらいだろう。

三時間ほど時間がつぶれるくらい、どうつてことないはずだ。

「やります！」

そう即答した。

そんなやり取りを見たベルフエゴールが、「しししつ」と笑いをこぼす。

「頑張れよ、サナエ。VARIA、結構楽しいぜ♪」

ベルフエゴールの言葉に、サナエはうなずいて、今この部屋にいるVARIAのメンバーのほうを向いた。

「みなさん、改めてこれからよろしくお願ひします！」

明るい声を上げて、頭を下げてそう言い放つた。

VARIAに、新たな一員が加わった。

はて、新しいメンバーである彼女が何者なのか――それは、  
彼女本人ですらわからない。